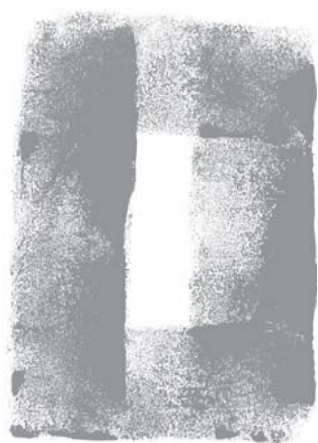


小豆島 災害の記憶





小豆島町長
塩田 幸雄

小豆島町の歴史は、昔から災害、渇水の繰り返しであったと思います。災害の歴史を回顧しますと、古くは江戸時代の正保元年から、たびたび別当川水系の災害の記述があります。畑が川になり、川が畑になると、幾度も災害が繰り返されてきました。

特に昭和 49 年災害では約 400 ミリの降雨を記録し、旧内海町では死者 29 人、重軽傷者 41 人、多数の全壊及び半壊家屋や床上、床下浸水が起こるなどの大災害になりました。

そのわずか 2 年後の 51 年災害では、6 日間間に年間降雨量をもはるかに上回る 1,400 ミリもの豪雨により、町内各所に山崩れによる土石流災害、ため池や河川の決壊による氾濫、浸水など、あらゆる種類の災害を誘発し、死者 35 人、重軽傷者 82 人、全半壊家屋 388 戸、床上及び床下浸水 4,229 戸など、全町的にまさに未曾有の大災害となりました。

49 年災害と 51 年災害を併せて、小豆島町では 64 人もの尊い人命と多くの公共財産、莫大な個人財産が一瞬のうちに奪われました。そして、私たちに多くの教訓と、大きな爪あとを残しました。

すでに、これらの大災害から 30 数年が経過し、災害の傷跡を見ることはなくなりましたが、決して忘れることのできない出来事であると同時に、大きな教訓を残し、今も毎年、7 月の第 2 日曜日に防災訓練を実施しています。

小誌によりまして大災害の記録と記憶が長く語り継がれ、今後の防災の一助となることを心から念願し、発刊のごあいさつとします。

平成 26 年 7 月

本書発行の趣旨

異常気象の時代。

過去に学び、いつでも起こり得る「いつか」に備える。

ここ数年来、異常気象と呼ばれる気象の変化が、各地でさまざまな災害を起こしている。ゲリラ豪雨、たつまきなどもあまり珍しい現象とは思わなくなるほど頻発し、2013 年の夏には最高気温を更新し、四万十市で 41.0 度を記録した。

2013 年 11 月 8 日から 9 日にかけては、観測史上最大級とされる台風 30 号がフィリピンに上陸し、中心気圧 895 ヘクトパスカル、最大風速 87 メートル、最大瞬間風速 98 メートルというすさまじい勢力により、950 万人が被害を受けた。11 月に入ってもこの海域の海水温が高いままで、台風の勢力が衰えなかったことが原因とされているが、その大きな要因が CO₂ 排出による地球の温暖化であることは容易に想像される。

また日本においても、台風 26 号によって伊豆大島に甚大な土石流被害が発生し、41 人もの尊い命が奪われ、多くの家屋が倒壊した。10 月 26 日という秋も終わりとなった頃に、824 ミリもの集中豪雨があったことが原因とされているが、これもシベリアの冷たい空気と太平洋の暖かい空気とのバランスが変化したことによって偏西風の流れが変わり、台風のコースが変わりつつあるせいだという。

小豆島においても、昭和 49 年と 51 年に集中豪雨があり、多くの尊い人命を奪ったばかりでなく、家屋や田畑のほか、インフラを破壊した。小豆島の人たちは、未曾有の災害に打ちのめされながらも、各方面からの支援を受け、復旧から、さらに災害のないまちへと歩んできたが、現在も、そうした異常気象がいつ起きても不思議ではない状況といえる。

本書は、昭和 49 年と 51 年に起きた災害を、その後の検証もまじえ、多角的に解明して刊行したものである。遠い昔の話ではなく、いつでも起こり得ることだと認識していただくとともに、過去の災害から数々の貴重な教訓を学びとっていただきたいというのが発行の目的である。

[注] なお、昭和 49 年および 51 年の災害時、小豆島は池田町、内海町、土庄町の 3 町からなっていたが、平成 18 年 3 月 21 日をもって池田・内海の両町が合併し、新たに小豆島町となった。したがって、本文では旧池田町、旧内海町と表記すべきであるが、煩雑さを避け、池田町、内海町と表記している。

小豆島、災害の記憶

.....

目 次

発刊にあたって 小豆島町長 塩田幸雄.....	3
本書発行の趣旨.....	4
【写真でみる】	
台風8号の被害（昭和49年）.....	6
台風17号の被害（昭和51年）.....	12
【総論】	
災害の原因をさまざまな角度から検証する.....	22
災害の歴史（風水害）.....	31
年表 小豆島災害の状況.....	32
昭和49年の災害	34
データで見る 昭和49年の被害の状況.....	48
災害救助費.....	48
復旧工事の状況.....	50
昭和51年の災害	52
データで見る 昭和51年の被害の状況	
内海町.....	80
池田町.....	82
語り伝えたい災害の記憶.....	92
復旧工事と防災対策.....	110
内海ダム再開発.....	117

台風 8 号の被害（昭和 49 年）

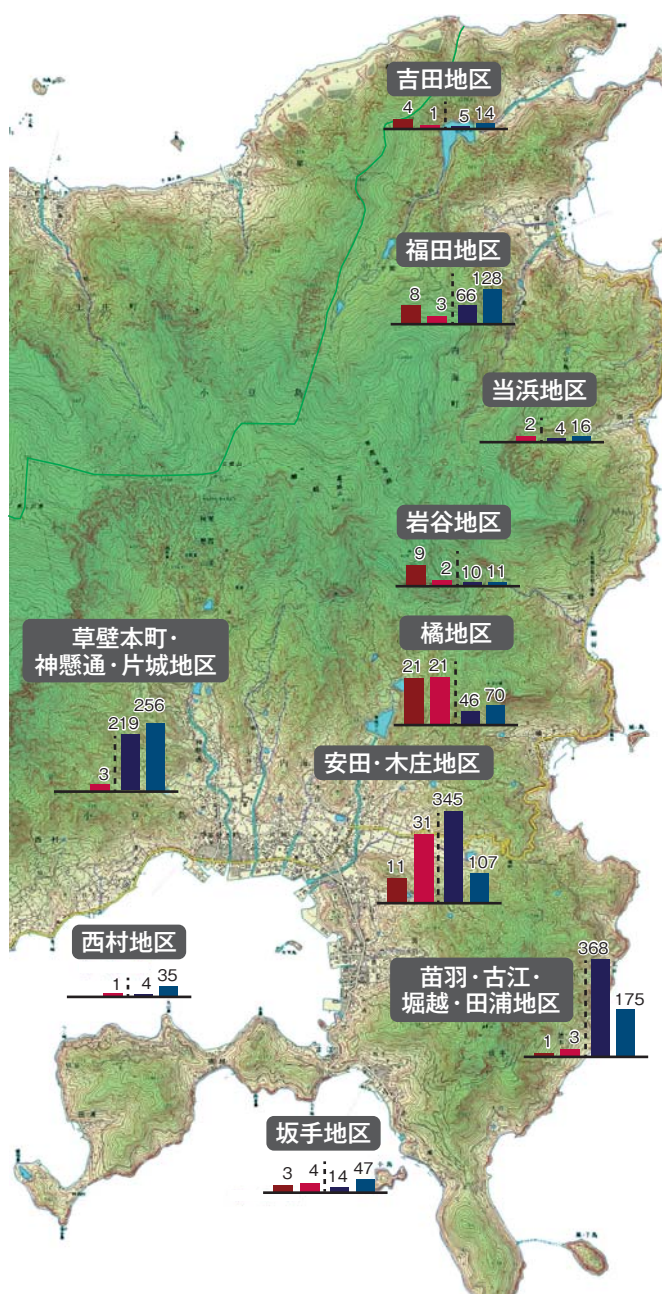
山津波、土石流、堤防決壊、
床上浸水……

自然が牙を剥く、
あらゆる災害が起きた



安田地区

安田大川は堤防が決壊し、ずたずたになった。川は大量の土砂で埋まり、倒壊した家の棟木や、根の付いたままの流木などが橋を塞ぎ、濁流が街なかへと氾濫した。また、諸口川 5 号橋は、破壊されて落ちた。



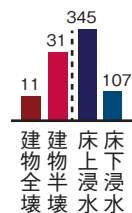
吉田地区

永田は、一夜のうちに土砂で覆われ、河原のようになってしまった。



福田地区

伊豆川が氾濫し、民家の軒先まで土砂が押し寄せた。伊豆川と近谷川の合流点より上流のようす。



〔凡例〕

グラフについては、
建物全壊・半壊（左）
床上・床下浸水（右）
の被害軒数をあらわす。
※人的被害は除く



橘地区

橘地区は3か所で山津波が発生し、19人の犠牲者が出た。



岩谷地区

裏山からの土石流により、民家は跡形もなく押し流された。（椎木川付近）



台風8号の被害(昭和49年)

轟音とともに
集落に襲いかかった山津波



福田地区

鉄砲水で流出した土砂や樹木に、民家は一瞬のうちに飲み込まれ、押し潰された。そのすさまじい破壊力に誰もが息をのんだ。



橘地区

橘地区は、コンクリートや石積みなどで補強する崩壊防止工事を進めていた矢先の災害だった。

福田地区

福田地区は昭和6年にも伊豆川が氾濫し、死者7人を出したことがあった。この災害でも、川の氾濫で濁流にのまれ、人命が奪われる結果となった。

大阪城残石も土砂とともに民家へ押し寄せた。



台風 17 号の被害（昭和 51 年）



池田地区

土石流により、信谷付近では田畑がすっかり埋まってしまった。



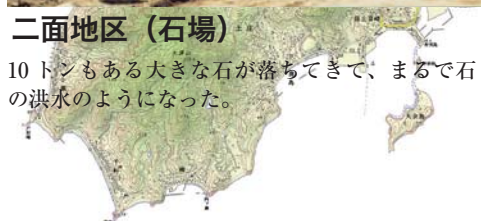
室生地区（赤坂）

死者4人、重傷者1人、軽傷者7人、全壊家屋10戸、半壊家屋2戸などの被害が出た。



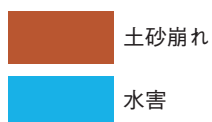
二面地区（石場）

10トンもある大きな石が落ちてきて、まるで石の洪水のようになった。

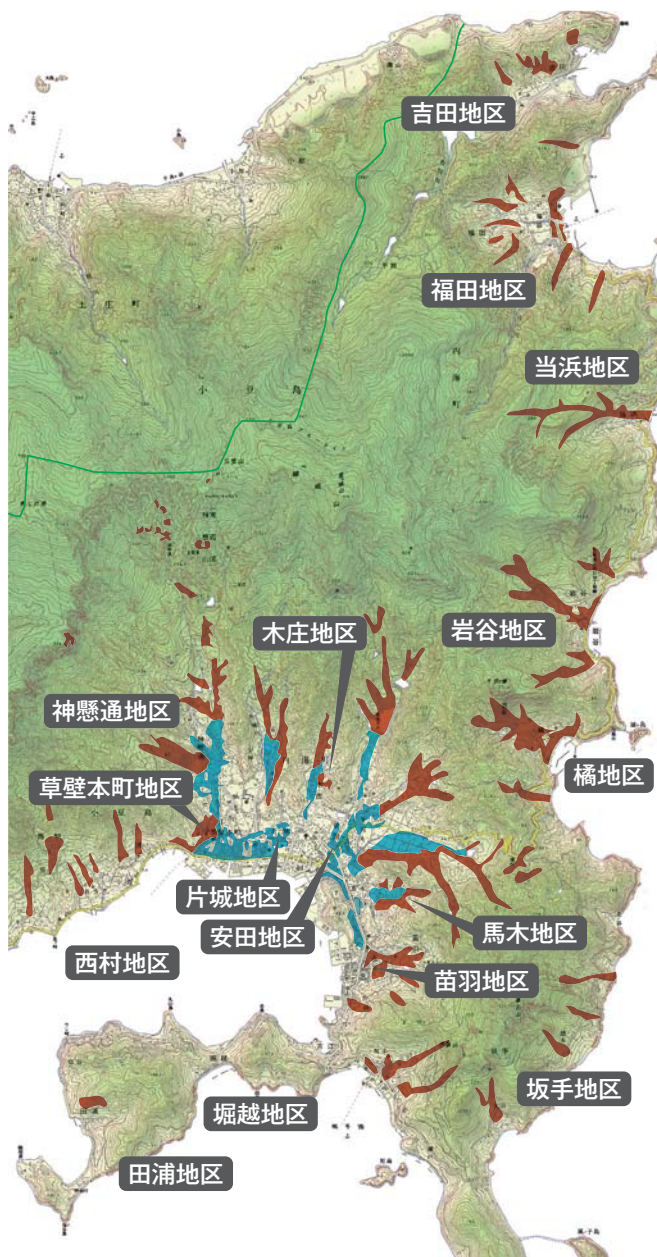


蒲野地区（谷尻）

死者24人、重傷者4人、軽傷者3人、全壊家屋20戸、半壊家屋2戸と、谷尻地区の被害は最も大きかった。



〔凡例〕
地図上の茶色は
土砂崩れの範囲を
水色は水害をあらわす。



福田地区

49年に続き、再び土石流に襲われた福田・吉田地区では全壊家屋19戸、半壊家屋7戸、死者1人、重傷者3人という大きな被害となった。



当浜地区

全壊家屋6戸、半壊家屋7戸、軽傷者2人の被害が出た。



神懸通地区

山崩れ、土石流などが発生し、地区全体では重軽傷者10人、全壊4戸、半壊22戸、床上床下浸水254戸を記録した。



西村地区（竹生）

谷という谷から土石流が起こった竹生は、広範囲に被害を受けた。西村地区は、6人が亡くなり、重傷者も8人を出すなど大きな被害となった。



西村地区（清水）

全壊家屋54戸、半壊家屋28戸、床上浸水84戸となった。



台風 17 号の被害(昭和 51 年)

1400 ミリという未曾有の集中
豪雨が山肌に爪跡を残した



西村地区（竹生）

南の上空から見ると島全体の至るところに大災害の傷跡が残っているのがわかる。

西村地区（日方）

急傾斜の山の、かなり山頂近くから大量の土砂が麓の集落に流れ込んでいる。

池田地区

小豆島の代表的な地場産業だった「電照菊」のハウスも、無残に水浸しとなった。また露地栽培の菊も濁流にのまれた。







災害復旧事業

河川が改修され、港湾も浚渫^{しゅん せつ}し、
もとの海辺の集落が戻ってきた。



福田地区

福田港に注ぐ森庄川、伊豆川は、大雨が降っても氾濫しないよう川幅を広げ、護岸をしっかりとしたものにする河川改修を行った。また、港に大量に流れ込んだ山からの土砂も浚渫し、漁船が出入りできるようになって、ようやく住民にもとの暮らしが戻ってきた。

蒲野地区（谷尻）

急傾斜地にあった集落が押し流されたことから、階段状の緩やかな宅地に造成し直された。



安田地区

安田大川の堤防護岸がしっかりとしたものになり、河床も下げられ、流路も拡幅され、増水しても災害の起こりにくい河川になった。



当浜地区

山からの土砂が海辺にまで達した当浜地区では、大量の土砂が集落を貫通する道路を塞いだが、それらが取り除かれて道路は拡幅され、家屋が全壊、半壊の被害を受けた住民のために、町営住宅も建てられた。





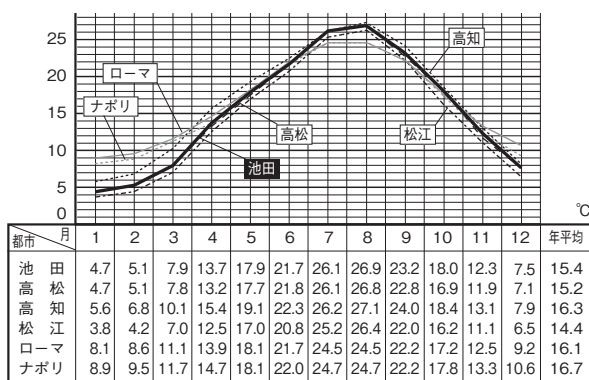
二面地区（石場） 上からの落石や大量の土砂にも耐えられるよう、谷に数か所の砂防ダムが造られた。



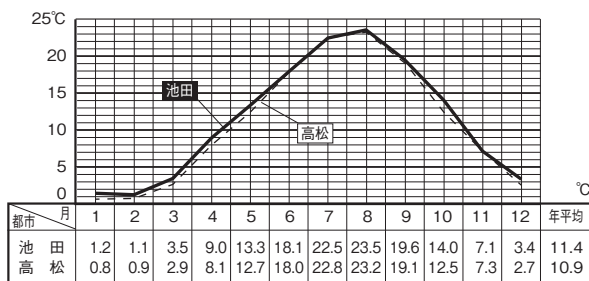
池田地区（上地） 土石流により、山の土や岩石に覆われていた農地は数年かけてそれらが取り除かれ、ビニールハウスも再建された。復旧した農地の面積は 10.03 ヘクタール、昭和 54 年 2 月に完成した。

なぜ、災害が起きたのか、 さまざまな角度から災害を検証する

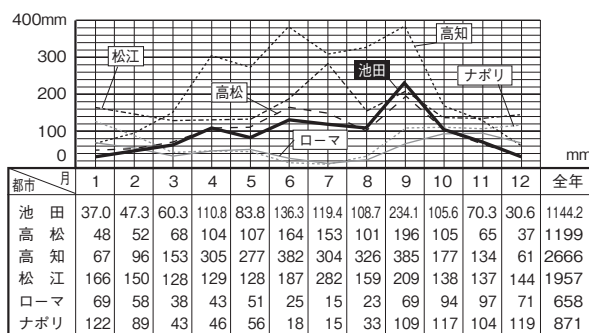
■月別平均気温



■月別平均最低気温



■月別平均降水量



〔資料〕高松、高知、松江は1951年から1980年まで30年間の平均値
ローマ、ナボリは1946年から1955年まで10年間の平均値
昭和57年理科年表（東京天文台編纂）
池田は1973年から1982年まで10年間の平均値
香川県農業試験場小豆分場観測

1 気象面から原因を探る

温暖で少雨——典型的な瀬戸内式気候の小豆島

小豆島は香川県高松市の北東約23キロメートルに位置し、東西21キロメートル、南北16キロメートル、面積は約170平方キロメートル。小豆島の最高峰は寒霞溪で知られる817メートルの星ヶ城山で、その他は150～400メートル程度の山々からなっている。

年平均気温は15～16度、年平均降水量は1100ミリメートル内外と、温暖で雨が少ない典型的な瀬戸内式気候である。

夏季は少雨に加えて気温が高いため水不足になりがちであり、冬季は、シベリアからの北西の季節風が中国山地の北側地域に雪や雨を降らせ、瀬戸内海地域へ吹き込むときは乾燥した冷たい空気となるため、降水量は極めて少ない。このため、小豆島では水の確保が最大の課題であった。

記録破りだった 昭和49・51年の集中豪雨

小豆島町の災害史に大きな痕跡を残したのが、「七夕災害」と呼ばれた昭和49年7月の集中豪雨と、それからわずか2

年後の昭和 51 年 9 月に起きた集中豪雨である。

昭和 49 年の集中豪雨は、西日本から関東地方にかけ、29 都府県に被害が及んだ台風 8 号によるものであった。このとき、池田町にはほとんど被害はなかったが、内海町では各地で「山津波」といわれる土石流が発生し、死者 29 人という大惨事となった。

2 年後の、昭和 51 年 9 月の集中豪雨は台風 17 号によるもので、山崩れにともなう土石流、がけ崩れ、地すべりなどの土砂災害、ため池や河川の氾濫、決壊による浸水などが島の全域で発生した。

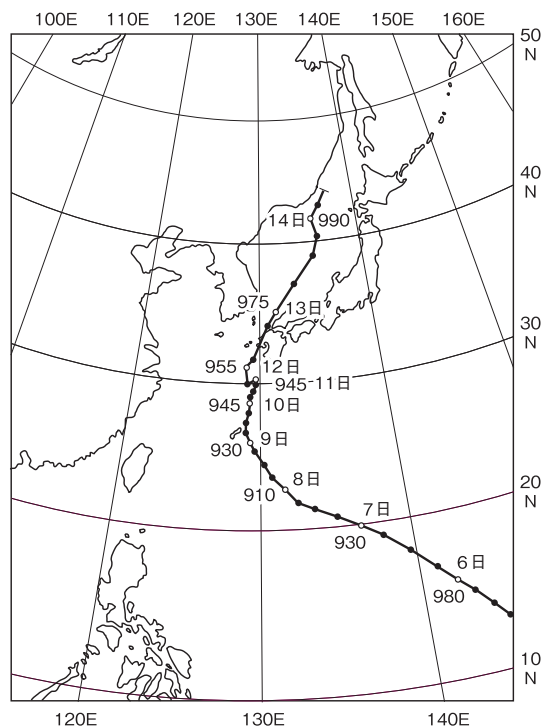
昭和 51 年 9 月 3 日、21 時にカロリン群島東部付近で発生した熱帯低気圧は、4 日 15 時に台風 17 号になった。次第に発達しながら北西へ時速 30 キロで進み、沖の大東島南方 200 キロ付近の海上に達した 8 日 9 時頃にもっとも発達し、中心気圧 910 ミリバール、最大風速 60 メートルの大型台風となった。

台風は、その後も北西進を続けたが、次第に速度が遅くなり、9 日には沖縄奄美大島を暴風圏内に巻き込み、臥蛇島付近で 10 日夜から 12 日午前にかけて、約 30 時間にわたり停滞状況が続けた。九州の南西海上に停滞しているあいだに、南の湿った空気が帯状に流れこんで、強い雨雲が徳島東部から県東部、小豆島にかけて停滞、四国地方では長時間にわたって大雨が降り続き、記録的な豪雨をもたらした。

台風停滞の原因はいろいろ考えられるが、直接的なものは、台風の北上中に偏西風波動の状態も加わって、太平洋高気圧が異常に発達したためと思われる。

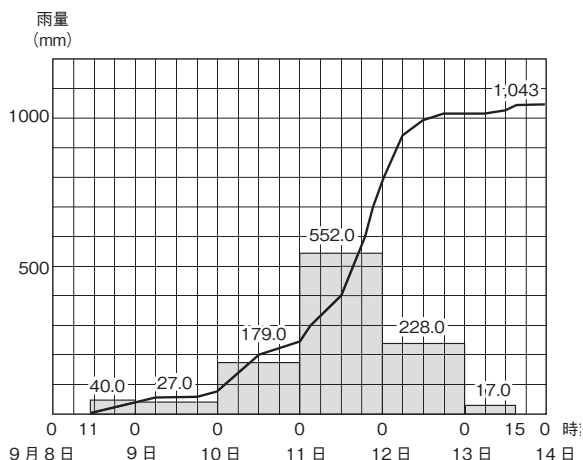
この太平洋高気圧が 12 日になって、大陸から東進してきた強い気圧の谷によって後退しはじめたのにもない、台風はやっと北上をはじめ、13 日午前 1 時 40 分長崎市付近に上陸、九

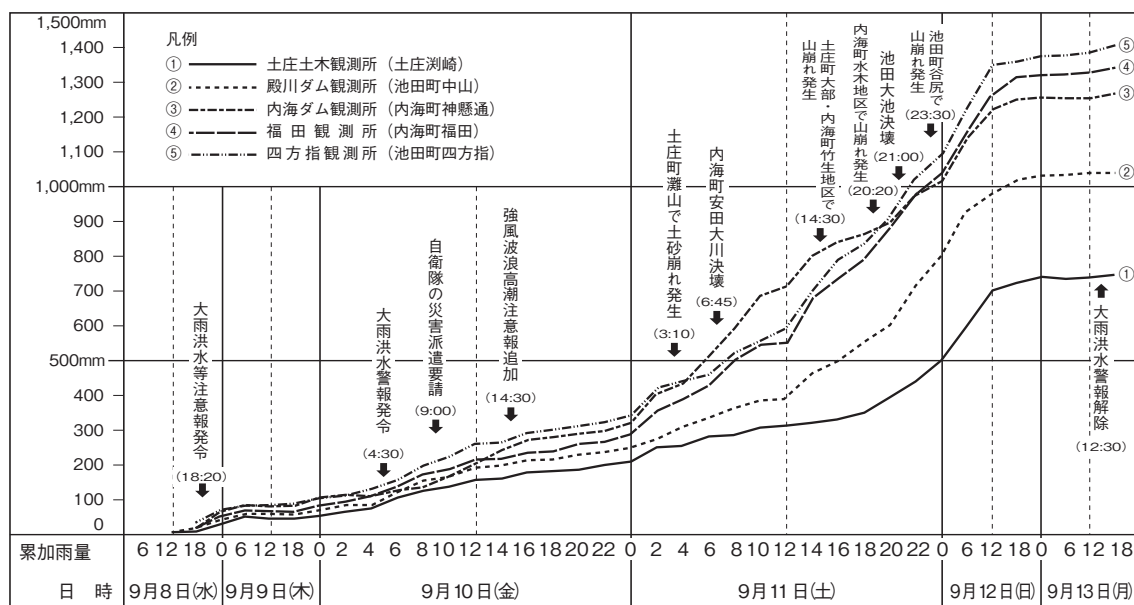
■台風 17 号の経路



※白丸は 09 時の位置、黒丸は 6 時間毎の位置を示す。太線は台風期間である。

■累加雨量および日降雨量





■主な地点の雨量の変化と
それに伴う状況の経過

州北西部を縦断し、午前5時頃玄界難にぬけ、日本海を北東進。13日昼頃には暴風圏が消滅して並台風となり、同日夕方には雨脚が弱まった。

このように本土を襲うとみせて洋上に停滞し、上陸5日前から豪雨をもたらした台風17号は観測史上異常なものであったといわれる。

最大の原因は、数百年に一度の異常豪雨だった

両災害の最大要因となったのは、異常ともいえる豪雨で、49年災害を上回った51年災害をみると、内海町（観測地点・内海ダム）では、9月8日11時頃から雨が降りだした。9月11日の10時頃から急に雨脚がはげしくなり、同日24時までの24時間の連続雨量は758ミリに達した。午後8時～9時の1時間の雨量88ミリという、当地最大の降雨記録を示した。

池田町（観測地点・殿川ダム）でも11日の20時～21時に最大時間雨量95ミリを記録し、午後9時頃に池田大池が決壊。また、午後11時20分頃には池田町蒲野地区谷尻で土石流が発生した。

総雨量は内海町で1,334ミリ、池田町では1,200ミリと、わずか6日間で年間雨量を上回る記録的な集中豪雨となった。まさに数百年に一度の異常豪雨であった。



海上から眺めると、山々が重なり、台地のように見える小豆島。

2 地形・地質面から原因を探る

小豆島の地形は、 解体作用（地すべり、山崩れ、土石流など）中の老年期初期

最高 600 ～ 800 メートルの台地から、
一気に海に至る地形

小豆島では、山崩れに伴う土石流災害、山地における表層崩壊、および人工斜面（法面）の崩壊による災害、地すべり災害、ため池および小河川の決壊による氾濫浸水などの内水災害など、水に関する災害が発生しやすい。その要因には、小豆島特有の地形が関係している。

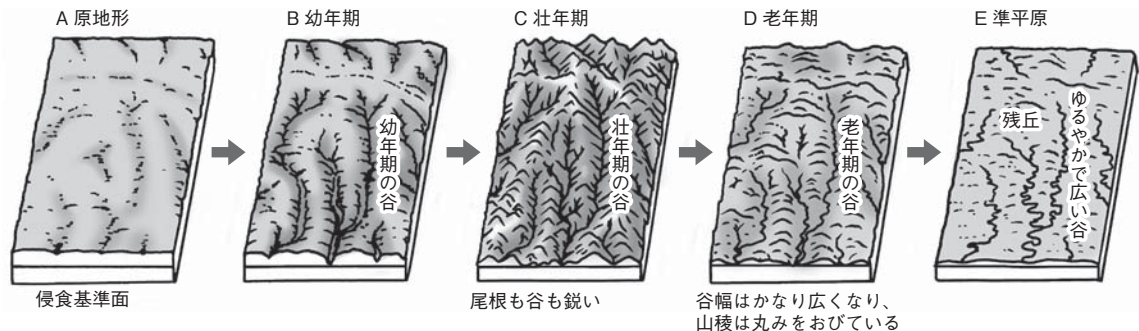
小豆島を海上から眺めると、上が平らな台地になり、600 ～ 800 メートルの台地から、一気に海に至る地形になっている。

これは約 8000 万年前にできた花崗岩の上に、およそ 1500 ～ 1300 万年以上前に噴出した瀬戸内火山岩類が堆積し、その後 1000 万年以上かけて侵食され、台地状の山になったため、寒霞溪のような迫力ある造形美が生み出されたのは、瀬戸内海火山岩類の噴火の中心にあり、大量の火山噴出物からなっているためである。

終末地形になるまで続く自然の解体作用が、
人間にとっての災害

一般に地球に働く営力には、内作用といわれるものと外作用といわれるものがある。内作用とは地球内部に原因のある作用で、火山などのように山をつくる作用である。外作用とは太陽エネルギーに起因するもので、主として山を解体し、地球表

■侵食によってできた地形 侵食による地形の変化（地形の輪廻）



面を平坦化する作用のことで、主役は水すなわち雨である。

この平坦化作用は侵食輪廻の一コマで、山地を構成する岩石が、風化し、軟弱化し、侵食されていく過程で示す挙動が地すべりになる地質と、山崩れにしかならない地質とがある。この作用により、山はだんだん低くなり、しまいには丸味をおびた丘陵となる。これを地形発達史のうえで、幼年、壮年、老年の地形という。

瀬戸内周辺には、花崗岩からできた山で 100 ～ 200 メートルの高さで丸味をおびた丘陵があるが、これは老年期の丘陵で、山の解体作用がほとんど終わった終末地形である。自然界では、このように終末地形になるまで、地すべり、山崩れ、土石流といった解体作用が続くのである。

四国本土の山は老年期で平坦化しているが、同じ老年期とはいえ、小豆島はまだその初期の段階にあるため、急傾斜の山地が多く、この作用が活発な小豆島では、こうした解体作用が災害の形で表れることになる。

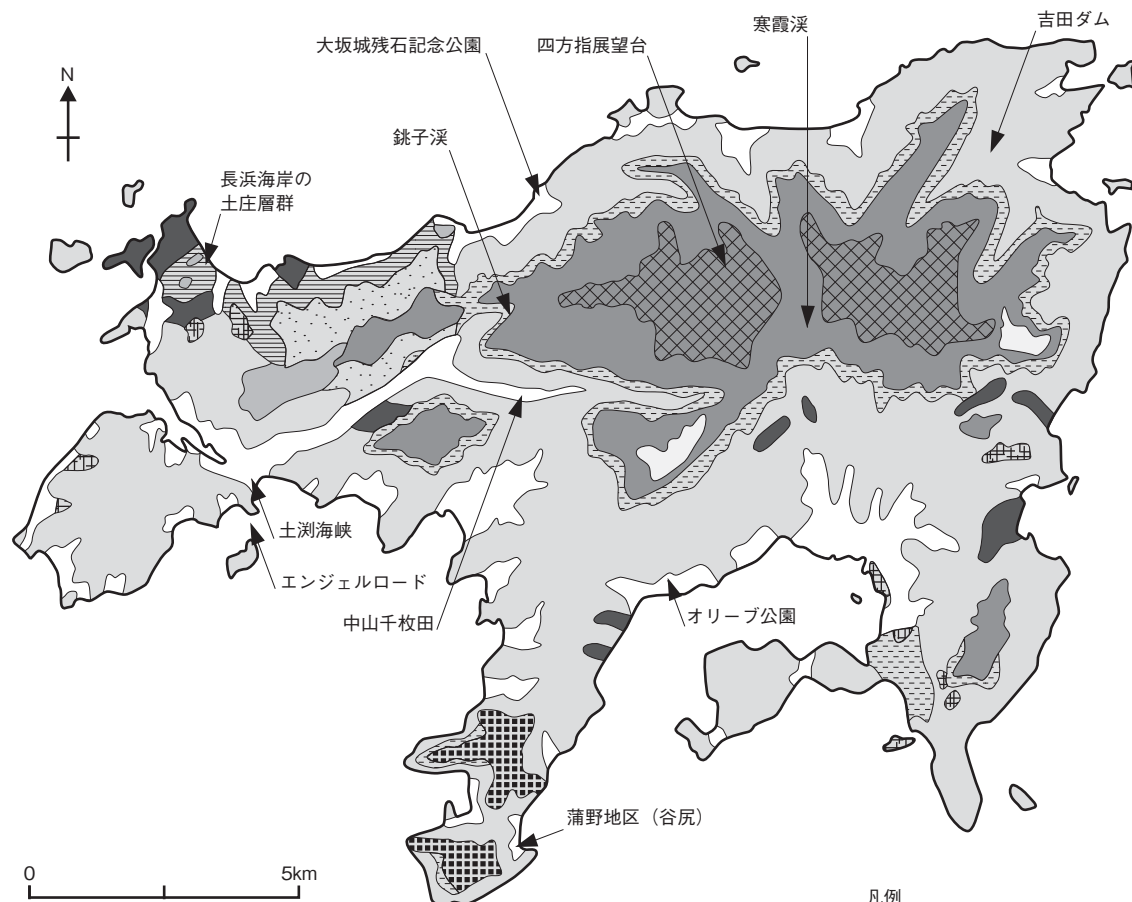
現在、小豆島での地すべりはほぼ安定し、それによってできた緩斜面が棚田として利用されている。

花崗岩が風化した「マサ土」は、 水を含むと崩れやすく、流れやすい

香川大学の齊藤実元教授によると、小豆島は地形のみならず、地質的にみても災害が起きやすく、水に関するあらゆる種類の災害が発生しているという。その理由とは、小豆島が花崗岩地域にあるためである。

元来、花崗岩は深成岩といわれるように、地下 5 ～ 10 キロ程度のところで、マグマが徐々に冷えてできたものである。それが現在、地表に露出しているのは、上にあった別の岩石が、

■小豆島の地質図



凡例

	沖積層 (ウルム氷期の扇状地を含む)
	崖錐
	段丘堆積物
	焼尾峠礫層
	三豊層部
	玄武岩
	角閃石斜方輝石安山岩
	黒雲母安山岩
	角閃石安山岩
	讃岐石 (サマカイト)
	讃岐石質安山岩
	龍紋岩
	両輝石安山岩質及び各閃石～斜方輝石安山岩質火山角礫岩類
	酸性凝灰岩および凝灰角礫岩
	土庄層部
	和泉層部
	領家花崗岩類
	領家変成岩類

讃岐層群

侵食により除去されたため、それを除荷作用という。

上に乗っていた岩石の荷重が除かれることにより、花崗岩のなかに歪みが生じ、岩体にたくさんの割れ目ができる。その割れ目は、規則正しくできるので節理とよばれる。この割れ目から雨がしみ込んで花崗岩がだんだん風化し、軟らかくなり、最後に土となったのを「マサ土 (真砂土)」という。

マサ土は九州のシラスとよばれる火山灰などと同様、水を含むと崩れやすく、また流出しやすい性質をもっている。小豆島はマサ土が厚く、そのうえ花崗岩が岩石であった当時に近い傾斜度を保っているため、きわめて不安定である。小豆島のマサ土が崩れる限界は、傾斜が40度以上、1時間雨量で40ミリ、1日の雨量は100ミリという。

さらに悪いことには、小豆島には未風化の岩塊が点々と残る風化形態のため、この岩塊が崩壊を促進し、拡大化し、さらに



中山地区の「千枚田」といわれる棚田。これも、地すべりによってできた緩斜面を利用したもの。



別当川

土石流の威力を倍増させる。人的被害の多いのは土石流だが、土石流は山腹または山頂付近で崩れた土砂が谷間を突っ走り、雪ダルマ式に土の量を増して平地部に駆け下りたものなのである。

大昔からの土石流でできた 小豆島の平野

現在、大都市が立地している扇状地は、山地で土砂を大量に運び去った水が、山地を抜けたところで持っていた土砂を急に手放したことで生じたものである。

小豆島の場合で見ると、海岸部の小さい平野は、ほとんどが昔の土石流で形成された平野である。この平野部には幅1～2メートルの小溪流がある。この小溪流をたどって上流へ進むと、傾斜がしだいに10度、20度へと変わり、ある点で急に30度前後に変わるところがある。ここを谷頭と呼んでいる。

谷頭付近は一般に岩盤が弱く、ふだんでも地下水などがしみ出ていることが多い。集中豪雨により地下水が一気に増えると、この付近で崩壊が生じる。崩れた岩石は谷底や側面を削り、その土砂量を20～30倍と増しながら、ものすごい勢いで流れ下りる。

内海町で起きた災害を見てみると、西に南北に連なる山嶺があり、南、北、東の三方は瀬戸内海に面し、山林原野が約80パーセントを占め、平坦地となっているのは主として南部に開けたところである。

山崩れ被害の大きかった東部地区は、背後に標高100～400メートルの寒霞渓山系がそびえ、標高816メートルの星ヶ城山に連なって島しょ部特有の急傾斜をなして海中に入り込む。この間を無数の小河川が谷間を縫って流れ、入江に小さな平坦地が点在している。

49年の豪雨による各所の崩壊は、異常豪雨に加え、こうした島特有の地形、地質という危険体質が誘因になったものと見ら

れている。

高いところから短い距離で流れ落ちる小河川は鉄砲水になりやすい

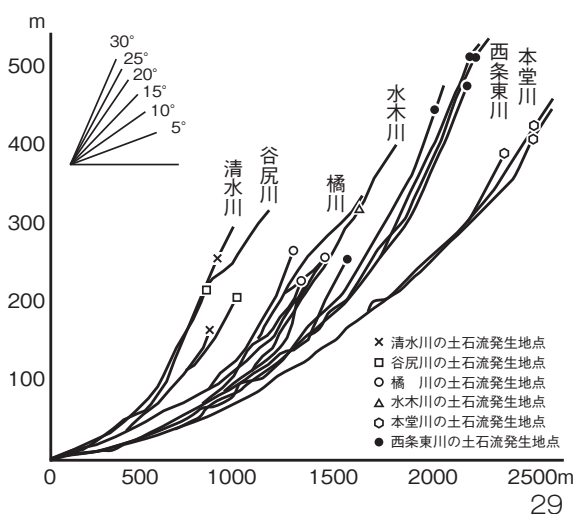
小豆島の河川は小さいものが多い。水量は少ないながらも、流れは短く急流である。山の頂上から河口に達するまでの時間が長ければ氾濫しにくい、小豆島の川は長いもので1時間、短いものは30分ほどで河口に達するため、鉄砲水となりやすい。

島の地形は最高600～800メートルの台地から一気に海に至る地形となっていることから、ひとたび大雨が降ると、水かさを増した川は谷底を削りながら激流となって流れ下る。昭和49年、51年当時、そうした小河川はほとんどが河道整備がなされていなかったため、集中豪雨になると山の斜面から流れ込んだ土砂や立木が流路を塞ぎ、あるいは大量の土砂や流木を伴って下流域に猛烈な勢いで流れ込む。そのために橋が損壊し、土砂が堆積して河床が高くなり、さらに水かさが増すことで、氾濫や堤防の決壊などにつながった。

たとえば寒霞溪の三笠山（標高671メートル）に発する別当川は、神懸通、草壁本町を貫流し、内海湾に注いでいるが、流路延長はわずか4キロメートルで、高いところから短い距離で流れ落ちているため「滝のような川」と形容されてきたほどの急流である。古くからたびたび災害を起こし、近世の古文書にも、たびたび「破損（洪水）」したと書き残されているほどである。

中小河川は河積が狭く、延長も短いため、49年、51年当時、上流部で発生した土石流のために下流で土砂が堆積し、池田町の池田大川、競川、内海町の安田大川、中筋川、別当川をはじめ各河川は堤防を越水した。越水した濁流により、池田町、内海町の中心部のほとんどが水没するなど、小豆島三町合計で床上浸水2,231戸、床下浸水2,940戸に及び、また農地も冠水するなど、甚大な被害を与えた。

■ 溪床こう配と土石流の谷頭崩壊部との関係（発生地点）



3 その他の原因を探る

■小豆島地区の被災ため池数

	(1) 山 池 池数 $\frac{(1)}{(4)}$ (%)	(2) 麓 池 池数 $\frac{(2)}{(4)}$ (%)	(3) 野 池 池数 $\frac{(3)}{(4)}$ (%)	(4) 計 池 (%)
(A) 小豆島	26 15.8	52 31.5	87 52.7	165 100.0
(B) 全 県	415 25.6	954 58.9	251 15.5	1620 100.0
$\frac{A}{B}$ (%)	6.3	5.5	34.7	10.2

■小豆島三町の被災ため池数

	(1) 山 池 池数 $\frac{(1)}{(4)}$ (%)	(2) 麓 池 池数 $\frac{(2)}{(4)}$ (%)	(3) 野 池 池数 $\frac{(3)}{(4)}$ (%)	(4) 計 池 (%)
(A) 内海町	9 13.2	25 36.8	34 51.0	68 100.0
(B) 土庄町	7 9.6	13 17.8	53 72.6	73 100.0
(C) 池田町	10 41.7	14 58.39		24 100.0
(A) 計	26	52	87	165
$\frac{A}{D}$ (%)	34.6	48.1	39.1	41.2
$\frac{B}{D}$ (%)	26.9	25.0	60.9	44.3
$\frac{C}{D}$ (%)	38.5	26.9	0.0	14.5

水不足に備えた島内のため池が、 多数決壊

昭和27年の調査によると、香川県はため池の数の多さで全国2位であり、小豆島にも多数のため池が存在している。51年災害で、内海町は68池（決壊21）、池田町では池田大池、巽池など24池（決壊12）が被災し、1000トン以下の小さい規模のため池に被害が集中した。

被災内容は土砂の流入が一番大きく、周辺からの土砂や立木が流れ込んだことで池底が上がったことや、排水路を土砂や立木が塞いだために水かさが増したと考えられる。

このように、堤防からの越水や決壊は水田の冠水や埋没、家屋の浸水など、下流域に多大な被害を及ぼしたが、一方、多くの池が土砂で埋まったことを考えると、ため池が受け

皿となり、下流域への土砂の流出を防ぐ役割を果たしたとも考えられる。

【災害の歴史（風水害）】

近世に多かったため池や河川の決壊、塩田の破損 山崩れは昭和 20 年代後半から頻発

近世の小豆島における災害は、干ばつと大雨洪水がほとんどである。

延宝 2 年（1674）における奥の内池・古郷池・小坪池・尺越池・小田松池の決壊、延宝 8 年（1680）の奥之坊池、室生の新池、二面の本谷池など、ため池の決壊も多く記録されている。

また、古くから製塩が盛んだった小豆島には各所に塩田が設けられており、享保 14 年（1729）には塩浜（大新開・孫太夫畔・木場・五軒畔・上り浜）破損により、田に海水が流入する被害を受けている。また、宝永 4 年（1707）10 月には、南海、東海地方の大地震による津波のために塩浜（上り浜・宮脇・沖・大新開・五軒畔・孫太夫畔・木場）が破損するなど、塩浜の堤防にまつわる被害も多い。

河川の決壊も多く、貞享 4 年（1687）には、やしもち川・別当川・いせき川・堂の上川・片城川などの堤防の破損が記録されている。ことに草壁地区の別当川はしばしば石堤の破損が記録されており、古くから氾濫の川で知られた。

小豆島は元和元年（1615）以来、幕府の天領となっており、河川や塩浜の堤防修繕など大規模工事は原則として幕府が負担したが、しだいに農民に負担を転嫁することが増えた。宝暦 12 年（1762）に池田村の塩浜の石堤が破損した際には、入足の約半分を幕府が出し、不足分は村が負担している。

山崩れは、近世で確認できるのは弘化 4 年（1847）のみである。同年 7 月の大雨洪水で、皇踏山（土庄町・393.7 メートル）で山崩れが起き、4、5 軒の家屋が土砂に埋まり、多数の橋が押し流されたと古文書に記されている。

江戸に続く明治、大正時代にも山崩れに関する記録はない。

このように山崩れは近世から明治、大正にかけてほとんど見られず、昭和 20 年代後半から頻発している。

明治時代以降は、ほぼ毎年のように暴風雨に襲われていることが年表から判明する。以下に被害の大きい災害を記載する。

■小豆島 災害の状況

明治 4 年	1871	5 月 18 日	大雨のため、池の決壊 1（古郷地）、田畑の被害大
明治 18 年	1885	7 月 1 日	大雨洪水、被害大
明治 27 年	1894	9 月 10 日	暴風雨。三都村倒壊家屋 2 戸
明治 29 年	1896	7 月 21 日	50 年来の豪雨
		8 月 18 日	暴風雨。島醤油会社、肥土山舞台など被害大。新築落成の小豆島第二高等小学校舎倒壊ほか、島内倒壊家屋 100 戸余（池田村崩壊家屋 17 戸、三都村倒壊家屋 12 戸）
明治 32 年	1899	8 月 15 日	暴風、海上大時化
		8 月 28 日	暴風雨。家屋倒壊多数（池田村内全壊家屋 32 戸、半壊 6 戸、破損 35 戸、負傷者 2 人。二生、三都両村も被害大）
明治 33 年	1900	8 月 19 日	暴風雨。被害大
明治 40 年	1907	5 月 17 日	暴風雨。農作物被害大
		7 月 18 日	暴風雨。被害大
明治 44 年	1911	6 月 19 日	暴風雨。農作物（桃・林檎）の被害大
明治 45 年	1912	4 月 19 日	空豆大の電が降り、農作物、屋根瓦、ガラス戸など被害大
		8 月 24 日	暴風雨。とくに大部以西の被害大
大正 4 年	1915	8 月 5 日	弘化年間以来の暴風雨大洪水。中山殿川決壊、5 橋梁が落下、水車大半流失
		9 月 8 日	暴風、海上大時化。海岸損傷 2（西村・堀越）。池田、入部の海岸の損害大
大正 7 年	1918	8 月 29 日～30 日	暴風雨。北浦・測崎で死者 8、負傷者多数。内海地区で橋の流失 8（楊柳橋・大川橋・久徳の橋・神懸橋・遊仙橋・青木橋・伊豆川橋・森庄川橋）ほか、全島各所の堤防護岸損壊、橋梁落下、家屋倒壊、浸水、田畑流出、船舶の覆没など損害大
大正 13 年	1924	9 月 12 日	暴風雨。小豆島中学校校舎の屋根大破
昭和 6 年	1931	9 月 18 日	暴風雨、島一帯被害大。とくに福田村に集中豪雨があり、山津波が起こった。死者 5、重軽傷者 15、家屋流失 17、倒壊半壊 45、橋流失 7、田埋没 13 町、畑 6 町、山林 10 町、宅地 2 町、他道路、堤防、石切場などの被害大。
昭和 9 年	1934	9 月 21 日	室戸台風。内海地区で家屋、農作物被害大。坂手村では家屋倒壊 5、埋立、防波堤一部破壊、漁船破壊 3、石炭満載船沈没、曲芸団運送船沈没。草壁町では家屋全壊 9、半壊 9
昭和 10 年	1935	8 月 28 日	暴風雨。とくに福田の被害大、防波堤破壊
昭和 11 年	1936	9 月 11 日	暴風雨。家屋倒壊など被害大
昭和 12 年	1937	9 月 10 日	暴風雨。内海地区倒壊家屋 6、納屋等倒壊 14、坂手小学校校舎傾斜、丸金醤油煙突倒壊
昭和 27 年	1952	7 月 3 日	集中豪雨。水田冠水 3 ヘクタール、床下浸水 15、崖崩れ 5、道路損壊 1
昭和 29 年	1954	8 月 18 日	台風 5 号来襲。東浦の被害大、福田港真珠母貝 3 万個損失
		9 月 13 日	台風 12 号来襲。南部海岸の被害大。家屋、工場の倒壊多数。坂手港栈橋全部沈没
		9 月 25 日	台風 15 号来襲
昭和 32 年	1957	7 月 18 日	午前 1 時ごろより集中豪雨（108 ミリ）。崖崩れ 2
昭和 33 年	1958	1 月 26 日	暴風
		8 月 24 日～25 日	台風 14 号来襲
昭和 34 年	1959	9 月 26 日	台風 15 号来襲（伊勢湾台風）

昭和 35 年	1960	7 月 8 日	集中豪雨（121 ミリ）。島内山崩れ 8、水田冠水 26 ヘクタール
		8 月 29 日	台風 16 号来襲。家屋、道路、船舶、山崩れ、オリーブ被害
昭和 36 年	1961	9 月 3 日～4 日	台風 17 号による集中豪雨。別当川堰堤下部流失、道路 3、橋 1、水田冠水 15 ヘクタール、床下浸水 494（苗羽・安田・草壁）
		9 月 16 日	台風 18 号来襲（第 2 室戸台風）。河川 26、海岸 2、道路 21、橋 4、港湾 7（坂手・ 内海）。神懸線の被害が特に大きく銕海橋破壊、内海ダムの一部決壊
		10 月 26 日～27 日	集中豪雨。室生峠が埋まり、西村地区各所に地すべり、山崩れ。神懸線いよいよ破壊。三五郎池一部決壊。橋－福田線山崩れのため不通。家屋全壊 13、半壊 36、床下浸水 1700。池田では池田新池、室生大池、新池、吉野賢東池が決壊、 室生豊栄川橋流失。池田町内家屋全壊 3 戸、死者 2 人、行方不明 2 人。災害救 助法適用。自衛隊 292 人来島
昭和 39 年	1964	9 月 24 日	台風 20 号来襲。坂手・草壁両栈橋中破
昭和 40 年	1965	9 月 10 日	台風 23 号来襲。瞬間最大風速 39.5 メートル、降雨量 205.6 ミリ。河川 12、道路 6、 橋 4、水田埋没 5 ヘクタール、冠水 11 ヘクタール、畑流失 16 ヘクタール（内海）。 福田の被害大。森庄川左岸決壊のため中場部落一帯泥海となる。家屋倒壊 3、 床上浸水 30 数戸（池田）。八幡宮も被害大
		9 月 17 日	台風 24 号による集中豪雨 (23、24 号台風による池田町の被害／家屋全壊 3、半壊 9、床上浸水 11、床下 浸水 38、一部損壊 998 戸、道路損壊 9 カ所、河川 15 カ所、漁港 6 カ所、港湾 4 カ所、 田畑冠水 46.2 ヘクタール、田畑流失埋没 6.7 ヘクタールなど、被害総額 1 億円)
昭和 45 年	1970	8 月 14 日	台風 10 号来襲。橋一当浜間崖崩れ、農作物被害大
昭和 46 年	1971	8 月 31 日	台風 23 号による集中豪雨（289 ミリ）。小坪東川決壊し土石流。死者 1、家屋 倒壊 1
昭和 49 年	1974	7 月 6 日	台風 8 号による集中豪雨。
昭和 50 年	1975	8 月 23 日	台風 6 号による集中豪雨。家屋全壊 1、半壊 1、床上浸水 3、床下浸水 109、 土木災害 18、農林災害 33。内海町では県道神懸線が数十メートルにわたり流 出（町の被害約 1 億円）
昭和 51 年	1976	9 月 8 日	台風 17 号による集中豪雨。
昭和 57 年	1982	8 月 27 日	台風 13 号来襲。瓦の飛散多数。東浦地区では漁港が被災
		9 月	台風 19 号被害甚大
昭和 58 年	1983	9 月	台風 10 号来襲被害甚大
平成 2 年	1990		台風 19 号による集中豪雨。16 日～19 日午後 7 時までの雨量は内海町で 383 ミ リ、18 日深夜から 19 日未明にかけて時間雨量 84 ミリの豪雨により、島内 3 町 で 1136 人ががけ崩れや溜め池決壊の恐れで公共施設に避難。被害は 44 県にお よび、死者行方不明者は 38 人。J R 四国など交通機関も 19 日午後より各線運 休
平成 9 年	1997	9 月 16 日	台風 19 号で大雨洪水暴風波浪警報発令され、内海町で 1 時間 77 ミリの集中豪 雨。51 年災害に迫る記録的な降雨となる
平成 16 年	2004	9 月 7 日	台風 18 号による高潮被害。床上浸水 37 戸、床下浸水 137 戸（内海町）

町の災害史を書き変えた「七夕台風」 —内海町で29人が犠牲に—

台風8号による昭和49年7月6日から7日にかけての集中豪雨は内海町の東部地区を中心に起きたため、隣町であった池田町には人的被害は発生していない。しかし、内海町では橘地区などで発生した土石流などにより、消防団員1人を含む29人が犠牲となった。

7月7日は参議院議員選挙が予定されていたが、浸水被害などで投票所の変更を余儀なくされた地区もあり、混乱が生じた。「七夕災害」とも呼ばれた同災害については、内海町を中心に詳細に記述する。

台風に刺激されて大雨となった四国地方の梅雨前線

昭和49年6月26日、マリアナ群島東方海上に発生した台風8号は、発達しながらゆっくりと北西に進み、最盛期は7月5日朝、沖縄の西方約200キロメートルの海上にあった頃である。

一方当地方は、6月29日以降西日本一帯を覆っていた梅雨前線により、毎日降ったり止んだりの典型的な梅雨模様になっていた。

台風はその後、少しずつ衰えながら毎時20キロメートルのゆっくりした速度で北北東に進み、福岡の西約200キロメートルの海上に達した7月6日24時には、中心気圧970ミリバール、最大風速30メートルという中型の並台風となっていた。しかし、台風が九州西方海上をゆっくりと北北東に進んだ6日は、朝から台風周辺の暖かく湿った空気が日本海の梅雨前線を刺激し、四国地方は大雨となった。

わずか1日で年間雨量の4分の1が降った 記録的集中豪雨

7月6日、日中は比較的全域に降っていた雨は夜になって局地的になり、特に小豆島、東讃、徳島県東部では、数時間にわたって毎時40ミリ～70ミリと、記録的な集中豪雨となった。内海町の太陽の丘では、6日9時から7日9時までの24時間

の最多雨量 365 ミリを観測した。昭和 44 年から 48 年までの内海町における平均年間降雨量は 1,232 ミリであることから、年間雨量のおよそ 4 分の 1 がたった 1 日で降った計算になる。

真夜中の豪雨に停電が重なり、避難時の混乱に拍車がかかる

7 月 6 日午後 2 時の大雨強風波浪注意報発令により、消防各分団の招集が相次いだ。この頃から各地から浸水、崖崩れの知らせが入るようになり、夕刻には福田の森庄川、午後 9 時には田浦川、続いて橘川など河川の氾濫が相次いだ。

午後 9 時 10 分に大雨警報、洪水強風波浪注意報が出された。安田大川付近、草壁別当川流域、苗羽馬木地区、橘地区、福田尾崎、岡地区に避難命令が出され、住民の避難が始まった。

雨脚はさらに強くなり、太陽の丘観測所で計測された午後 9 時から 10 時までの時間降雨量は 92 ミリを記録した。消防庁舎前や役場付近の水かさが増して、午後 10 時には停電となり、内海・福田間の電話が不通になった。

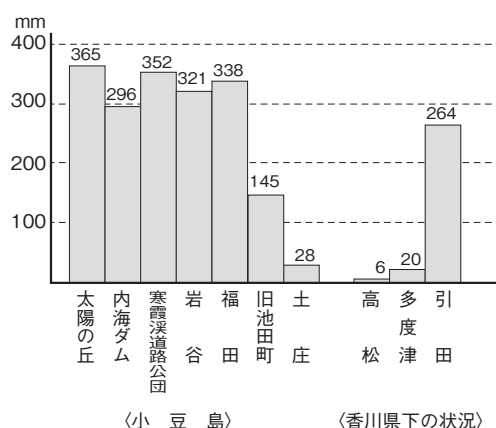
河川の氾濫と満潮時が重なり、安田、苗羽地区では浸水家屋が続出した。ため池の決壊も相次ぎ、道路の寸断で孤立する地域も出始めた。午後 11 時 45 分には町内全戸停電となり、混乱に拍車がかかった。

橘地区をはじめ急傾斜地の多いところで、土石流が発生

被害範囲は全町にわたり、海岸線が 15 キロメートルに及ぶ東浦地区では、集落を結ぶ唯一の県道がいたるところで寸断され、加えて電話の不通、停電により、特に福田地区ではまったくの孤立状態となった。

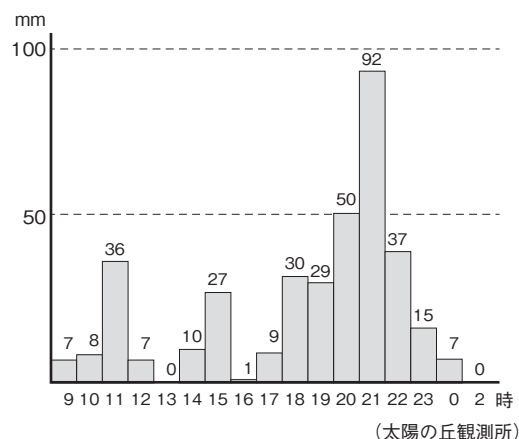
橘地区をはじめ、急傾斜地が多い東部海岸の岩谷、福田、吉田地区では、鉄砲水となって土砂崩れが起こり、瞬時に住家を押流した。このうち橘地区では 6 日午後 11 時 50 分頃、通称金月山が轟音とともに崩壊、520 立方メートルの土砂が住宅に

■台風 8 号 降雨量



■台風 8 号 時間雨量

7 月 6 日 (6 日 9 時～7 日 2 時)





橘地区の土砂崩れ

流れ込み、27 人が土砂に巻き込まれた。

知らせを受け、すぐに小豆島消防署内海分署職員 9 人がダンプカーで出動したが、橘峠上がり口の古郷池付近で石と土砂に行く手をはばまれ、やむなく倒木と泥土の中を徒歩で進み、5 キロメートルの道のりを 1 時間半をかけて現地に到着した。

現地で県警第一機動隊 35 人と合流し、ただちに救助活動が開始された。

7 月 7 日午前 2 時すぎに 4 遺体が発見されたのを最初に、同日夜までに 18 遺体が発見された。民家を押しつぶした土砂を取り除くショベルカーに捜索隊員の目が注がれ、湾内でも不明者の捜索にあたった。

橘湾などに県警の警察船「やしま」、同機動隊のアクアラング隊、海上自衛隊呉警備隊第一掃海隊水中処分掃海艇「はしま」など 4 隻、17 人のアクアラング隊員に地元の漁船も出動して、海での行方不明者の捜索が行われた。

日を追って 4 体、2 体、1 体、2 体と遺体発見が続き、福田地区で消防活動中に殉職した男性も 12 日に発見された。

福田地区伊豆川付近で犠牲となったこの消防団員は、6 日深夜、降雨が激しくなったために、他の団員とともに自宅近くの伊豆川を警戒中に土石流に巻き込まれたもので、遺体発見のきっかけとなったのは懐中電灯だった。懐中電灯が汚泥の中から見つかった場所から 50 メートルほど上流の民家の庭で、ヘルメット、消防団員服姿の遺体が発見された。

避難する途中に濁流にのみこまれた福田地区の女性は、生後 3 カ月の娘をしっかりと遺体の胸に抱いており、人々の涙を誘った。

最後の遺体が岩谷地区で発見されたのは、災害発生から 7 日後の 13 日である。



通行不能となった橘峠



橘地区海上からの捜索活動



岩谷地区での救助活動



福田地区救助活動

救援や復旧を阻み、東部海岸地域を孤立化させた 道路や通信の不通

7月7日午前4時、県から陸上自衛隊善通寺駐屯地に災害派遣要請がなされた。

午前5時に金子知事を本部長に県災害対策本部が設けられ、県小豆島事務所に現地対策本部が設置された。

県警機動隊員、消防団員、地元住民らに続き、陸上自衛隊、県警、県職員らが救援にかけつけ、8日には海上自衛隊も救援活動に参加した。

また7日午後には、池田町、土庄町の消防団が橘地区へ応援に入った。

陸上自衛隊善通寺駐屯部隊は、災害発生と同時にのべ50台の車両、大型機材を搬入し、多い日で450人、のべ3,100人の隊員が橘、福田、岩谷などで行方不明者の搜索、復旧作業にあたった。

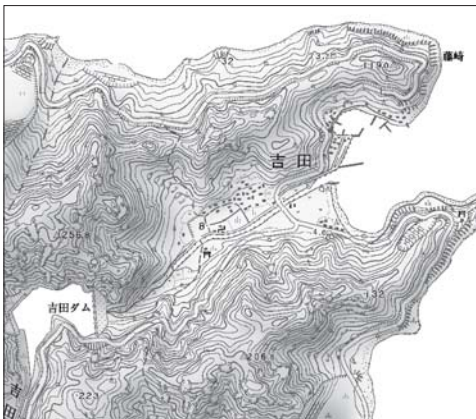
陸上自衛隊は、作業の完了にともなって12日午後から一部の撤収を開始、15日にすべて撤収した。また、海上で行方不明者の搜索にあたっていた海上自衛隊呉第二駆潜隊は15日に撤収した。

善通寺駐屯地部隊から派遣され、復旧作業に尽力した自衛隊員の中には、この災害で妹を亡くし、母親が重傷を負った隊員も含まれていた。被害に遭った2人は避難の途中、橘地区の川に転落し、妹の遺体は11日に海岸で発見された。

県災害対策本部が設けられ、 各方面の救援活動や搜索が開始された

東浦方面を中心に大災害となり、安田・苗羽地区では浸水家屋が続出した。急傾斜地区が多い東部海岸の橘・岩谷・当浜・福田・吉田地区では鉄砲水となって土砂崩れが起き、瞬時に住家を押し流し、多数の犠牲者を出した。

ことに道路の通行ができなくなったうえに通信機能もマヒし、事実上孤立状態となった福田地区の住民は、二次災害の恐怖におびえながら、救援隊を待つしかないという、長く苦しい時間を過ごさざるを得なかった。死亡者の検証や負傷者の応



■吉田地区



橘地区土砂崩れ

急手当てをしようにも、医師は不在である。ようやく作業用車両が通れるようになったのは災害から2日後の7月9日だった。

死者は橘19人、岩谷2人、福田6人、安田2人の計29人。重軽傷者41人。全壊家屋57戸、半壊71戸、非住家全半壊79戸、床上浸水1,081戸、床下浸水855戸である。

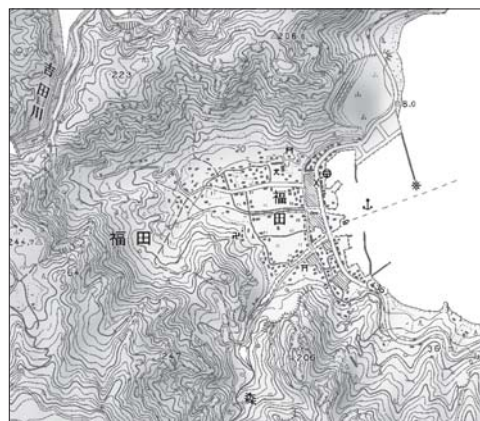
土木被害は道路22か所、橋梁14か所、河川54か所におよび、農林被害、商工水産被害、環境保健被害、文教施設被害など、被害総額は34億円にのぼった。

「崩壊危険地帯」に指定され、防災工事の必要がありながら、国庫補助防災事業の採択基準にあわず、擁壁や水路設置の工事がなされていなかった災害現場もあった。

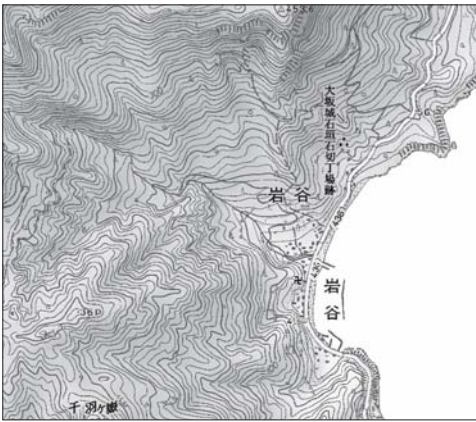
最大の被害となった橘地区は、県による崩壊防止工事が進められていた矢先の災害となった。同地区の危険区域は1.8ヘクタールで、特に危険な急傾斜地は勾配30度、延長300メートル、高さ



■橘地区



■福田地区



■岩谷地区



岩谷地区の土砂崩れ



岩谷地区の土砂崩れ

10メートルにわたる0.5ヘクタール。延長342メートルをコンクリートや石積みなどで補強する工事は51年度完成予定で、7割近くの約210メートルまで施工がすすんでいた。

主な地区での被害は以下のとおりである。

- ・**橘** 急傾斜の多いこの地区では3か所で土石流が発生し、死者19人を出した。
- ・**福田** 伊豆川が決壊したため川が増水して、巨石を押し流した。死者6人。8日夕刻まで道路は切断され、停電、電話不通も加わって孤立状態になり、海上からの救援が主となった。同地区では昭和6年にも伊豆川が氾濫し、死者7人を出しており、43年ぶりの悲劇となった。
- ・**岩谷** 椎木川の氾濫と天狗山からの土砂が崩れ、国指定文化財の大阪城残石が多数押し流されたことが被害を拡大した。死者2人。うち1人は川の



埋没した水田（安田地区古郷）



土砂で埋まった木庄川（木庄地区）



土砂で埋まった安田大川（安田地区八軒屋付近）この付近は護岸の高さが2メートル、幅は7メートルあった。



安田（植松地区）および苗羽（馬木地区）はほとんどの世帯が床上浸水となった。

異常増水のため避難する途中、橋の途中で巨石をともらった土石流に押し流された。

・**安田** 安田大川は土砂、流木などで埋まる。諸口川 5 号橋が落ちた。植松地区では床上浸水。死者 2 人。

・**木庄** 夫婦池の上池 1 か所、下池 2 か所でえん堤が決壊。木庄川は土砂で埋まる。

再びの雨と、不正確な情報に動揺した住民

内海町を中心とする被災地では、7 月 6 日午後 10 時頃から停電となったが、8 日午後 3 時、福田地区を最後に全面復旧した。

8 日、9 日と晴天となったが、11 日未明から再び雨が降り出した。10 日夜、高松地方气象台から大雨・雷雨注意報が出された。数日前の大雨で地盤はゆるんでおり、再び山崩れや浸水の恐れがあるとして、橘地区の住民 70 人は避難所で一夜を過ごした。岩谷、福田地区でも住民は知人や親類を頼って避難した。

11 日から授業再開の予定だった学校は再び全面休校となり、連絡道崩壊や河川氾濫など二次災害の恐れが出たため、県警機動隊員 100 人、陸上自衛隊 420 人、地区消防団、住民らが、排水路整備や土のう積みなど河川整備に力を注いだ。

岩谷、橘地区では二次災害発生に備えて機動隊、自衛隊員らが待機したほか、現地対策本部ではマイクロバス 2 台を待機させ、万一の場合に備えた。

福田地区では自衛隊員 120 人が出動して伊豆川の水路を整備するとともに、行方不明者の捜索を行った。

町簡易水道の水源地になっている安田地区の三五郎池が満水状態であったため、11 日午前中に堤防決壊の噂が流れ、住民の避難騒ぎが一時起きた。

このように「避難命令が出た」などの流言飛



裏山の土砂崩れにより、校庭が埋まった（星城小学校）



タンカに乗せられて救助される負傷者



土砂で埋まった三五郎池



熱気の中で炊き出しをする婦人会の人たち（学校給食センター）

語が飛び交ったため、県広報車が「正式連絡は広報車と公民館放送で行う」と巡回、町民に冷静な対応を呼びかけた。

いちはやく開始された炊き出しと給食活動

災害後、各地区の婦人会が中心となって、被災者や救護活動に従事する人たちへの炊き出し作業を開始した。この時、炊き出しを行った施設は、給食センター、福田公民館、当浜公民館、岩谷公

民館、橘隣保館、安田小学校、安田自治会館木庄分館、馬木真光寺、坂手公民館の9か所である。

給食センターでは、朝早くから駆けつけた婦人会のメンバーが、休む間もなく、朝昼晩の3食のおにぎりを用意した。島内の土庄町や池田町の婦人会からも、1週間でのべ207人が応援に駆けつけた。

炊き出しが長期にわたったため、おにぎりばかりではとの声もあり、とりあえず手持ちの材料を使い、その後は救援物資も次々と届いたため、県の生活改善普及員の協力も得て、食事の内容、栄養のバランスなどにも気を配った給食活動が行われた。

炊き出し、給食活動は6日から20日までの15日間にわたり、のべ27,692食、婦人会をはじめとするのべ1,211人の奉仕活動によって行われた。

投票所への浸水などで、参議院議員選挙にも影響

7月7日の日曜日は参議院議員選挙の投票日でもあった。大きな災害に見舞われた小豆島でも、復旧作業の合間を縫って一票を投じる姿が見られたが、浸水被害などにより投票所の変更を余議なくされた会場もあった。

内海町安田第一投票区の投票所となっていた内海町公会堂が浸水のため内海町役場に、同町安田第三投票区の橘集会場が橘幼稚園に変更された。

当初の予定どおり、投票は午前7時に開始された。

町内最大の被害を出した橘地区の6投票所は、道路寸断で陸路での投票箱運搬が不可能となったため、災害救援で出動中の巡視船で、開票場である町役場へ届けられた。このため、開票時間は予定より1時間遅れの9時半からとなるなど、影響もみられた。

〔応急対策〕

3年分に相当する膨大な堆積土砂とゴミをどうするか

被災の報道とともに県内外より駆けつけた奉仕活動の人々も加わり、全町をあげて復旧作業が開始された。

倒壊、浸水家庭より排出されたゴミ、ヘドロは約3万トンと、町の平常の収集量の3年分にもおよんだ。

一方、市街地に堆積された土砂は約17,800立方メートルに達し、これらのゴミ、堆積土砂とともに、災害復旧工事により排出される土砂約175,000立方メートルの対策として、苗羽地区（15,146平方メートル）と草壁地区（6,026平方メートル）の2か所で埋立が着工され、苗羽地区は主として地場産業の工場用地や公共用地に、草壁地区は海岸緑地として計画された。



道路上にはき出されたゴミの山

手のつけようがない中で優先されたし尿収集、防疫対策

災害後の最も急を要する保健活動として、ゴミ処理とともに、し尿収集、防疫活動も浸水地区全域にわたって実施された。

し尿収集については、土庄町および高松市清掃連合会の協力により、7月17日までにバキューム車のべ67台、作業延人員191人によって、収集処理することができた。

防疫活動も、県農業改良普及所をはじめ各団体の奉仕活動が実施され、動力噴霧機等機械類のべ72台、作業人員のべ254人により、橘、岩谷、吉田、福田などの被災地区を中心に、消毒剤の散布や、消毒用の消石灰、クレゾール、塩素剤などの家庭への配布を行った。また、伝染病予防のためのチラシを家庭に配り、注意を呼びかけた。

福田地区では、内海町の要請により、土庄保健所職員4人による防疫班が伝染病予防の指導を始めた。

井戸水についても各消防分団の協力により、浸水地区の井戸替え、消毒に加え、土庄保健所による飲料水の検査を実施した。

また検病対策として、内海の被災家庭に保健婦を派遣した。15、16日の両日は土庄、高松両保健所などの保健婦17人も加わり、浸水家庭約2,700戸を中心に個別訪問を行い、伝染病予防などを指導した。日赤、県立中央病院、離島巡回診療船「済

生丸」などによる診療活動も行われた。

水害に遭ったのに水がない皮肉、 隣町から給水車による救援を受ける

三五郎池の水道施設が損壊したため、坂手地区の全域をはじめ、上水道需要世帯の約半数が断水した。簡易水道も6施設の全てが導配水管の破損により断水状態となった。

復旧については、県より技術者の応援を求めるなどして、漸次導配水管の仮布設を急いだ結果、7月11日より全面通水することができたが、水源のにごりのため、浄化能力が極度に減退し、坂手地区をはじめ高台では7月17日まで断水が続いた。多くの人々の奉仕による給水活動が行われ、橘地区では土庄、池田両町からの給水車が給水活動を行った。

被害の大きかった橘地区の簡易水道が完全復旧したのは、7月22日であった。

とにかく住むところを—— 急がれた仮設住宅の建設

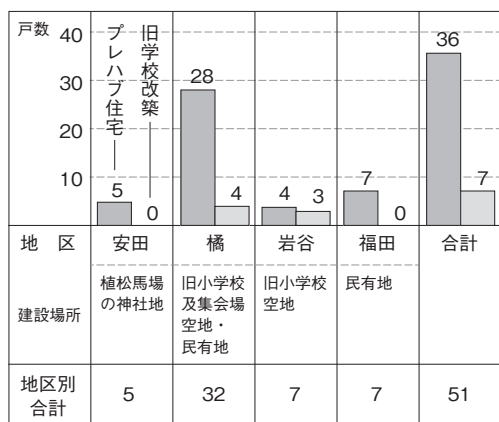
家屋の倒壊などで家を失った住民のために、国および県による応急対策としてプレハブ住宅仮設44戸と旧学校改築7戸を行い、7月27日までに入居をすませた。仮設のプレハブ住宅は一戸あたり約30平方メートルの2DKである。

内訳は安田地区5、橘地区32（うち旧学校改築4）、岩谷地区7（うち旧学校改築3）、福田地区7。



旧橘小学校運動場跡に建てられた応急住宅

■応急仮設住宅建設状況



子どもたちの教育を守るために行われた、 さまざまな学習・通学方法

・安田小学校（7月8日～7月16日）

橘地区では教師2、3人が児童家庭を訪問し、家庭学習を実施した。

岩谷地区では地区公民館で出張授業が行われた。

スクールバス開通により、7月17日から平常授業となる。

・福田小（中）学校（7月8日～7月20日）

当浜地区では8日は徒歩で通学、9日から民間のマイクロバスで通学した。

吉田地区の子どもたちは自家用車で送迎が行われた。

・内海中学校（7月8日～7月20日）

橘・岩谷地区では、教師がそれぞれの地区へ出向いて、家庭訪問による家庭学習を実施。16日より徒歩、自転車で一部登校する。

・旭幼稚園（橘地区）

裏山からの土砂流入により、8日から16日まで休園。

住民のこれからの暮らしを築くために 施行された施策

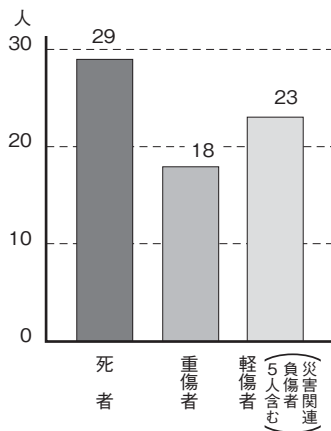
特別生活相談が7月9日から内海町役場で始まった。これは被災住民の各種相談を受けるとともに、災害で手薄になった行政の強化を図ることを目的に行われたもので、県の住宅管理課、商工課、環境公害対策室、社会課、農政課などから15人の幹部職員が、住宅、保険、金融などについて住民の相談に応じた。

また、7月19日～9月30日まで町民相談室が開設され、相談件数は492件におよんだ。災害復旧関係の相談が多くを占めたほか、援護資金や住宅貸付資金に関する相談が相次いだ。

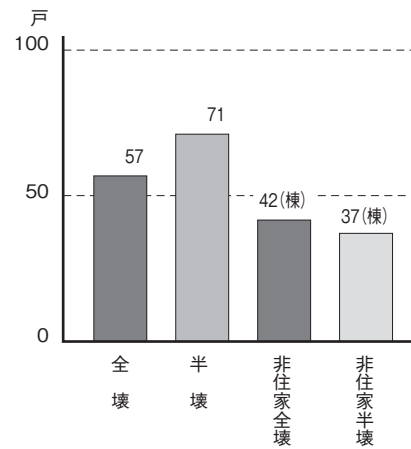
また災害救護資金として、278件、7,144万円が貸し付けられたほか、町民税などの減免措置も実施され、災害で大きな被害を受けた町民の生活を援助するための取り組みが進められた。

データでみる 昭和 49 年の被害の状況

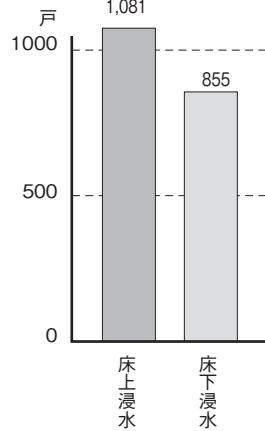
■人的被害



■建物被害 (倒壊)



■建物被害 (浸水)

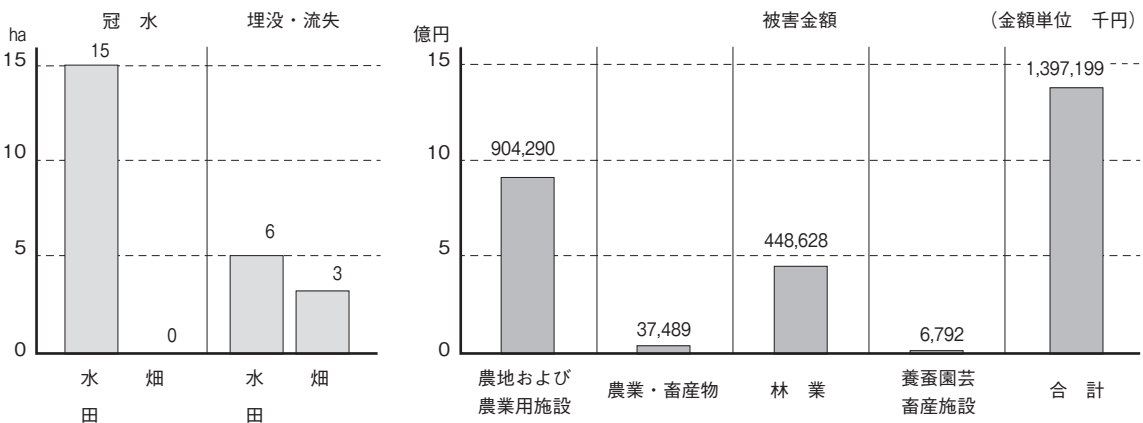


■土木被害

(金額単位 千円)

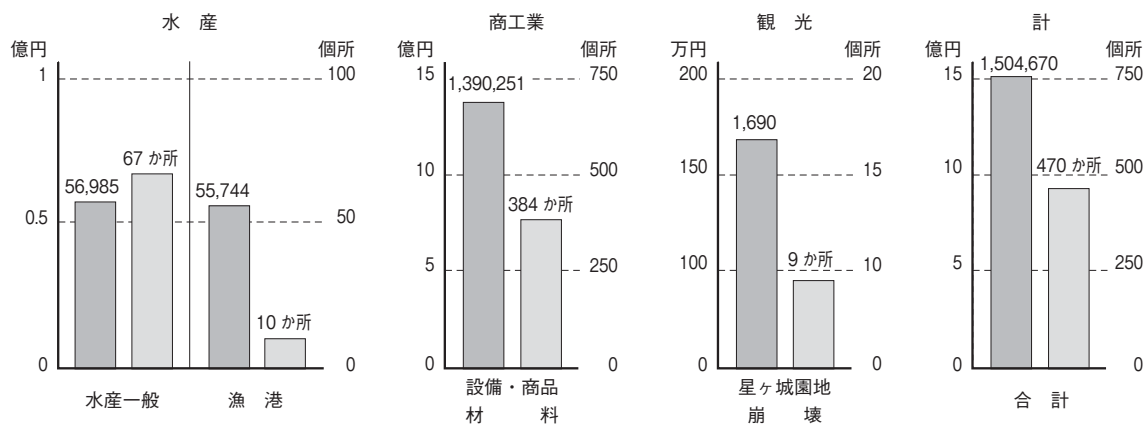
	道 路	橋 り ょ う	河 川	砂 防	合 計
内海町	億円 個所 5 100 4 80 3 60 2 40 1 20 0 0 金額 個所 50,151 22	億円 個所 5 100 4 80 3 60 2 40 1 20 0 0 金額 個所 26,397 14	億円 個所 5 100 4 80 3 60 2 40 1 20 0 0 金額 個所 375,954 54	億円 個所 5 100 4 80 3 60 2 40 1 20 0 0 金額 個所 0 0	億円 個所 5 100 4 80 3 60 2 40 1 20 0 0 金額 個所 452,502 90
香川県	億円 個所 5 150 4 120 3 90 2 60 1 30 0 0 金額 個所 242,528 127	億円 個所 5 150 4 120 3 90 2 60 1 30 0 0 金額 個所 9,177 4	億円 個所 5 150 4 120 3 90 2 60 1 30 0 0 金額 個所 145,787 32	億円 個所 5 150 4 120 3 90 2 60 1 30 0 0 金額 個所 8,479 2	億円 個所 5 150 4 120 3 90 2 60 1 30 0 0 金額 個所 405,971 165
計	金額 292,679 個所 149	金額 35,574 個所 18	金額 521,741 個所 86	金額 8,479 個所 2	金額 858,473 個所 255

■農林被害



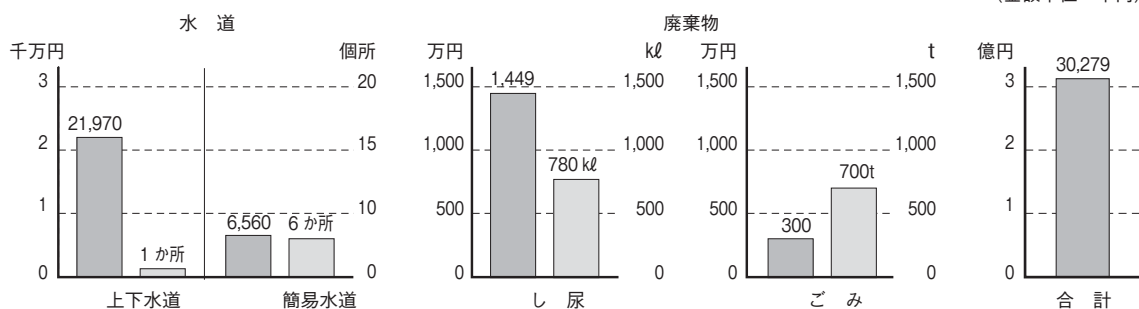
■商工水産被害

(金額単位 千円)



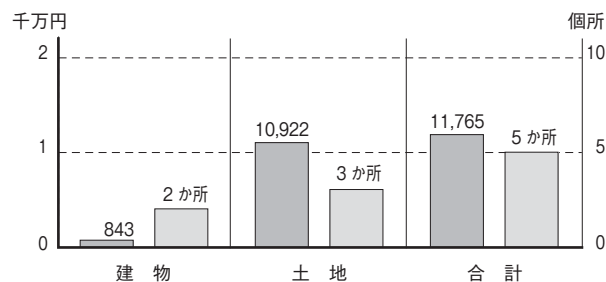
■環境保健被害

(金額単位 千円)

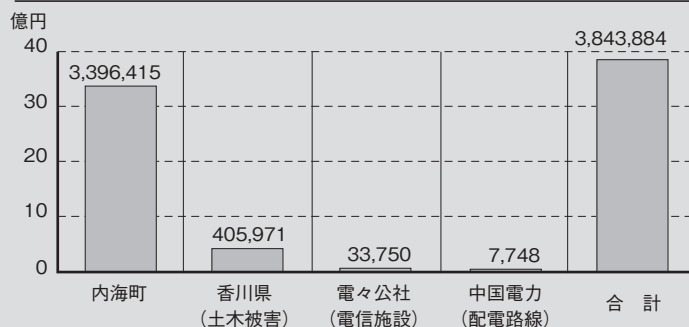


■文教施設被害

(金額単位 千円)

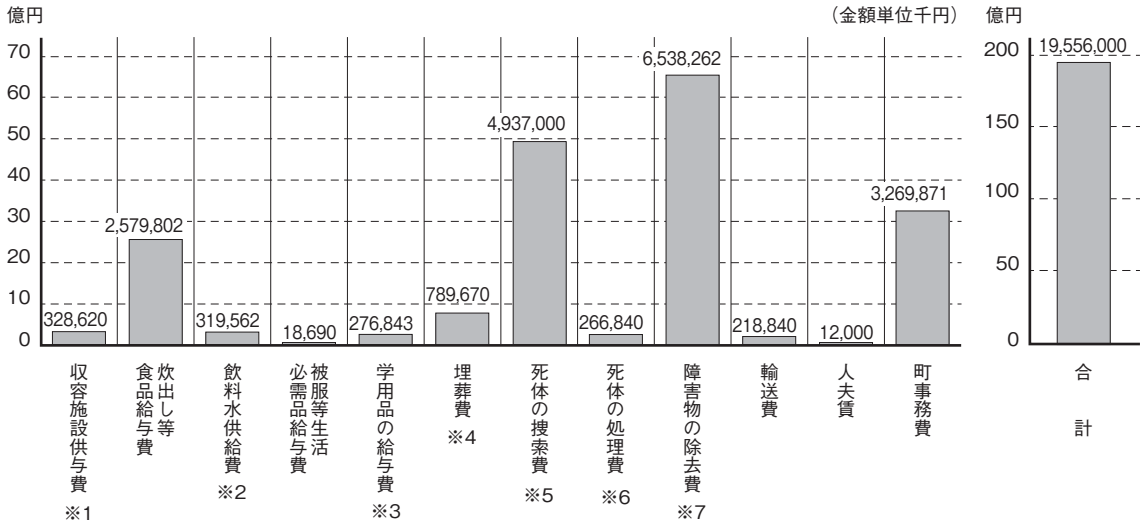


被害総額



内海町	3,396,415 千円
香川県 (土木被害)	405,971 千円
電々公社 (電信施設)	33,750 千円
中国電力 (配電路線)	7,748 千円
合計	3,843,884 千円

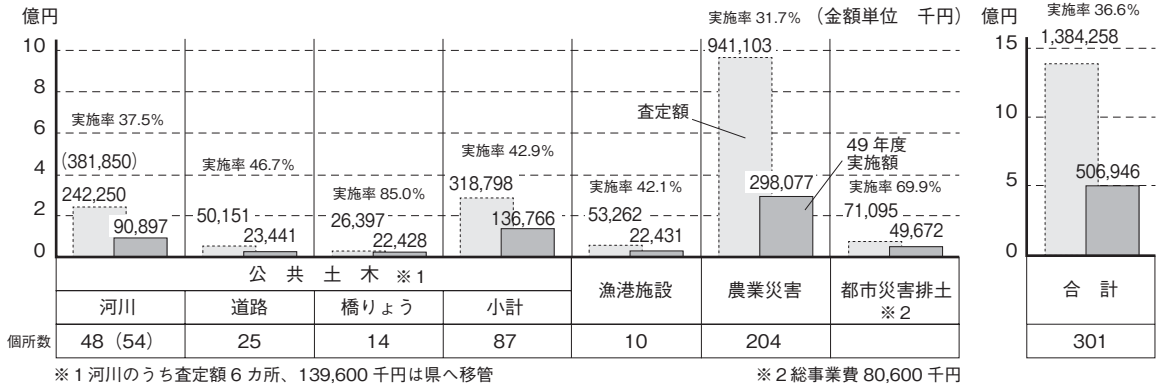
災害救助費



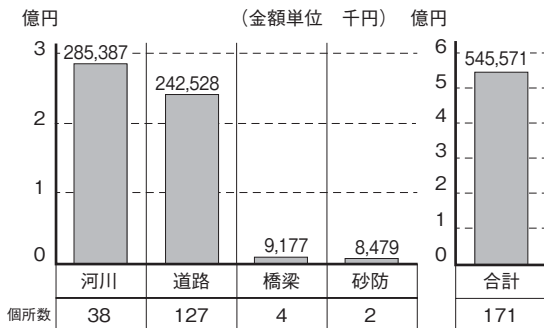
適用 ※1 避難所9カ所、毛布、カーペット他 ※2 給水車借上料、燃料費他 ※3 小学生104人、中学生66人
 ※4 棺代、ドライアイス他 ※5 重機械借上料、船借上料 ※6 検案料、毛布他 ※7 重機械借上料、燃料、人夫賃他

復旧工事の状況

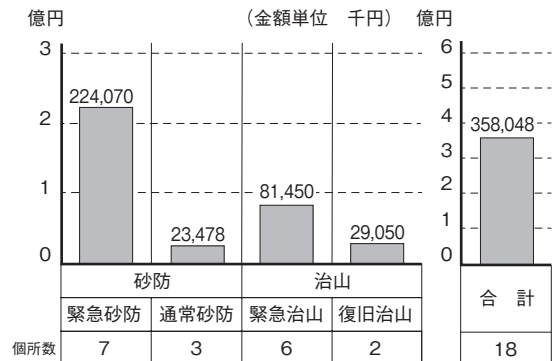
1. 町関係事業実施状況

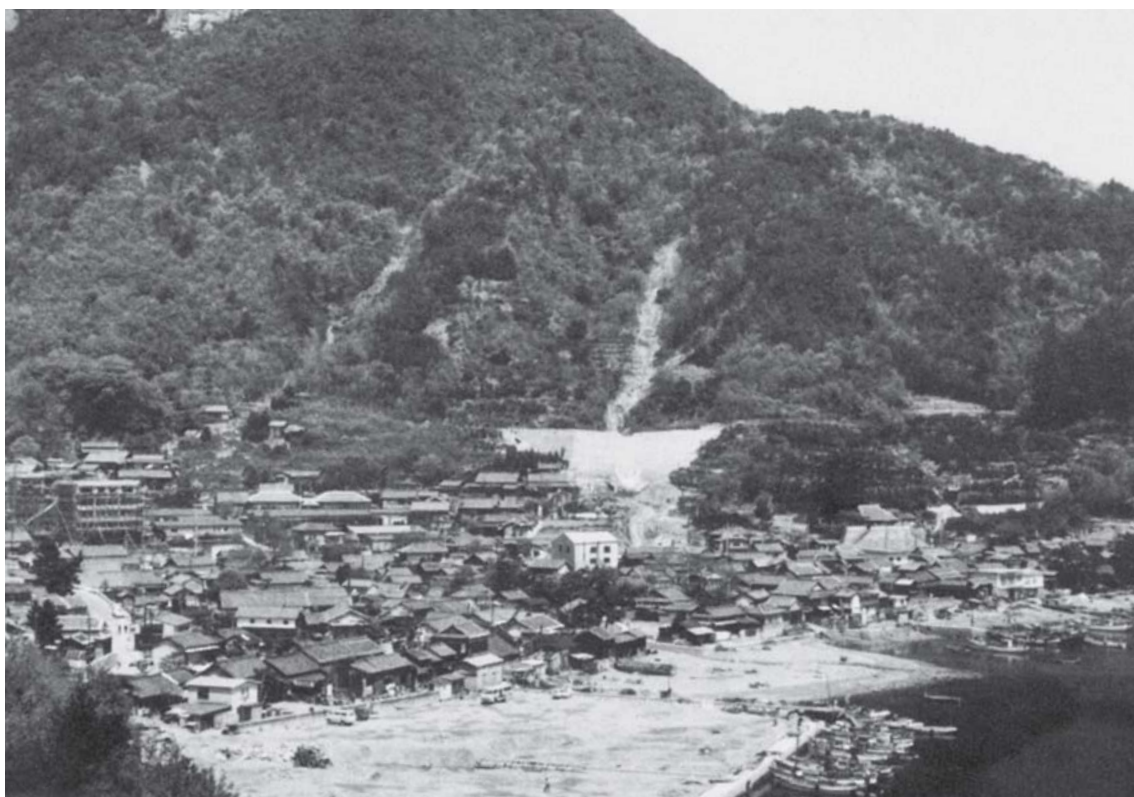


2. 県関係事業査定額



3. 防災事業実施状況





橋地区

山から流出してきた大量の土砂は、都市災害排土として使われ、新しく埋立地ができた。



苗羽地区の海岸にできた埋立地。

49年災害の傷が癒えぬ間に来襲した 記録破りの集中豪雨 —池田町に大きな被害—

台風 17 号による 9 月 8 日から 6 日間におよんだ集中豪雨は、わずか 3、4 日で年間の雨量を上回る雨を降らせ、2 年前の 49 年災害ではほとんど被害を受けなかった池田町に死者 28 人という大きな爪跡を残した。また、49 年に激甚災害を受けた内海町では、住民の避難がいちはやく開始されるなど、49 年災害の教訓が生かされた地区もあったが、7 人（土庄町居住者 1 人を含む）が犠牲となった

〔災害の状況〕

数百年に一度あるかないかの豪雨、
9 月 11 日だけで年間雨量の約半分の降雨

昭和 51 年 9 月 4 日午後 3 時に熱帯低気圧から台風となった 17 号は、大型の勢力を保ちながらゆっくり北上してきた。そして、10 日午後 6 時頃から 12 日午前 3 時頃まで鹿児島島の南西約 250 キロの海上に停滞したまま動かなくなった。このため、台風の東側にあたる香川県には南の湿った空気が流れ込み、県内全域に記録的な豪雨をもたらした。

小豆島では 9 月 8 日から雨が降り始め、8 日、9 日は雨量も少なかったが、10 日午前 4 時 30 分に大雨洪水警報が発令された後の午前 5 時から午前 7 時までに、池田町で 58 ミリの降雨を記録。11 日に入ってから時間雨量 20 ミリを超える降雨が断続的にあり、午後 0 時から午後 3 時までに 23 ミリ、39 ミリ、47 ミリと集中的な豪雨となり、急傾斜地の多い東部地域に山崩れ、河川の氾濫などの災害が発生した。

その後の午後 8 時から 9 時の 1 時間に、時間雨量 95 ミリを記録。9 月 11 日の 1 日だけで 522 ミリという、年間雨量の約半分近くの降雨をもたらした。池田大池の決壊、谷尻地区の山津波など、池田町全域にわたってかつてない大きな災害を引き起こした。

内海町でも 10 日の大雨洪水警報発令から、20 ミリを超す時間雨量が断続し、238 ミリとなった。11 日は最大時間雨量 94 ミリ、24 時間の雨量が 819 ミリという年間雨量に迫る豪雨となり、各所で土石流、崖崩れ、ため池の決壊や河川の氾濫などが頻発した。田畑の冠水、家屋の床上・床下浸水も多発し、草壁本町、安田、馬木地区では午前 1 時頃から 12 日夕方まで長時間にわたり、床上浸水が続いた。

8 日の降り始めから 13 日までの雨量は、四方指（池田町）の 1,400 ミリを最高に、内海ダム 1,281 ミリ、殿川ダム（池田町）1,043 ミリと 1,000 ミリを超え、1 年分がわずか 6 日で降ったことになる。この災害は、連続降雨量、日雨量、時間雨量などの記録を全て書き換えることとなった。内海町での 11 日に降った雨量は、何百年、あるいは千年に一度あるかないかの雨と専門家がコメントしている。

一般的に、日雨量が年間雨量の 1 割を超えると災害が起きるといわれている。51 年の大雨は、それを何倍も上回る記録破りのものとなった。

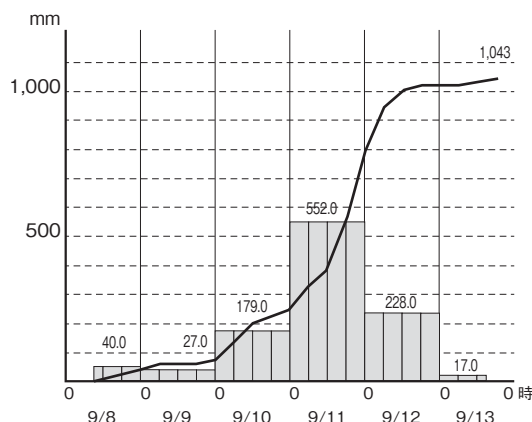
各地に避難命令が相次いで出され、停電のなか住民は真夜中に避難を開始

9 月 10 日早朝の大雨洪水警報発令にともない、池田・内海両町において各課長および水防本部付職員が非常招集され、両町に水防本部が設置された。

池田町では消防団員・消防署池田分署員の水防活動が開始され、内海町においても小豆島消防署内海分署員および内海町消防団員を非常招集し、河川および危険箇所の巡視警戒を命ずるとともに、分団長の判断により住民に避難命令を出すよう指令がなされた。

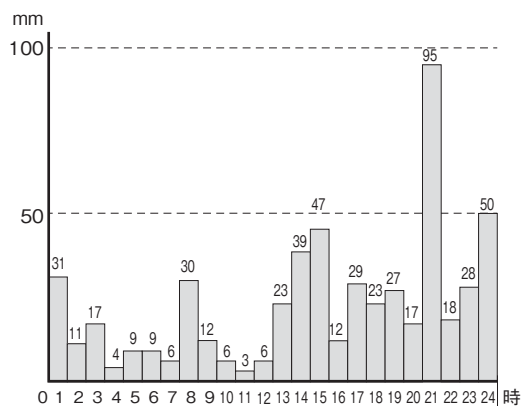
内海町では雨の降り始めた 8 日頃から一部の地域で避難が始まり、10 日午後 4 時過ぎには橘地区の老人と子どもおよそ 100 人が改良住宅に自主避難するなど、10 日夜までにおよそ 4,700 人の住民

■台風 17 号 累加雨量および日降雨量



昭和 51 年池田町殿川ダム観測所調

■台風 17 号 時間雨量
9 月 11 日 (0 時～24 時)



昭和 51 年池田町殿川ダム観測所調



ボートで避難する安田地区植松の住民。

が避難した。

11日へと日付が変わるころ、島内各地から被害の報が続々と届き始め、午前1時には停電も発生した。

午前2時、池田町百尋地区では東浦公民館への避難が開始され、住民は激しく降る雨の中を、消防団員らの誘導によって避難所へ避難を始めた。

午前2時30分、内海町では全町に避難命令が出されたが、河川の決壊、氾濫による濁流で道路のいたるところが寸断され、広報車は走れず、各戸雨戸を閉めているため公民館放送は聞こえずらくと、避難伝達は徹底を欠いた。

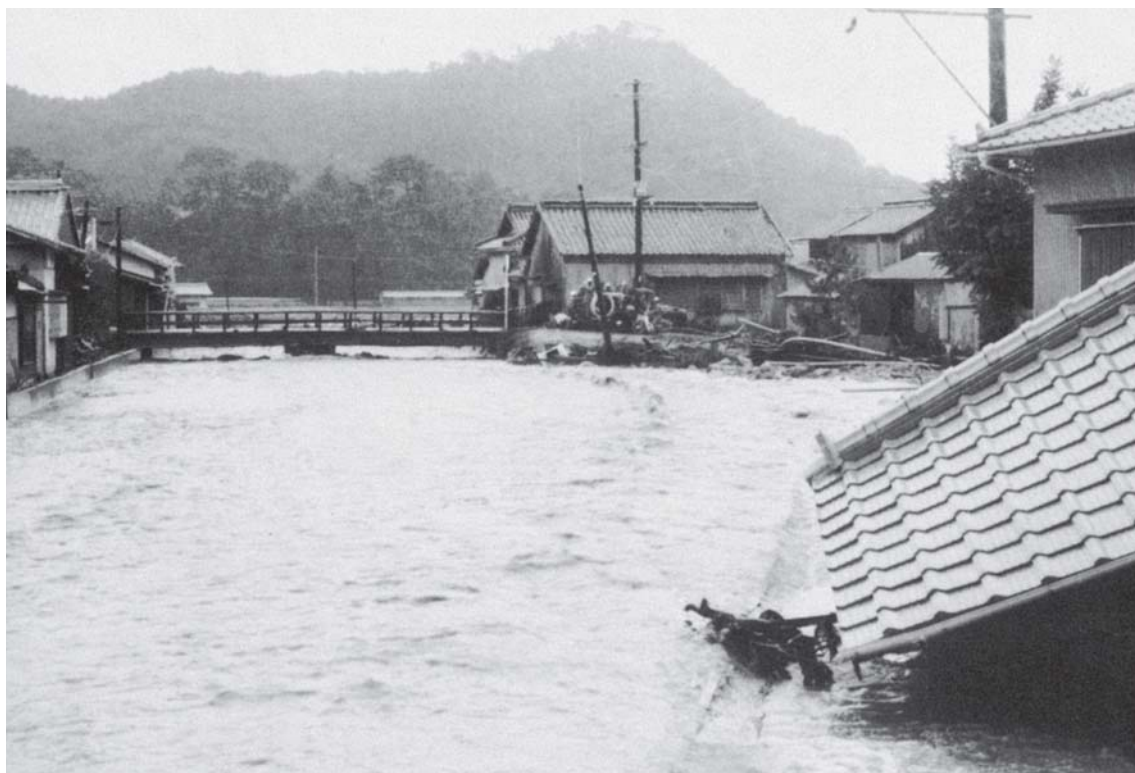


救出され、ボートで避難する住民

2時間後の午前4時40分には、池田大池の増水による避難準備を告げる放送が行われた。

同日午後2時30分石場地区住民の竹生公民館への避難に続き、池田大池決壊の恐れがでたため、付近住民に池田町公民館および池田中学校体育館への避難命令が発令された。午後3時過ぎ、室生大池崩壊の危険があるため池田公民館二生分館への避難の指示が出された。

同時刻、石場地区住民が内海町西村のオリーブ



池田大川の氾濫により倒れた家屋（迎地）



二面地区石場の土砂崩れ

丘に避難（午後7時過ぎ、星城小学校へ移動）。

同日午後5時過ぎには、当浜地区住民全員がゴルフ場へ避難。

池田町の対策本部に連絡のあった避難をまとめると、池田地区の2,874人を最大に、11日から14日までの4日間で5,689人が避難した。内海町では、11日と12日でのべ10,445人と多数が避難し、49年災害の教訓が生かされたことがうかがえる。

避難所では、停電、断水、電話の不通など、相次ぐ厳しい条件のもとでの共同生活を余儀なくされたが、不十分な毛布や食糧にもかかわらず、雨水をためて炊飯をしたり、赤ちゃんのミルク作り、おしめの洗濯などで助け合いながら避難解除の知らせを待った。

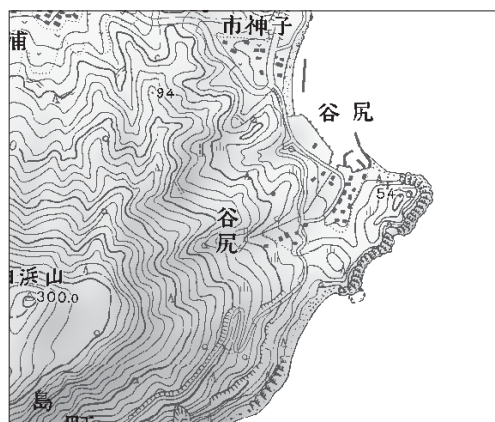
しかし、このときの避難体験から、3日分の食料品と水、一着分の衣料、基礎的な医薬品を持参しての避難が課題とされた。

谷尻地区の土砂崩れ



深夜近く、大音響の後に土石流にのまれた 谷尻地区

9月11日午後8時過ぎに、赤坂地区で3回の土石流が起きたのに続いて、午後11時半頃、ドカーンという音とともに、大量の土砂と鉄砲水が34世帯、132人が暮らす谷尻地区を襲った。土石流は白浜山（301.7メートル）東斜面の山腹、標高150メートル付近の風化花崗岩の崩壊に始まり、流化する途中で谷の側壁の基部にたまっていた岩屑をとり込みながら土石流を大きくしていき、安山岩の大きな岩を土砂とともに押し流しながら、民家をのみこみ、海岸の谷尻漁港西側にまで達した。



■谷尻地区



山の中腹からは幅約80メートルにわたって土砂や大石が流れ出て、それが家屋の上におおいかぶさった現場では、命からがら逃げ出した住民による救助活動が開始されたが、夜間でもあり、救助は難航した。12日には負傷者や生存者およそ50人が巡視船で救助された。

13日に海路から陸上自衛隊25人が上陸したほか、県警本部機動隊、地元消防団員らによる本格的な不明者の搜索活動が始まり、夜間も投光器を使った搜索活動が続けられた。

遺体発見の知らせが続くなか、13日昼前に崩壊家屋のすきまから姉妹が奇跡的に助けだされるという朗報も届けられた。



室生地区丸山付近の土砂崩れ

犠牲者の中には、豪雨をついて家々を回って避難を呼びかけた後、自宅で家族もろとも濁流にのまれた消防団員もいた。

2年前の災害の教訓が生きた橘地区は 人的被害なし

内海町では町内の 4,741 世帯の安全を守るため、1,583 人の自治消防団員が避難誘導、防災作業、救援、救助にと活動を展開した。

なかでも、公設消防の設置がない橘地区では、多くの犠牲者を出した 2 年前の災害に学び、独自の自衛・防護活動を展開した。

同地区では 9 月 8 日から雨が降り続いたが、大雨洪水警報が発令された 10 日早朝、指定の避難所へ移動を開始。午前 7 時には小学校休校が伝えられ、防護団員は警戒のため出動し、各所暗渠の点検および土砂の取り除き、1,000 俵の土のう積みを行った。人身事故を起さないことを目標に、各戸へ避難勧告および誘導をし、午後 3 時には地区内約半数を各避難所へ避難させた。3 時 20 分災害対策本部が設置され、団員は全員公民館で待機。

11 日未明より土砂崩れ、家屋の流失、孤立等の連絡が相次いだ。いづれも無事救出し、負傷者は本町へ船の手配を依頼し病院へ搬送した。午前 7 時半、全戸に避難命令を出す。電話不通、停電のなか、9 時に緊急の自治会役員会を開き、今後の対策および避難者の炊き出しなどについて相談がなされた。この時点での被害状況は全壊 2 戸、半壊 5 戸であった。避難をしぶる住民も連れ出すようにという指示のもと、病人および老人は戸板で避難誘導した。地区民全員が無事避難できたのは、午後 1 時のことであった。

その後、3 地区で土石流が発生し、川沿いの家屋が流失し、全半壊 18 戸を数えた。避難があと 1 時間遅ければ、確実に犠牲者が出たであろうといわれる。橘地区では 2 年前の災害で得た尊い教訓により、人的被害を出さずにすんだ。



室生地区丸山付近の土砂崩れ



安田大川の氾濫（大川橋）

自衛隊へ災害派遣要請を行い、 本格的な救援活動が開始される

9月11日午前6時55分、香川県災害対策本部が設置され、小豆事務所に現地対策本部が置かれた。同日午前8時、内海町から自衛隊へ災害派遣要請をしたのに続いて、午前9時には県知事から善通寺の陸上自衛隊に対し、小豆島への災害派遣要請がなされた。

午後8時30分には、県知事が給水と救護物資輸送のため海上自衛隊へ要請。

9月12日午前1時30分に自衛隊が内海町に到着、ただちに安田大川決壊現場の調査応急復旧作業にとりかかった。

一方、池田町では陸上自衛隊が谷尻地区へ行方不明者救出に向かうなど、本格的な救援活動が開始された。

道路の通行不能に対処し、 荒れ狂う海で決死の救出活動

小豆島では島内を一周するように海沿いに道路がつけられているため、山崩れなどによる土砂の流入や倒木、損壊などで通行不能となる。このときの災害でも多くの道路が塞がれたため、

救援に駆けつけることができなくなり、集落の孤立が相次いだ。

こうした事態に、巡視艇などによる海からの救援活動が活発に行われた。

9月11日午後4時すぎには、西村竹生地区の負傷者を漁船が搬送し、避難民は巡視船で草壁港へ搬送された。

また、岩谷地区で起きた土石流で住民およそ90人が孤立したため、11日午後9時30分頃、海からの脱出を要請。海上保安部の巡視船「くまの」、巡視艇「きよづき」が12日午前0時すぎに岩谷沖に到着した。海上は13～15メートルの風で波が高いうえ、濁流が猛烈な勢いで陸から海に流れ込んでいるため、小型の作業艇による救出となった。暗闇の中、荒れ狂う海上への脱出に幼い子どもは泣き叫び、救助を拒む老人の姿も見られたが、小型艇による決死の救出作業は6往復繰り返され、見回りで集落に残る10人ほどを残し、住民80人が午前4時前、無事に巡視船に収容された。

翌12日には県水産指導船「ことぶき」が竹生へ出動、住民を救出した。また、高松海上保安部の巡視艇「たかなみ」が12日午後、家屋の下敷きで脊髄を損傷した女性を高松へ移送。安田、片城地区においても孤立者救助のためゴムボートで救助隊が出動した。吉田地区には海上自衛隊の掃海艇が向かい、13日午後には巡視艇が堀越地区で救助活動にあたるなど、陸路を断たれた地区の住民が続々と海路で避難した。

また、救援物資の多くは漁船などで海路、避難所へ運び込まれるなど、その後も海からの支援が続けられた。

警報解除後に行われた 給水、診療、救援物資の輸送

9月13日、午後0時30分に大雨洪水警報が解除された。



内海町役場へ避難する住民



自衛隊員に抱えられて避難する子ども



負傷者を運ぶ



炊き出しに追われる給食センター職員

午後3時には台風は隠岐島の北90キロメートルへ去り、四国地方での降雨はほとんどなくなった。

昼過ぎに自衛隊歩兵部隊128人が到着、直ちに行方不明者搜索を開始した。

午後1時30分、内海町に出されていた避難命令解除。

翌14日、早朝より消防署員、団員らが行方不明者搜索活動に入るとともに、被害調査も開始された。

海上自衛隊給水船など5隻のほか8隻が増援で出発。陸上自衛隊小豆地区増援部隊が現地へ入った（隊員600人、車両65台）。

診療船「さぬき丸」「済生丸」の二隻による被災住民の診療も開始された。社会福祉法人済生会の診療船「済生丸」は、医師2人、看護婦4人を谷尻地区に送り込み、約50人の診療を行った。

15日に入ると県災害対策本部の給水船が派遣され、救援物資が届けられた。

災害後ただちに救援救出および災害復旧作業に従事した自衛隊も9月20日から逐次撤収が行われ、21日には自衛隊施設大隊、22日に自衛隊歩兵大隊が任務を終えて引き揚げた。

池田町で9月9日から23日まで15日間に活動に参加したのべ人数は、自衛隊が3,670人、警察機動隊1,092人、消防団1,957人である。



救援活動に向かう自衛隊員（谷尻地区）



ヘリコプターで救援物資を運ぶ（谷尻地区）

〔被害の状況〕

「1400ミリの爪跡」と形容された さまざまな大災害が、 全域に広がる

9月8日の降り始めから13日までの雨量が、最高1,400ミリというとてつもないものになったことから、島内各地で土石流や山崩れが発生し、ため池や河川の堤防決壊や氾濫、およびそれらによって引き起こされた家屋倒壊や浸水、冠水などの被害が全域に広がった。被害総額も膨大で、池田町4,810,023千円、内海町は8,363,201千円となった。

主な地区の被害は次のようなものである。

池田町

・南蒲野地区

同地区は三都半島の南東部に位置し、山地の東側斜面の山麓から海岸にかけて4集落が分布する。死者24人という今災害で最大の人的被害を出した谷尻集落が含まれる。

同地区では山崩れ、土石流による被害や床下浸水などの被害が発生した。ことに谷尻集落では山麓斜面の崩壊や土石流による被害が大きく、死者に加えて重軽傷者8人、全壊家屋20戸など被害が大きかった。



すべてを押し流した土石流のすごさ（三都半島）



土石流で破壊された家や家財が、海まで流された（三都半島）



上空から見た蒲野地区（谷尻）の状況

・室生地区

三都半島の付け根部分に位置する室生地区。豊栄川下流で池田湾に面する集落では床上・床下浸水、山崩れ、土石流による被害が見られた。死者4人となった赤坂集落では、小さな谷に沿って流れ出た土石流の被害が大きかった。



重軽傷者9人のうち赤坂集落は8人。全壊家屋12戸のうち10戸が赤坂集落である。床上・床下浸水家屋は137戸であった。赤坂集落での人的被害と家屋被害は谷尻地区に次ぐものとなった。



■室生地区



室生地区赤坂の土砂崩れ



まるで石の洪水（石場地区）

・二面地区

三都半島の尾根を境に、西の池田湾に面した地域と東の内海湾に面した地域に分かれる。

池田湾に面した地域では山崩れ、土石流の他に床上・床下浸水による被害が発生した。一方の内海湾に面した地域では山崩れなど土砂災害がみられ、ことに花崗岩の巨大な岩石が多く存在する石場集落で被害が大きかった。大きいものは2メートルにおよぶ岩石を含んだ土石流が石場地区の集落を襲い、家屋を破壊して大きな被害を出した。ことに、山火事の跡地での崩れが大きかった。



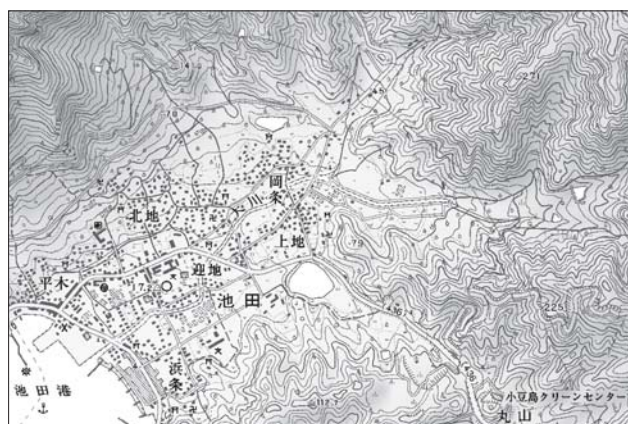
石場地区

人的被害は重軽傷者3人、家屋の被害は全壊12戸（うち石場集落6戸）、半壊8戸、一部破損家屋5戸、床上・床下浸水は117戸であった。

・迎地地区

池田大川の流域で、電照菊栽培などを行っている農家が多い。豪雨とそれによる大池の堤防決壊、池田大川の堤防決壊による床上・床下浸水、農地の冠水による被害が大きかった。人的被害は重軽

傷者2人。全壊家屋は1戸にとどまったが、床上浸水家屋46戸、床下浸水家屋52戸。鉄骨ビニールハウス栽培による電照菊は壊滅的な被害を受けた。



■池田地区



道路が陥没した（迎地地区）



川ようになった道路（浜条）



電照菊畑に流れ込む濁流

内海町

・西村地区

64戸が暮らす竹生地区では、9月11日午後9時前に土石流が発生し、24戸が被害を受け、6人（土庄町居住者1人を含む）が死亡した。同地区では山崩れも多発し、地区全体の重軽傷者は25人、家屋の全壊は54戸、半壊28戸で、床上・床下浸水187戸であった。

西村地区竹生

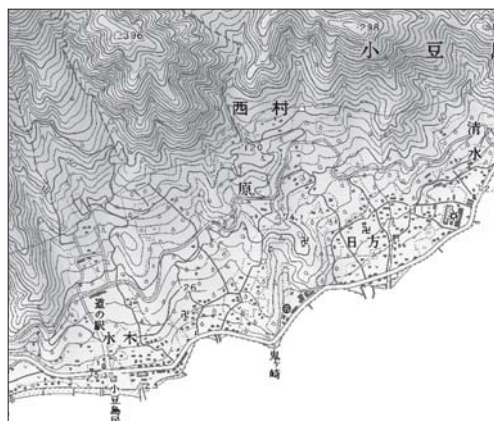




西村地区竹生



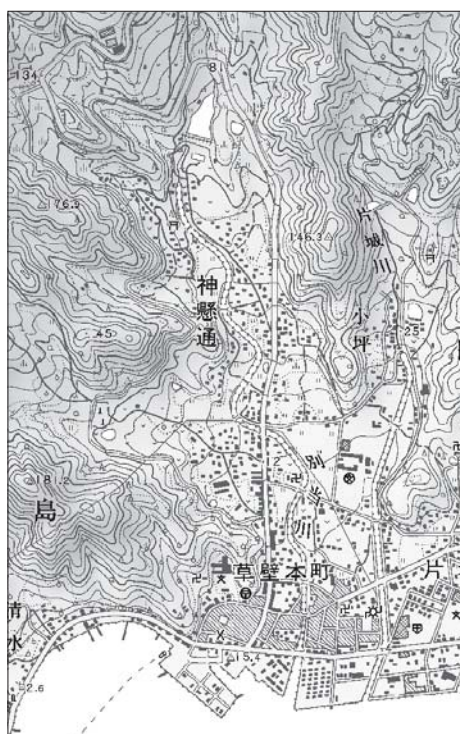
扇状に広がる西村地区の土砂崩れ



■西村地区



西城川流域の土石流被害（神懸通）



・神懸通地区

同地区では山崩れ、土石流などが発生し、土石流による家屋被害は21戸におよび、立恵地区では49年災害に続いて地すべりが起きた。地区全体では重軽傷者10人、全壊4戸、半壊22戸、床上床下浸水254戸を記録した。

■神懸通地区

・草壁本町地区

草壁本町で午前1時頃から12日夕方までの長時間にわたり洪水が発生。半壊は7戸、床上浸水が182戸、床下浸水も138戸を数えた。

・草壁本町南地区

同地区も浸水が著しく、床上浸水170戸、床下浸水30戸を数えた。

・片城地区

同地区も浸水被害が大きく、ことに内浜1区では70戸全戸が浸水被害にあった。地区全体では重軽傷者5人、半壊家屋2戸、床上浸水183戸、床下浸水50戸となった。



■草壁本町地区 片城地区



別当川の氾濫



別当川応神頭首工下流右岸



別当川応神頭首工下流右岸



安田大川の氾濫（安田古郷水路）

・安田地区

9月11日、12日と安田大川が決壊したため、床上浸水が長時間にわたり、浸水被害が大きかった。そのほか、山崩れ、土石流被害もあり、下条地区では山崩れで5戸、土石流で40戸が被害にあった。地区全体では軽傷者2人、全壊5戸、半壊15戸、床上浸水384戸、床下浸水92戸である。



■安田地区

・橘地区

9月10日夕方から自主避難が始まった。夜半には、土石流による住家の流出が起こった。早朝には、地区住民全員に対し避難命令が出された。

・岩谷地区

9月10日から被害が出始め、11日早朝に家屋倒壊により重傷者2人が出た。地区住民90人が孤立状態となったため、海上保安署が救出活動を行った。



安田大川決壊による冠水（安田地区）

・馬木地区

低地帯が多いため、浸水被害が著しく、床上浸水 242 戸、床下浸水 154 戸を数えた。また、土砂崩れ等により全壊 9 戸、半壊 3 戸の被害であった。

・苗羽地区

9 月 10 日の早朝から、崖くずれ等による被害が続出。全壊 13 戸、半壊 15 戸、床上浸水 96 戸、床下浸水 103 戸を数えた。

・福田地区

9 月 11 日未明に浸水被害が始まり、土石流で民家が流出。1 人が死亡した。地区全体では、重傷者 3 人、全壊 19 戸、半壊 7 戸、床上浸水 41 戸、床下浸水 153 戸である。



安田大川・清光橋（安田地区）



安田交差点から西側の浸水状況

山腹や山麓斜面や谷底など、 地盤の弱いところで多数の犠牲者

池田町での死者は28人に及び、そのうち24人が南蒲野地区の谷尻集落の住民で最も多い。また4人の死者は室生地区の赤坂集落の住民であった。いずれも三都半島地域であり、山腹や山麓斜面や谷底など地盤の弱いところに立地していた集落の被害が大きかった。

重軽傷者数は池田町26人で、谷尻集落の8人を含む南蒲野地区は10人、赤坂集落8人を含む室生地区で9人、二面地区は3人であった。

内海町での死者は7人（うち1人は土庄町在住者）で、6人は西村地区、1人は福田地区で被災した。重軽傷者は54人で、こちらも西村地区が最多であった。

全域にわたった建物被害、全壊家屋は187戸

池田町の全壊家屋は60戸に及んだ。南蒲野地区21戸（谷尻地区20戸）、室生地区12戸（赤坂地区10戸）、二面地区で12戸（このうち石場地区6戸）となっており、以上の3地区で全壊家屋が多かった。

半壊家屋は、池田町全体で42戸、一部破損家屋は22戸で、これらは南蒲野、室生、二面、中山など各地区でみられた。

床上浸水家屋は池田町全体で469戸、床下浸水家屋は1,026戸に及び、全町にわたった。

内海町の全壊家屋は127戸と池田町を上回り、西村地区の54戸が突出している。半壊家屋137戸、床上浸水1,543戸、床下浸水1,191戸であった。

道路、通信、電気、水道などライフラインが寸断され、 混乱をきたす

・交通

定期路線バスは9月13日に小豆島全線が運休したが、その後の県道の復旧とともに回復し、坂手・土庄間は10月1日、草壁・福田間は10月30日に完全復旧した。翌年7月1日には小豆島一周定期観光バスが復旧した。

土砂崩れや陥没などで各所が寸断された道路網だが、県道小豆島循環線（現国道436号）は9月26日、県道三都港平木線9月21日、県道蒲野内海線（現県道蒲野西村線）9月17日、



丸山付近の道路陥没

県道神浦吉野線 9 月 22 日、県道上庄池田線が 9 月 24 日に通行制限解除となった。

・通信

池田町は 9 月 15 日時点で 429 回線が被害を受けた。復旧が急ピッチで進められた結果、9 月 19 日には全線復旧した。

一方内海町では、市内電話 2,544 回線が被害を受けた。もっとも被害が深刻だった福田局では、9 月 11 日午後 2 時頃までに、内海向けと土庄向けの幹線ケーブル 2 本 300 回線が土砂崩れで断線となったため、災害用の孤立無線を運用し、1 回線を確保して陸の孤島化を防いだ。

問い合わせのほとんどが内海町災害対策本部へかけられたものだが、役場電話交換室も浸水して 7 回線のうち 4 回線が通話不能となったため、当初は常時話し中の状態となり、大変混乱した。

無料の特設公衆電話が内海局窓口ほか 6 か所、計 18 個が設置され、住民の利用を助けた。市内電話は 9 月 24 日の段階で 99 パーセントが仮復旧している。

・電気

池田町では、東浦、室生丸山で 9 月 11 日真夜中に起きた供



浸水の中での給水活動

給障害を最初に、室生、二面、長崎、小蒲野、蒲野、吉野、南蒲野、神浦、中山、小豆島ヴィラなどで電線断線と電柱倒壊が起き、その他の地域でも 12 日にかけて電線の断線が相次いだ。

小豆島全戸で電力が復旧したのは 9 月 16 日である。

・水道

池田町では殿川ダムの完成にともない、各地区の簡易水道は中山簡易水道を除いて廃止され、昭和 50 年より一部地域を除く全町で給水が開始された。

しかし、この災害で 9 地区すべての水道施設は被災し、最も復旧が早かった室生地区が 9 月 14 日、翌 15 日には蒲生地区が復旧したが、全面復旧までは日数がかかり、池田地区の完全復旧は 10 月 4 日であった。

慢性的な水不足の内海町は、上水道は別当川・安田大川などのほか、約 10 キロメートルの導水管で東北端の吉田川からも送水している。台風 17 号により吉田川からの導水管は寸断され、三五郎池その他の貯水池は土石流に埋まり、簡易水道も各所で被害を受け、9 月 11 日から 14 日は完全断水となった。

住民に恐怖と危険をもたらしたため池の決壊

ため池が多数存在する小豆島では、この災害で 165 池が被災した。このうち内海町 68 池（41.2 パーセント）、池田町は 24 池（14.5 パーセント）であった。

被災内容では土砂流入が最も多く、内海町では 51 池、池田町では 18 池に土砂が入った。下流域に大きな被害を与える原因となる決壊は、内海町で 21 池、池田町では 9 池であり、香川県下でもその割合は群を抜いて多く、小豆島におけるため池災害の激甚さを物語っている。

ため池の決壊は、池田町では池田大池、二面大谷池、池田巽池、二面化池、吉野賢東池、吉野新池、蒲野大池の 8 か所である。ことに 9 月 11 日午後 9 時頃に決壊した広さ 2,733 平方メートル、貯水量 8 万トンほどの池田大池の決壊により、下流付近の家屋はほとんど床上浸水の被害を受けた。

ため池はこれまで利水面だけでなく、洪水調整という治水面でも重要な役割を果たしてきたが、その機能をはるかに超える豪雨により、下流域の住民に恐怖と危険をもたらしたのである。



池田大池の決壊

池田町における橋梁損壊は池田千軒橋、八千代橋、迎地橋の3か所であったが、内海町では11か所の橋梁が被害を受けた。

河川の氾濫、決壊も多発した。

小豆島の河川は小規模なものが多い。川幅が狭いうえに浅く、急カーブが多いため、200～300ミリの雨で危険な状態になる。記録破りの豪雨で、こうした脆弱な体質が露呈した。

延長2,500メートル、流域面積6.9平方キロメートルにおよぶ池田大川は、山から押し流された土砂で河床が上がり、水かさが増えて12日夜に決壊した。

内海町では延長3,200メートルの安田大川、苗羽地区を流れる中筋川などが氾濫、決壊し、あふれ出た水が下流域に浸水や田畑の冠水、流出、埋没などの被害をもたらした。

安田大川の決壊、氾濫により、内海病院や中学校などのある町の中心一帯は水につかり、内海町役場前の県道（現国道）は水深およそ1メートル、川沿いの商店街は1.5メートルほどとなった。川に沿った県道（現国道）は川となり、濁流が渦巻いた。

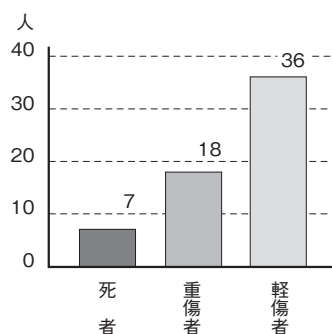
土砂崩れは、9月10日早朝の目見ヶ谷など各所で起き、両町合わせて390か所にのぼった。県道蒲野石場線（現県道蒲野西村線）や町道谷尻白浜線（4か所）など、各所で道路が寸断した。



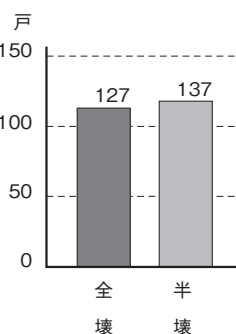
植松馬場（安田地区）

データでみる昭和51年の被害の状況（内海町）

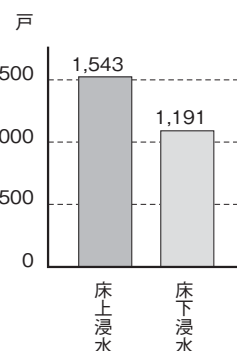
■人的被害



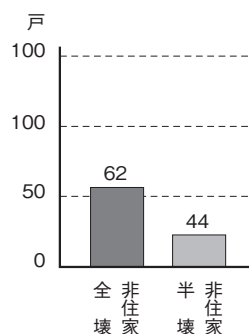
■建物被害（倒壊）



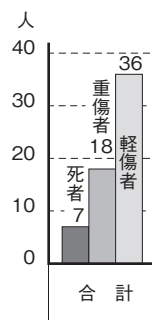
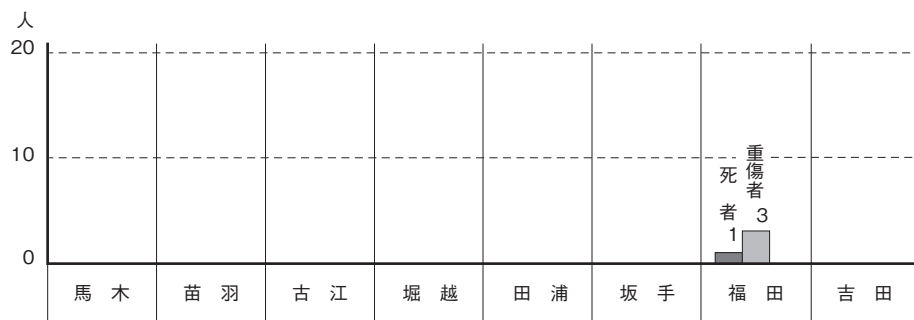
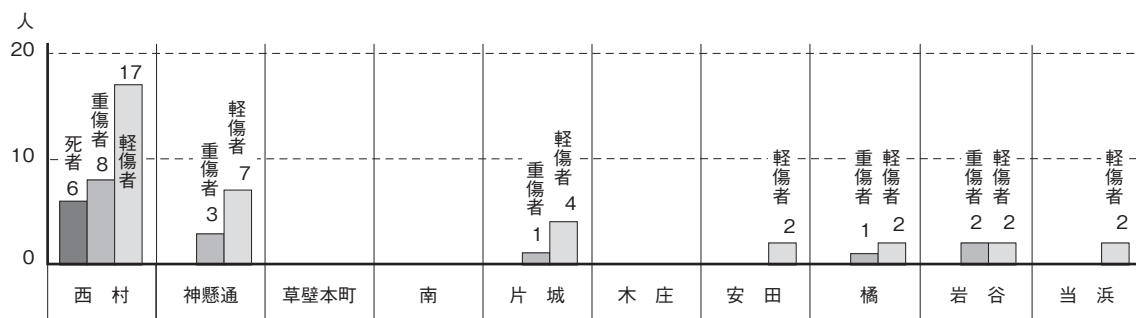
■建物被害（浸水）



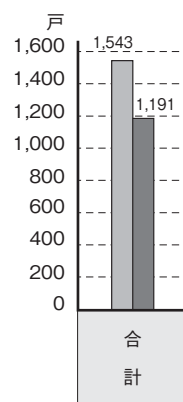
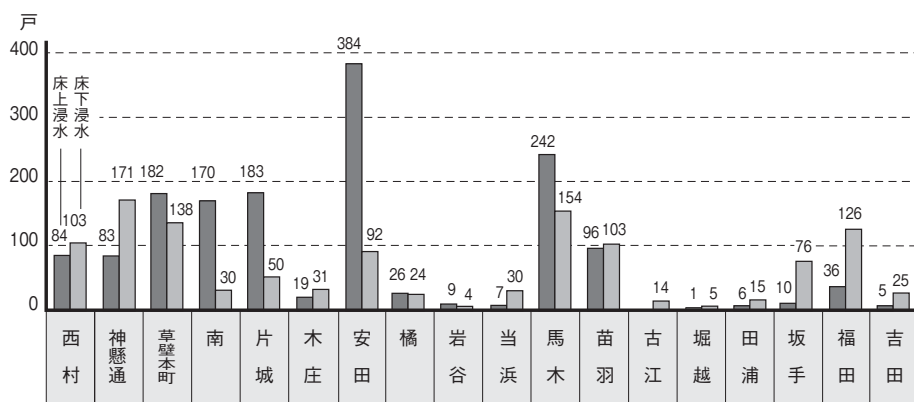
■建物被害（倒壊）



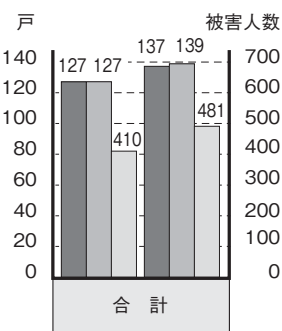
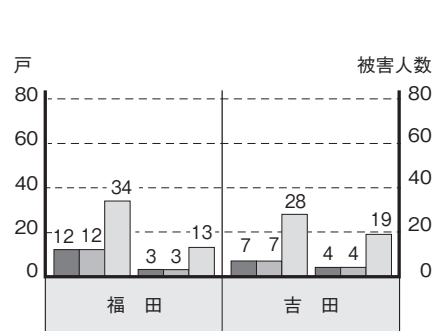
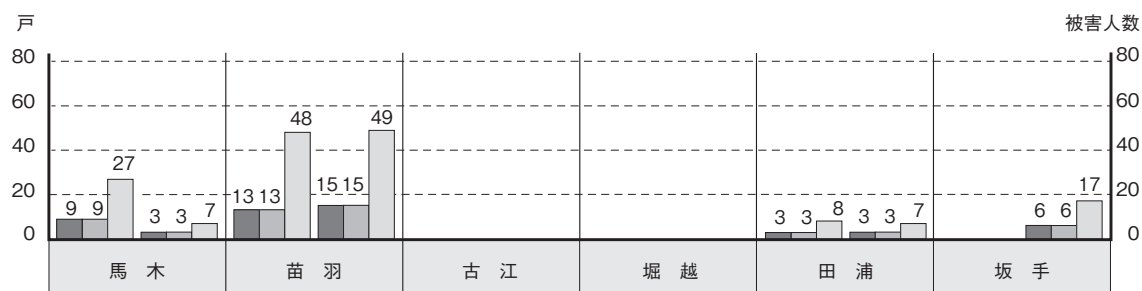
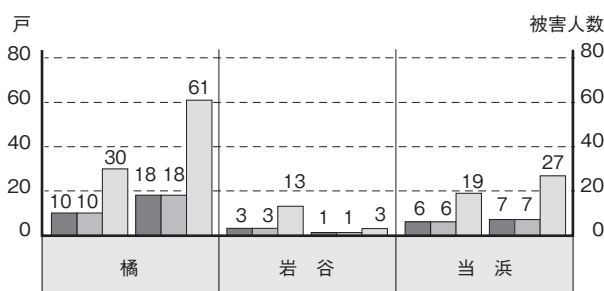
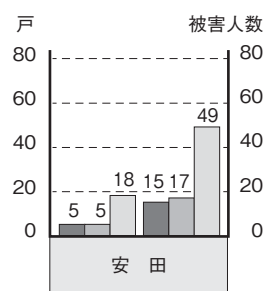
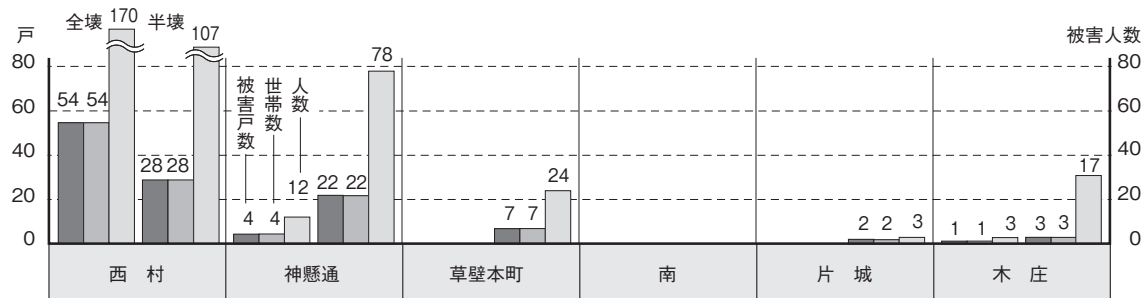
■地区別人的被害状況



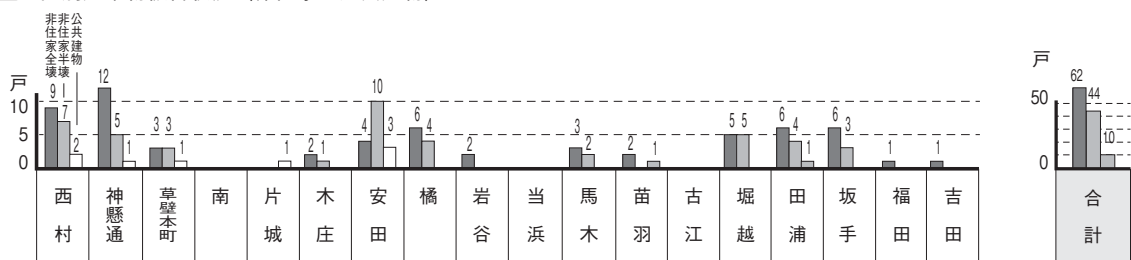
■地区別建築物被害状況（住家浸水）



■地区別建築物被害状況（住家倒壊・損壊）

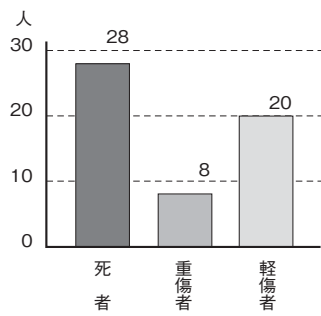


■地区別建築物被害状況（非住家・公共建物）

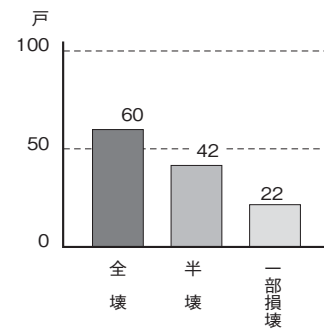


被害の状況（池田町）

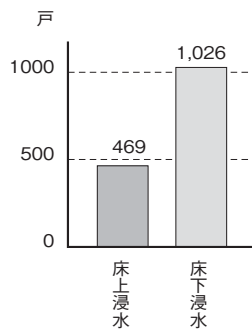
■人的被害



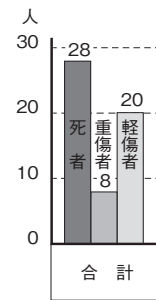
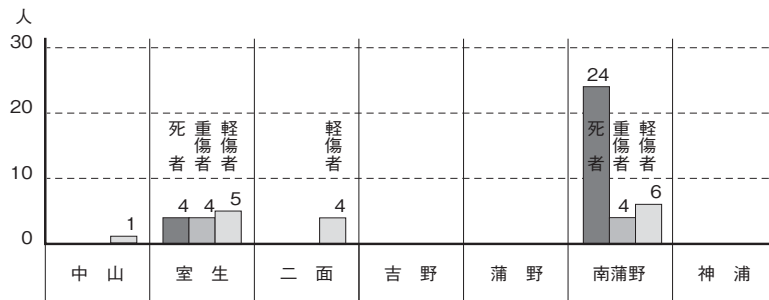
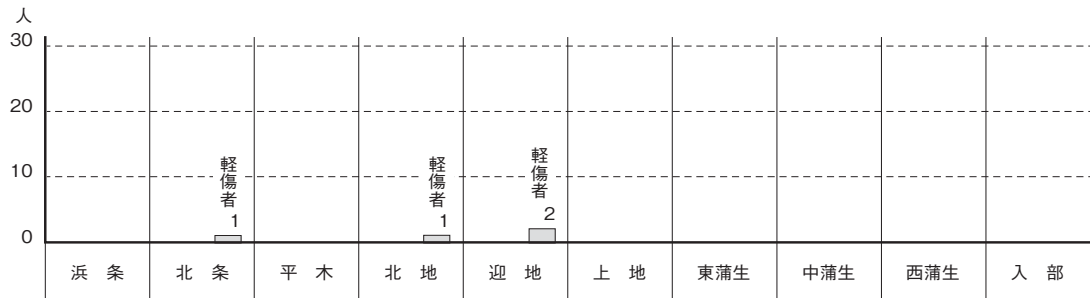
■建物被害（倒壊）



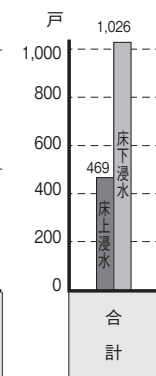
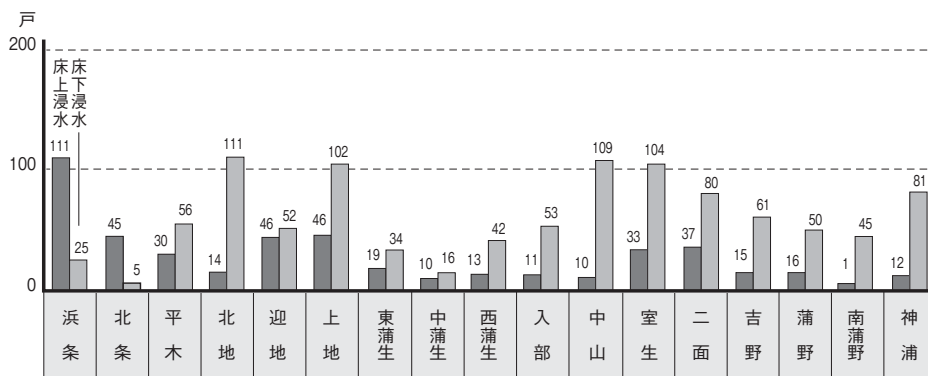
■建物被害（浸水）



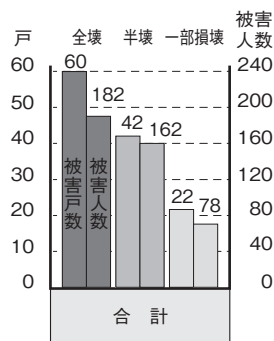
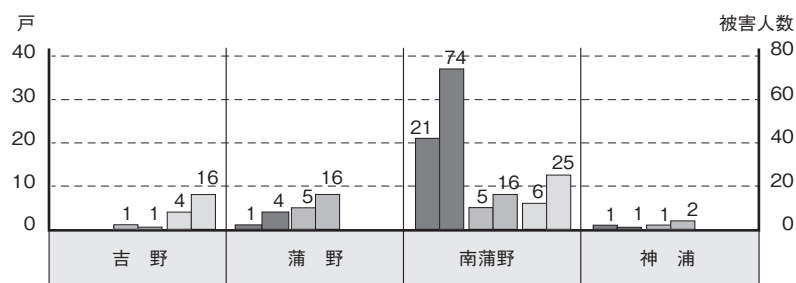
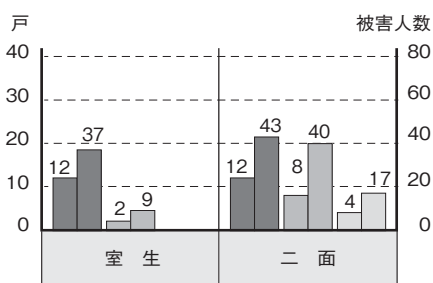
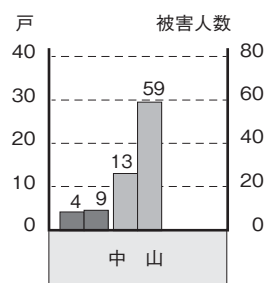
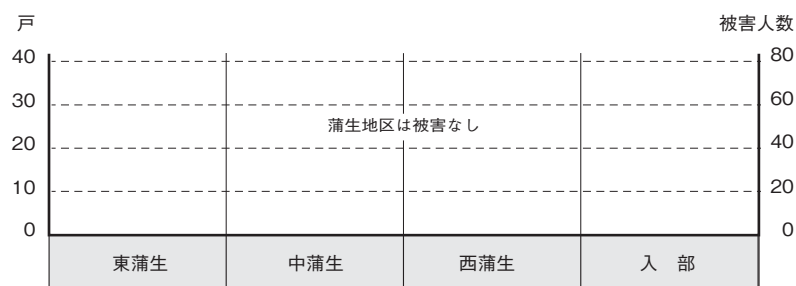
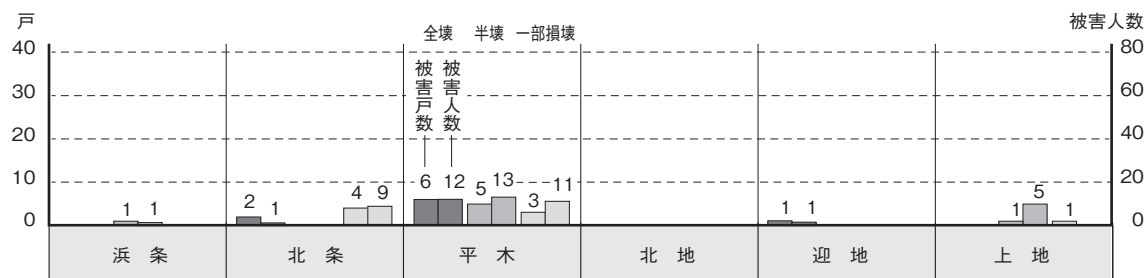
■地区別人的被害状況



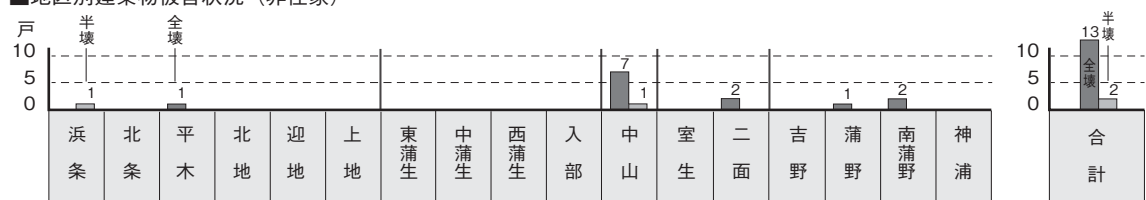
■地区別建築物被害状況（住家浸水）



■地区別建築物被害状況（住家倒壊・損壊）



■地区別建築物被害状況（非住家）



地場産業「電照菊」880 万本が被害、 被害金額 5 億円と痛手も大きく

冠水や土砂流入などによる池田町での農地の被害は全域にわたったが、ことに全国でも有数の特産品である電照菊の被害は甚大だった。

電照菊は池田大川流域の谷底平野や氾濫原地帯において、鉄骨ビニールハウスが建設され、栽培されていたが、大雨やそれによる堤防の決壊、河川の氾濫により、多くの農地が冠水し、土砂に埋まった。ことに池田大池の決壊で、池田地区一帯の電照菊畑は土砂に埋まった。

専業農家およそ 300 戸のうち 3 分の 1 が菊主体の経営という池田町では、約 40 ヘクタールの電照菊栽培面積のうち、55 パーセントにあたる約 22 ヘクタールが冠水などによる被害を受け、被害金額は 3 億円に達した。また、年間生産本数は約 1,600 万本だが、半数にあたる 880 万本の被害となり、被害金額は 5 億円超とされた。(52 年度から二カ年計画で、第二次農業構造改善事業による電照菊栽培の立て直しが図られた)

また、小豆島は全国屈指の醤油生産を誇るが、最大手の丸金を含む醤油醸造業の 26 社が集中する内海町では、半数の 13 社が被害を受け、町内メーカーの被害総額は 1 億 4,800 万円に達した。

馬木地区では工場が倒壊したほか、各所で製品や製造用具が冠水するといった被害を受けた。だが、この時期は醤油生産のピーク時から外れており、仕込みを休んでいたところも多かったために、原料や製品の被害が少なかったのは不幸中の幸いであつた。

とはいえ、記録的な豪雨のために、被害メーカーのほとんどが 4 日から 1 週間程度の操業停止を余儀なくされ、出荷の遅れが生じた。

一日も早く学び舎へ。
自家用車や漁船で送迎し、
先生は泊まり込みで授業再開

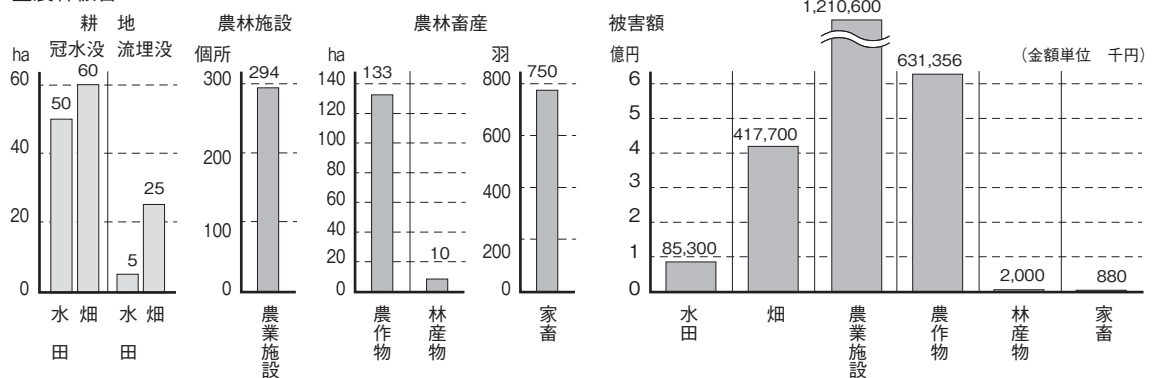
池田町内の 6 幼稚園、5 小学校、1 中学校でも休園・休校が相次いだ。9 月 11 日には蒲生幼稚園・蒲生小学校を除くすべての園と小中学校が休園・



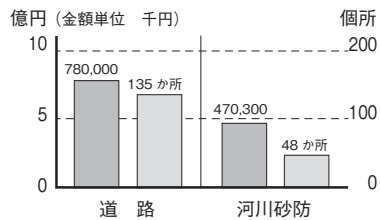
工場被害

被害の状況（池田町）

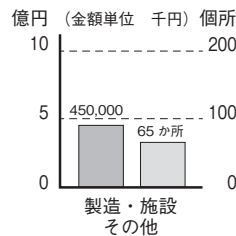
■農林被害



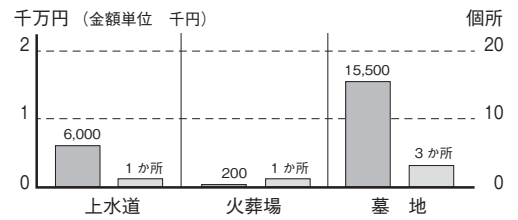
■土木被害



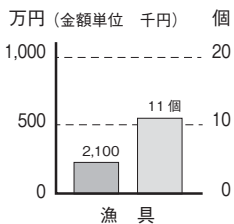
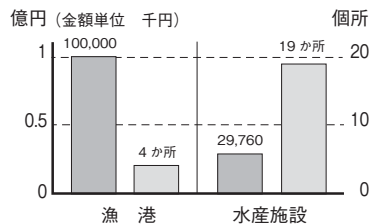
■商工被害



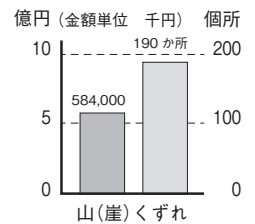
■環境保健被害



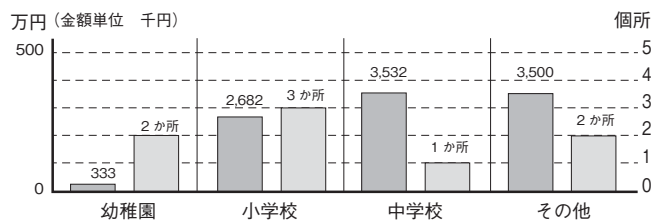
■水産被害



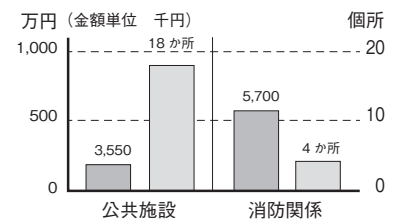
■その他の被害



■文教施設被害



■公共施設被害

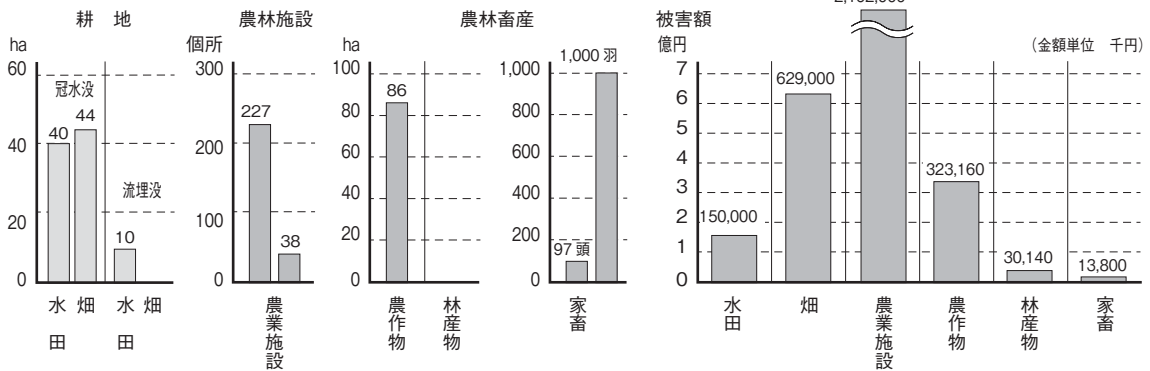


被害総額

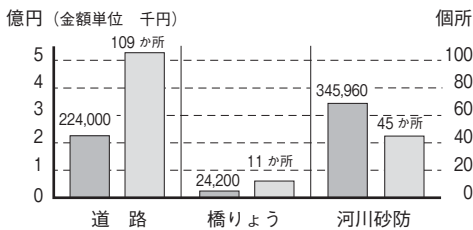
農林被害	2,347,836 千円	文教施設被害	10,047 千円
土木被害	1,250,300 千円	公共施設被害	9,250 千円
商工被害	450,000 千円	その他の被害	584,000 千円
環境保健被害	21,700 千円		
水産被害	136,890 千円	合計	4,810,023 千円

被害の状況（内海町）

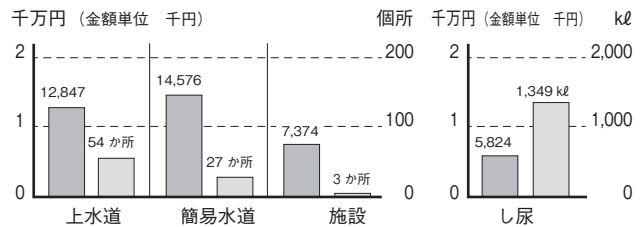
■農林被害



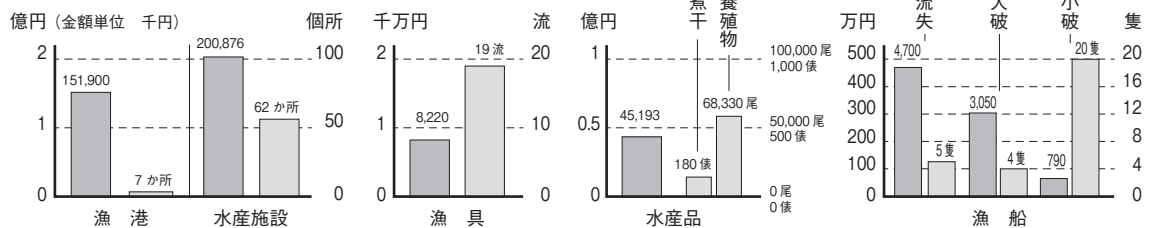
■土木被害



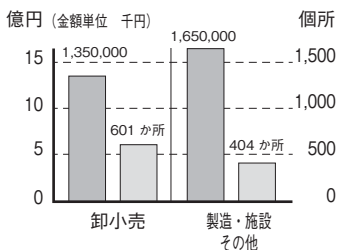
■環境保健被害



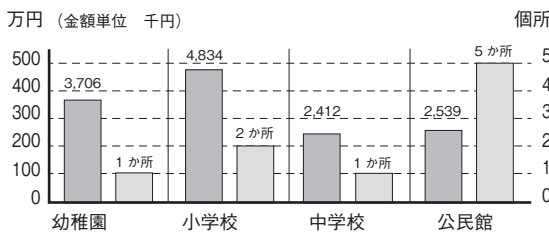
■水産被害



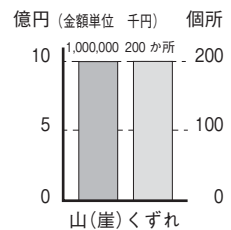
■商工被害



■文教施設被害



■その他の被害



被害総額

農林被害	3,293,100 千円	文教施設被害	13,491 千円
土木被害	594,160 千円	その他の被害	1,000,000 千円
環境保健被害	40,621 千円		
水産被害	421,829 千円		
商工被害	3,000,000 千円		
合計	8,363,201 千円		

休校となり、建物にも被害を受けた。

9月13日の警報解除から正常化の動きが急速に進み、幼稚園では14日の蒲生幼稚園を最初に、被害の少ない所から正常化が進み、9月20日の三都幼稚園および神浦分園を最後に幼稚園は正常化した。

小学校は、中山小学校が14日に正常化した。他校は半日授業や分散授業が行われ、最後となった三都小学校では22日に正常化した。

町内唯一の池田中学校では11日からの休校は17日には半日授業となったが、正常化は22日まで待たなければならなかった。

内海町では、町内の7幼稚園、4小学校、1中学校は11日から休園、休校となった。道路の損壊で車の通行ができなくなった田浦地区の子どもたちは16日から3日間、「岬の分教場」で知られる旧苗羽小学校田浦分校で授業を行った。教諭はモーターボートで岬に通った。

安田小学校に通う岩谷・橘地区の1、2年生は橘の旭幼稚園、3年生は橘公民館の小集会室、4～6年生は改良住宅と、それぞれ仮教室で勉強を続けるなど苦労を重ねたが、自家用車や漁船で送迎した保護者、現地に泊りこんだ先生などの協力により、小中学校では早期に分散授業が開始された。福田・苗羽小学校では9月20日には授業が正常化、他校もそれに続いた。



避難状況

〔急ピッチで進められた応急対策〕

台風17号は甚大な災害を引き起こして、ようやく北へ去った。

大きな痛手を受けた住民は行政、消防団、警察、自衛隊、近隣市町村の応援隊とともに、応急対策に迫られた。

11トンダンプカー1日160台で運搬し、 1年間で費やす膨大な堆積土砂とゴミ

町全域にわたったゴミ、ヘドロはもとより、倒壊家屋、住宅地域での流入土砂の取り除き作業が、住民および自衛隊を含めた町外からの応援により行われた。

池田町では土砂、ゴミは災害復旧工事により出される土砂とともに平木地区、谷尻地区で埋立処理した。埋立量は、平木地

区で約 152,000 立方メートル、谷尻地区では約 71,000 立方メートル、合計約 223,000 立方メートルとなった。

内海町では、49 年災害のとき埋立が行われた苗羽、草壁埋立地と片城地区の空地など 8 か所の仮置き場へ運搬集積した。

仮置きしたゴミ、土砂は 80,000 立方メートル（49 年災害 30,000 立方メートル）にも達し、これと災害復旧工事によって排出される土砂 270,000 立方メートル、合わせて 350,000 立方メートルの対策として、苗羽宮山海岸に埋立て処理した。ちなみに、350,000 立方メートルの土砂は、11 トンダンプカー（6 立方メートル積載）で 1 日 160 台運搬して、1 年間で費やす量である。

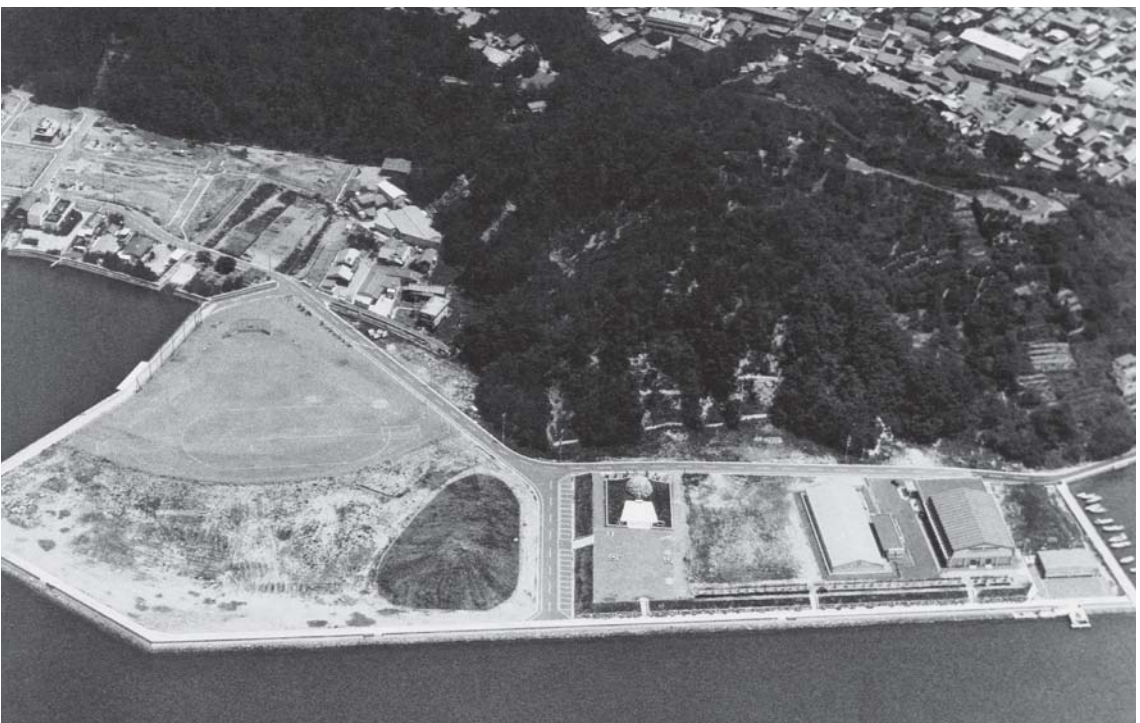


水害の片付けで発生したゴミの仮置き場

衛生面から対策が急がれたし尿処理

衛生上早急に処理しなければならないし尿については、町外からの応援、協力などにより、9 月 30 日までにはほとんど処理することができた。

池田町では、収集戸数 795 戸、収集量 446,500 リットルのうち、処理船による海洋投棄が 377,370 リットル、土庄し尿処理場で 68,130 リットルを処理した。



災害残土による埋立地にできた内海総合運動公園

内海町においても、9月30日までに処理は完了した。処理場であるみさき園は、土砂流入のためにポンプ室をはじめ施設のほとんどが被害を受けて運転不能となったため、大川郡の大川地区広域行政振興整備事務組合の協力により、バージ船1,000トンと230トンの2隻を借り上げ、海洋投棄を行った。



し尿のバージ船への搬入

環境悪化による病気の発生を予防

家屋への土砂の流入、浸水などによって衛生環境が悪化し、食中毒、赤痢などの伝染病の発生が予想された。

池田町においては、地区住民および町外からのボランティアらにより、地区内の薬剤散布、井戸水の消毒、検査活動に加えて、保健婦による食生活、生活環境の防疫指導を行い、伝染病および他の病気の発生予防に努めた。

予防機材は動力噴霧器4台、肩かけ手押し3台。使用薬品は消石灰160袋（20キログラム入り）、クレゾール420本（0.5リットル入り）、オルソー剤60缶（18リットル入り）、ハイクロン5箱（16キログラム入り）であった。

内海町では、9月14日から9月20日の1週間に町内全域（浸水地域）の薬剤散布、および各家庭への配布を実施した。噴霧機は県、観音寺市、善通寺市、土庄町から7台の提供を受け、この間の作業のべ人員は、自衛隊員128人のほか、三豊郡大野原町からの26人をはじめ、団体、業者などからの奉仕者は84人となった。

散布および配布した主な薬品は、オルソー剤488缶（18リットル入り）と800本（500ミリリットル入り）。クレゾール15缶（18リットル入り）と940本（500ミリリットル入り）、ハイクロン55箱（20キログラム入り）、消石灰100袋にものぼった。

また、自家水利用者のための井戸水検査は、10月20日までの1カ月間にわたり土庄保健所で実施され、1.8リットル瓶341本の水質検査を実施した。

応急仮設住宅を建設し、 家屋を失った人に提供

全壊家屋60戸、半壊家屋42戸、その他町内のほとんどの家



西村地区竹生に建築中の仮設住宅



建設された仮設住宅

屋が被害を受けた池田町では、家屋を失って生活に困惑している住民に対して、町内7か所に44戸の応急仮設住宅を建設した。町内における仮設住宅建設は9月20日の谷尻地区17戸、石場地区8戸を皮切りに、建設用地は隣接地区の民有地を町が借り上げ、県に提供する形で始まった。

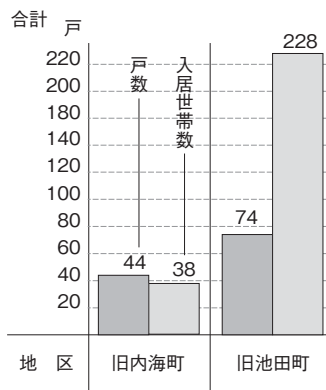
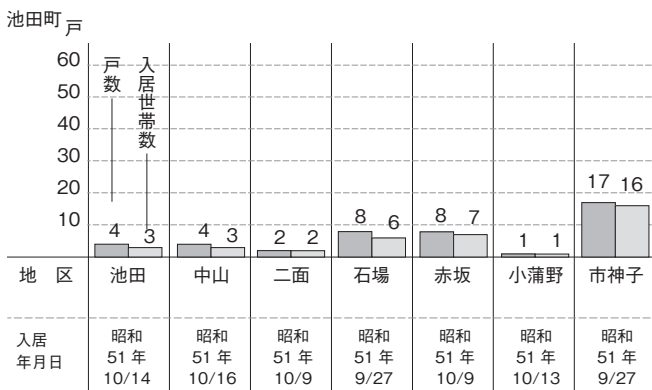
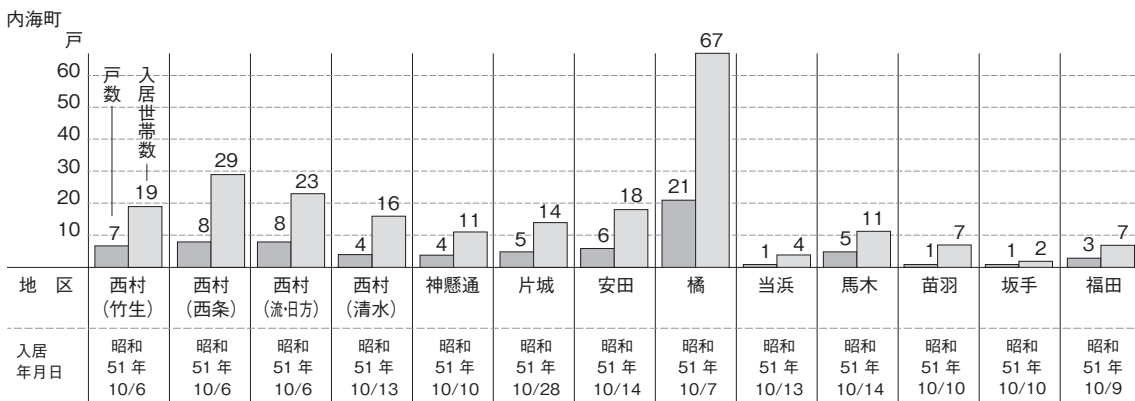
内海町での応急仮設住宅建設は、9月18日の着工以来、町内13か所で次々と実施され、10月28日まですべての入居を済ませた。

仮設住宅はプレハブづくりで、1戸あたりの基準面積は23.1平方メートル、間取りは6畳、4畳半の2DKが標準となっている。

上水道源の三五郎池は貯水不能、 内海ダムにも土砂流入、 水道施設は49年を上回る大被害

池田町での給水車による給水期間は9月15日

■応急仮設住宅建設状況



から 28 日までの 14 日間におよび、自衛艦による運搬も 9 月 17・20 日の 2 回行われた。そのほか、土庄町からの運搬や、町の井戸水を使用するなどして水道施設の復旧を待った。

内海町の水道施設は 49 年の災害をはるかに上回る大被害となり、9 月 11 日から 14 日までは完全断水となった。15 日から試験通水を開始したが水道管の破損がひどく、19 日になってようやく通水することができた。

しかしながら上水道源の三五郎池は土砂で埋没して貯水不可能となり、一方の内海ダムも多量の土砂が流入したため貯水事情は悪化し、終日通水が実施できたのは 10 月 9 日の降雨以後となり、1 カ月間にわたり厳しい給水制限を余儀なくされた。

災害援護資金の貸し付けなど、生活の立て直しを援助

被災した人々の暮らしを援助するため、池田町では災害援護資金制度が設けられ、3 年据置、年 3 パーセントの利率で災害援護資金の貸し付けを受けることができ、合計 96 件、5,200 万円が貸し付けられた。

内海町では、被災 1 カ月後の 10 月 12 日から、西村地区を皮切りに町内 11 か所で災害相談所を開設し、町長以下各課長が出向いて町再建への建設的な意見を聞いた。

また、災害援護資金の貸付が行われ、412 件、1 億 7,990 万円が貸し付けられたほか、町民税等の減免も実施された。



語り伝えたい災害の記憶

二度も起きた河川の氾濫で 商品の本が大損害 自治会長時は、墓地の移転も実行

吉本基翁

88歳 書店経営 安田在住 被災者



私は、昭和41年に京都からこちらに戻ってきました。安田大川は子どもの頃からよく氾濫しておりましたから、安田で書店を始めるときは道から30センチ^{かさ}嵩上げして店を建てました。

昭和49年の災害の時は雨がひどく、中條の自宅に帰れないので店に泊まっておりますと、晩にゴロゴロというものすごい音がしたので何かと思ったら、山から土石流が川に流れ込んだ音でした。できるだけ店の商品を救おうと思い、家族みんなで揚げられるだけ2階へ揚げましたが、すべては揚げ切れず、とうとう私の腰あたりまで水が来てたくさんの本が濡れてしまいました。下の道だと、水は私の胸以上の高さになったと思います。店の前の道にはガスボンベが浮きながら流れていましたが、蓋からシューッとガスが吹き出していたので恐ろしく、近所のタクシー会社からは自動車が2台重なって流れていくのを見て、水のすごさに驚きました。

店の裏には豚が3匹流れてきて、助けてほしかったのかこちらへ寄ってきました。しかし、大きな豚に入ってこられても困るので、可哀想でしたが棒で突ついて追いやりますと、豚も必死だったのか、なかなか離れず弱りました。後で聞いたら、川の向こう岸で生きていたようです。

昭和49年の災害の時、私の店は開店してさほど年月が経っていない頃で、概算で800万円の本が被害を受けましたから、これはもう店が潰れると思いましたが、問屋やメーカーなどが支援してくれましたので、再度資金を借り入れ、店を建て直しました。

すると、51年にまた安田大川が氾濫し、本や文具が水に浸かりました。この時も概算で800万円の被害を受けましたが、国の補助や貸付金がありましたし、本も共済に入っていましたので、店を存続させることができました。当時はまだ景気も良かったので、1600万円の被害は経営の重荷にはなったものの、商売替えをしようとか、別の町に移ろうという気は起こりませんでした。

49年当時、私は公民館長をしていて、51年の時は安田地区の自治会長もしておりました。

災害に遭った人たちから、いろいろな相談を受けましたので、道路や河川の改修、家、田畑の被害については役場に行きまして手続きするようアドバイスしました。しかし、墓は地区の責任で改修しなければなりません。氾濫によって墓石やお骨が流され、誰のものとわ

からないものは集めて合祀しましたが、安田の墓地は土手岸を削ったところに石塔を建てておりましたから、洪水のたびに流れてしまいます。そこで地域の人たちが話し合い、何億もの大きな資金を要しましたが、墓地を安全なところに移転させることができました。

平成 18 年には、ふるさとの歩みを後世に伝えたいと思い、同地区の有志 37 人で「戦後の安田誌編集委員会」をつくり、『ふるさと安田－戦後の歩み』を発行し、そのなかにも災害の記録を盛り込みました。これからも、いろいろな機会をとらえ、災害に対して気をつけなければいけないことを若い世代に伝えていきたいと思っております。



助け出した後、息子の背中で亡くなった母 子どもたちにも残ったトラウマ

浜口夫妻 浜口啓蔵・浜口美須榮 谷尻在住 被災者

浜口（妻） 昭和 51 年の災害の時は、3 日くらい前から雨が降っておりまして、主人はその時消防団に入っていましたから、従弟と 2 人が警戒にあたり、ほとんど家にはおりませんでした。山崩れがあった日も、谷尻に近い吉ヶ浦の親戚が、「畑の石がずれてきよるから、来て」と言ってきましたので、「もう 3 日も消防（活動）に出たのだから、今日は家にいたら」と私は言ったのですが、主人は 2 人で出かけていきました。

浜口（夫） その山は昔からよくずれる

ところでした。私と谷上という人が行って、どうしようかと思案していると、ドッという音がして山が崩れてきました。私たちは思わず前へ走りましたが、その土砂が自分たちの身体すれすれで、まさに間一髪という感じでしたので、私たちは危険を感じ、道路から海岸へ飛び下りました。急に自宅のことが心配になり、自動車を停めているところまで 2、3 歩進みかけたのですが、上からはまだ石がバラバラ落ちてくるので、これではとても谷尻まで帰れないと思い、いちみこ市神子というところまで歩いて行って、海岸から道路に上がりまし



た。

神浦に行く海岸伝いの道路を歩いていると、長靴を履いているのに上から雨水が入り、山の上からは石がバラバラと落ちてきます。こんな道を歩いていたら、いつ山崩れにのみ込まれるかもしれないと思い、引き返して山越えして帰ろうと畑を上ってきました。そこは細い道でしたが、ちょっと足を滑らせ、畑の中に足を踏み入れると、長靴がズボッとしてしまうほど土がゆるゆるでした。こんな状態では山道に行くこともできないと思い、人家のあるところまで下りてくると、藤本さんという家に谷尻から電話がかかってきて、「家の人は皆避難しているから、あわてて帰ってこなくてもいい」というので私たちは安心し、バス停で横になりました。そこへ座ると、もう3日も夜昼なしに消防団の活動をしていましたので、谷上君はすぐ寝てしまいました。

目がさめると谷上君が「帰ろう」と言いますので、どうやって帰ろうかと思案していると、海苔養殖用の小さな木の伝馬船があったので、それを借りて帰ろうということになり、持ち主に承諾も得られたので乗り込むと、雨が降り続けているので船の中には水が沢山溜まっています。それを掻き出していると、漁協の浜口組合長がバケツを持ってきてくれたので4人で掻き出し、波を乗り越えて谷尻の波止まで帰ってきました。

2人で船を上引き揚げると、谷上君は家が心配ですぐに帰ったのですが、自分は船の櫓を流してしまうといけないと思い、他の船にその櫓を積みました。それが、私と谷上君の明暗を分けました。谷上君が家に入ろうとしたとき、私は懐中電灯で合図をして別れたのですが、それから1分も経たないうちに谷上さんの家は山津波に潰されたのです。

この頃、うちは小さな店をしていたのですが、水が入ってきたので、近所の人が品物を濡らさないよう座敷の高いところへ揚げてくれていました。しかし、私が帰ってきたので皆帰っていきました。家内はそのとき、水路に山からの水がいっぱいになって流れていたの、その中のゴミを拾っていました。ズドン！という音が聞こえたので、これはいかんと思い、「逃げ！」と叫んだのですが、その言葉が終わるか終わらないうちに、私の家がバーッと前へ飛んできました。

浜口（妻） 家の前に公民館があり、うちと公民館の間は広かったんです。2、3日前、台風が来るからといって、みんながそこへ船を引き揚げていました。私は主人が「逃げ！」と言った時、後ろを追いかけたらもう主人が見えなくなり、家は紙が飛ぶようにバーッと吹き飛んでいきました。主人の姉と中学2年の長男と主人の母親



現在の谷尻地区

が、船が3杯あったところで生き埋めになっていました。

浜口（夫） 私が、「逃げ！」と言って走った時、自分の家が目の前に来たので、そこをよけて走ったのと同時に、浜崎さん宅の蔵に打ちつけられて、気が付いた時には家内が港の先からこちらに向いて走りながら、「お父さん、お父さん」と叫ぶ声が聞こえました。それまで私は、隣の浜崎さんの家のところに押し潰されていたのですが、出ていきました。

浜口（妻） その時主人は、頭からも顔からも血が出ていましたので、「大丈夫？」と聞きましたら「大丈夫や」と返事しました。

浜口（夫） しばらくすると、うちの子どもや母親のうめき声が聞こえました。

浜口（妻） その前、私はみんなに懐中電灯を持たせていたんですが、それは向こうに飛んでいってしまっていました。

浜口（夫） 家族を見つけ、2人で一生懸命出していますと、姉婿が出てきたので3人で救い出していますと、家内の姉の家が、傾斜地の下にあるうちの家のひとつ上であり、そこも潰れていたんですが、どうにか息子が出てきて、「家がみな転がってしまって、どこにも上には家は見えないのや」と言いました。「お父さん、お母さんはどうや」と聞きましたら「まだ埋まったままや」と言うので、「早よ帰って、お前もお父さんお母さんを助け」と言って帰らせました。

浜口（妻） 主人は暗がりの中、生き埋めになった3人を引っ張り出そうとしたのですが、体が綱をのうた（綱った）みたいによじれていますし、いろんなものが覆い被さっていても、道具もないのでスポッととは出てこないのです。おばあちゃん（義母）は、長男のほうを先に出してやってくれと言いますので、主人と頭で物を持ち上げ、お尻や脚で押さえたり、突っ張りをしたりして太い木を突っ込み、息子に「あんたも自分の足を引っ張り」と言いながらやりましたが、息子も背中を7針縫ったほどの怪我をしていましたから、なかなか思うようにならないのです。

浜口（夫） 3人ではどうにもならないから、夜が明けるのを待って吉ヶ浦にいる消防団に助けを頼もうと思い、東が白んできたころ、私は海苔の養殖に使う小さい伝馬船で吉ヶ浦に向かいました。ところが、谷尻で寝ていた吉野の人が丘から必死で懐中電灯を振るものですから市神子^{いちみこ}の砂浜に船を着けたところ、「道がこんなで帰れないから、蒲野まで送ってくれ」と言うのです。私はその人に乗せ、吉ヶ浦の沖から消防団に「山崩れが起きたから、早く皆に知らせて助けてくれ」と叫びながら蒲野へ行き、その人を下ろすと、また吉ヶ浦まで戻って消防団を3人乗せ、谷尻に帰ってきました。帰る途中、海には流木や押し流されたものがいっぱい流れていましたので、船を当てな

いようにし、時に、これは人ではないだろうかとと思われるものもありましたが、先を急ぎ、谷尻に帰ってきました。

浜口（妻） でも、消防団の人たちは来てくれても、恐怖でガタガタ震えているんです。おばあちゃんの上には床柱や畳や床などが載っていました。胸から上はきれいだったんですが、太ももがえぐれ、足首も半分になってひどい出血だったのです。

浜口（夫） 母親を出した後、「負うて、港の方まで行ったらどうやろ」と、他の人は言ってくれたのですが、母親は背中にしがみつ়く力がないし、私も弱っていてしっかり背負うことができません。落ちないよう皆に助けてもらいながら、波止の自分の木の船に向かったのですが、そこまで行った時、母親はもう物を言わなくなっていました。私の背中で亡くなったのです。

浜口（妻） 私はあの時、タオルでもきれ（布）でも探して目隠ししてあげたらよかったのかなといまだにそれは思います。朝まではすごく元気がよかったので、医者がいたら助かっただろうと思います。息子を出すのに時間がかかって、おばあちゃんを出したのは朝でしたから、出血多量で亡くなったんだろうと思います。

あのときのことは今でもよう忘れませんが、水が胸まで来て、それが止まったから大丈夫だと思っていましたら、いっぺんにドーンとききました。山で木などが水や泥や石を堰止め、それが崩れると一気にドツと来る、それが山津波の怖さです。ですから私は若い人たちに言うんです。「一旦水が来たら、引いても大丈夫やと思ったらいかんで」と。後に助け出した息子に聞くと、ドーンと音がしてから一足かわすくらいの間にのみ込まれたと言っていましたから、本当に一瞬の出来事です。私も主人が帰ってこなかったら、外に出ていましたから死んでいたと思います。主人の親戚たちも何人も亡くなり、姉の嫁ぎ先も親が亡くなりました。

朝までかかって子どもを出し、おばあちゃんを出す時、姉婿は「逃げよう」と言いました。お隣の鉄筋の家うちの子ども3人を入れさせてもらったのですが、ここへも水が入ってきたので、「この家が潰れたら、僕らも死ぬ。逃げよう」と主人に言ったんです。でも私は「2人が逃げて」と言いました。「私はお義母さんやお義姉さんを置いて、よう逃げんから」と。その義兄は61歳で亡くなりましたが、後にそのことを何度も言われました。「女ってすごいなあ」と。その時の、生きるか死ぬかというぎりぎりの切羽詰まった気持ちを思い起こしますと、今でも涙が出ます。

災害の後、ショックで仕事になりませんでした。プレハブで避難生活をした後、町営住宅に入りましたが、下の階のお年寄りから「やかましかった」と言われたりして、家がないのはこんなに辛いん

やなと思いました。子どもらも恐ろしい目をして心の傷になったのか、プレハブに雨が降るとバババツと音がすごいので、カバンを放って飛び出します。うちは漁師で、私らが仕事をして帰ってくるまで、子どもらが外で濡れしょぼけて待っていたことがあり、それを見ても涙が出ました。



山津波があった日、私はよその子を1人泊めていました。お母さんが弟さんを連れて入院していましたので、「帰る」と言うのを、「晩ご飯も食べたんやし、喜んでおるんやからおったらええわ」とその子のお父さんに言い、無理に引き留めました。ですから、その子の家が真っ二つに割れ、お父さんも押し流されて脚を何か所も骨折する大怪我をしましたから、おじいさんは孫が死んだとばかり思い込んで泣いていたそうです。そんなことで、その子は命を拾ったように思います。

あの山津波の日、私たちは真っ暗な夜を過ごしましたから、上の家まで潰れていることは朝まで知りませんでした。朝、上を見たら、その子の家だけでなく、みんななくなっていたので驚いてしまいました。うちの蔵も潰れましたが、家が潰れなかったのは鉄筋建てにしていたためでした。

家を鉄筋にしたのは、前の家が傷んであちこち漏り始め、主人が屋根替えしようとしたのですが、親戚の者に「この際、建て替えたら」と勧められ、平屋だった家を鉄筋の2階建てにしました。山津波があったとき、うちには7人いましたから、以前の家なら完全に潰れて、一番犠牲者が多かったんじゃないかと思いますが、あの家のおかげで命が助かりました。

鉄筋で建てようとした時、敷地には大きな石があり、それを踏んだらこっちの石が持ち上がるという具合にフワンフワンになっていましたので、硬い石を敷き、基礎部分をがっちり固めました。余分な費用がかかりましたが、そのおかげで潰れなかったのではないかと思います。マッチ箱みたいな四角い家ですが、天井も普通より50センチくらい高くしておりました。

ただ、災害の時は家にじわじわ水が入ってきて、天井まで砂でいっぱいになりました。災害の後はガスも電気もなくでご飯も作れないから避難するかということになり、役場のお世話で内海の学校や国民宿舎に避難したのですが、精神的なダメージが大きかったのか、自宅は臭いし、ヘドロも入っていて気持ち悪いから帰りたくないと思いました。けれども、自衛隊や近所の人みんなでヘドロを出してくれましたので戻る気持ちになり、今もそ

集落のすべての家が崩れた中で 命を救ってくれた 鉄筋建ての家

浜崎千登世

76歳

谷尻在住

被災者



の家に住んでいます。

9月11日の災害の時、私は外に出ず、家の中にいたのでわからなかったのですが、家が流れる瞬間を上で見ている人が言うには、涙が流れるようにサーッと、あっという間に上から下まで流れたそうです。神戸にいる主人の叔母が言うには、阪神大震災の時、逃げようとした時に履物がなく、割れたものを足で踏んだりしたから、震災後はどんな時もスリッパをそばに置いておかないと寝られなくなったと言います。だから私も、寝る時、消防の人がすぐ服を着られるようちゃんと用意していると聞きましたので、脱いだ時、さっと着られるよう普段から備えておこうと思っています。



稲光のなかに浮かび上がった なくなっていた谷尻の集落

濱岡和彦 61歳 谷尻自治会長 谷尻在住 被災者

51年の災害のとき、私は24歳でした。2、3日雨が降り続き、小さい川が氾濫したりしたのですが、さほど大事だとは思わず、11時頃まで家族でテレビを見て、そのあと自分の部屋へ行って寝ようと思いました。その時、地鳴りというか地響きというかすごい音がして、びっくりして「家が潰される」と思い、そんなにしてもどうしようもないのに柱にしがみついたことを覚えています。



鳴り終わってすぐ外へ出てみると、稲光で谷尻全体が見えたのですが、隣近所にある10軒近く家が、その時、もうなくなっていたのでびっくりしました。そのあとすぐ、真夜中でしたが、うちのすぐ裏の高台というか、道路へ、皆で避難し、雨が降り続く中、ずっとそこに震えながらいました。すると、岡田キミヨさんという人が瓦礫の中から這い出るような格好で出てきたので、あわてて助けに行ったりしました。

鉄砲水や山崩れは突然来ますから、命を守るには早めに避難警告をしてもらおうとか、平日頃から避難訓練を徹底しておくとか、そういう方法しかないと思います。地域には、台風などに備えた避難場所もありますが、谷尻は海岸沿いで、逆に避難場所のほうが危険な場合もありますから、より安全なところを作ってもらおうということをお願いしたいです。



風化することのない 悲しい記憶を乗りこえて

谷上敏晴 72歳 池田(元南蒲野) 在住 被災者

昭和51年9月11日、午後11時25分。記録では20分になっていますが、正確には25分です。その頃、私は谷尻で雑貨、酒、米などを商う店をしながら、勤めもしておりました。また、消防団に入って活動しておりました。

午後11時頃、この時の豪雨は音にしても雨量にしても、この世のものではないように感じました。雷も鳴っていたと思います。合羽を着ていても、外ではほとんど息ができないくらいのものすごい雨でした。降り始めは8日の昼頃で、すごい雨になったのは10日の午後あたり。民家の裏が崩れたというのがあちこちで発生し、その家財などを出しに消防団があちちに行ったりこっちに行ったりしていました。

11日、わが家のすぐ裏が山だったんですが、水や土がいっぱい流れてきたので、何かようすがおかしいと、私たち夫婦と兄夫婦が状況を見に行きました。私はなんだか危ないと感じ、「いっぺん下へ下りよう」と声をかけ、歩きかけたその2、3秒後、山津波が起きました。その時の、数秒の判断で4人が助かったわけです。

それまでの谷尻はよその地区から避難してこようというくらい災害がなかったところでしたから、ここで山津波が起きるとは誰も夢にも思っていませんでした。その山津波によって24人がこの地区で犠牲になり、そのうち15人が私と何らかの関係のある親、兄弟、甥で、私の実家は6人全員が犠牲となり、姉の嫁ぎ先でも5人が亡くなりました。

私の家は海岸から50メートルくらい上がったところですが、12日にそこへ行ったら、天井の倍くらいの高さまで家の瓦礫がありました。谷尻地区は傾斜地なので、実家の上にある3軒の家が空を飛び、ドーンと落ちた格好でした。その中へ入っていくと、首を瓦礫に突っ込んで背中だけ見えている人、手の先だけ見える人、頭から膝まで埋まっている人があり、これはこの世のものじゃないと思いました。その手の先だけ見えたのが、高校生だった私の姪だったのですが、手が動きました。土などをいっぱいかぶっていましたが、幸い少し隙間があり、息ができたので生きていたのです。背中に見えていたのが伯母で、朝まで姪の手を握っていたらしく、逝く寸前に「これでおばあさん死ぬから。もう終わりやよ」と言って離れたところだったようです。その姪を引き出すにも足場がないので、お断りし、伯父の遺体の上に乗って引き出す作業をしました。引っ張り出すといっても、人間の力など弱いものですから、小さな瓦礫から1本ずつ引き抜くしかありません。姪の身体が出てきたとき、太腿には角材が突き刺さっていました。



とてつもない自然に巻き込まれて亡くなるのは、家族にとっては辛い、言いようのない亡くなり方で、その記憶が風化することは絶対にありません。家族も親族も亡くし、あまりにも失ったものが大きかったので、私には立ち直る気力さえ残っておりませんでした。40 日目にある人の教えにより、自分が生き残った意味と、この後どう生きていくかという指針がわかりました。それは、みんなの供養をするということと、私が幸せに暮らしていくことが肉親の願いだから、それを念じて生きていくことでした。

人間は非力ですから、自然の猛威の前にはゼロにも等しい存在だと思います。しかし人間には考える知恵があります。それに立ち向かうのではなく、いかに上手に避難するか、適正な避難するかということに尽きると思います。それも一通りではなく、こういうケースはこう、こういう場合はこうと複数の避難経路を考えておくなど、避難が一番の防御だと思います。



冷たい池の中で生き延びた生後 8 カ月の赤ん坊 自分の生命力を信じ、自分で自分の命を守る

岡 覺 78 歳 二面在住 救助関係者（池田町消防団第 4 分団）



私は 49 年も 51 年の時も消防団員として被災地区に入り、救助活動を行いましたが、51 年には私自身が被災し、すべてを失いました。残ったのは消防の作業服と安全靴、ヘルメットだけです。

竹生は私の家から 150 メートルくらい離れたところで、昼の 12 時に犠牲者が出ました。うちがやられたのは夜の 8 時 35 分です。西村地区は、49 年には犠牲者ゼロでしたが、51 年の災害では 6 人の犠牲者が出ました。

この時、雨は 1 週間で 1400 ミリ降り、私は消防団員として出っぱなしで、家の状況はまるでわかりませんでした。わが家には 6、7 家族が避難していたのですが、私はそのことを知らず、自治会長が「お宅でご飯炊いてもいいか」と言ってきたので聞くと、「実は、これだけの人が寄っている」と、その時初めて知った次第でした。

時間雨量は 93 ミリを記録し、これほど降ると車のワイパーも水をさばけず、前が見えません。負傷者を内海病院へ搬送するのに、海上保安庁の救難船が内海湾に入っていて、その灯が煌々と点いてい

るのですが、全く見えなくなり、その雨が弱くなって船のライトが見えてくると、山に溜まっている水がザーッと一度に落ちてきます。大丈夫かなと思うと、また雨脚が強まり、船の灯が見えなくなるというその繰り返しでした。

私の自宅は、土砂というより1つ20トンくらいある大きな石に破壊されました。幸い6人の家族は無事でした。

土石流が来る前には、それまで流れていた水が止まります。流木などでダムができ、堰き止められるためです。田んぼの土みたいな泥が出てくるのはそれが決壊して落ちてくる前触れで、それに気付いた妻は家に入り、みんなに逃げるよう叫んだのですが、「私はここにおります」と言ったおじいさんは、息子さんやその奥さんとともに亡くなりました。隣家の息子さんは、2人の子どもを抱えて表に飛び出したとき、家が倒れてきたので、わが家の庭に掘っていた深さ1メートルほどの瓢箪型の泉水に入ったのですが、庭石に家がもたれかかった格好になり、上から蓋をされたため、池から出られなくなりました。下の子は生まれてまだ8カ月で、夜の8時半から翌朝の5時くらいまで水に浸かったままでしたので、助け出されたときは真っ白になっていました。深さがあるので、顎を池の縁にひっかけ、水に浮いたままという苛酷な状況で一晩を過ごしたわけですが、強い生命力で3人は助かりました。

家を失った私は、公民館の板の上で31日間寝ました。電気が10日以上停まったままで、電池もなにもありません。小さな裸電球ひとつを発電機で灯していましたが、ガソリンは40分しかもたず、消えてしまいます。すると、池に入っていた赤子が泣き出し、その声でみんなが起きるので、私たち団員3、4人は40分後に目覚ましをかけ、長靴を履いたまま横になり、裸電球が消えないよう交代で番をしました。

こういう体験をした私が防災に関して思うのは、年寄が1週間の備蓄を持って逃げることなどまず無理です。きれいな水でなくても、100度で沸騰させれば、下痢はするかもしれませんが、死ぬようなことはありません。水さえあれば2日や3日は生きられるのですから、水や食糧など気にせず、とにかく自分で自分の命を守ること。これに尽きると思います



救命ヘリや、24 時間対応の救急艇など 2 度の災害を経て整備されてきた救命態勢

前田忠 71 歳 馬木在住 土庄消防本部

51 年の災害の時は、川が氾濫したところへ救助に行きました。ボートを引っ張っていける範囲ですから、あまり遠いところへは行けず、役場近辺だけという感じでした。

氾濫したときは水が止まっているわけではなく、降った雨が山からどんどん流れ落ちてきますので、いわばずっと流れっぱなしの状態

で、立っていると足の裏の砂が流れる感覚があります。

ボンベが流れてきたり、折れて先の尖った木が流れてきて足を怪我する可能性がありますし、腰までの深さになると道を渡る時はロープでも張っていなければ、流されることも考えられます。ですから、女性やお年寄り、子どもさんの場合は、ゴムボートに乗せて避難してもらう必要があります。

水があると車のエンジンがかかりませんので、消防署はいざという時のために、あらかじめ救急車だけは高いところに移動させています。そこから動ける範囲は行くことができるのですが、水のあるところには行けません。ですから 119 に電話していただいても、気の毒で

すが、なかなか対応できないのです。

そういう災害を経て、たとえば道路が土石流で寸断され、救急車が行けない場合でも、防災ヘリコプターで行くことができるようになりました。小豆島の場合、高松までフェリーで約 1 時間ですが、医師や看護師に同乗してもらえばまず安心です。重篤な患者さんの場合、防災ヘリコプターでの搬送も可能ですが、それはドクターが判断をすることになっており、加えて有視界飛行が原則ですので夜は飛ばません。そのため、夜間に救急搬送する場合、以前は海上保安庁をお願いしていたのですが、それは海上保安庁の本来の任務ではありません。ですから、海上タクシーを利用する場合もあったのですが、それにはお金がかかり、患者さんの負担になっていました。しかし高松市消防局の救急艇ができ、24 時間対応してもらえるようになったので、今は安心です。

今は南海トラフの話もあり、各地で避難訓練が実施されていますが、揺れによっては耐震性のない家が狭い道で倒れる可能性もあり、避難場所へ行くことができないことも考えられます。今、自治会単位で実際に避難経路を歩き、空き家があったりすると倒壊の可能性



がありますので、ハザードマップにはそういうのを載せていくそうです。

津波も、たとえば高知沖の南海地震が発生すると、淡路島で津波が2つに分かれ、大阪や神戸の方へ上がる津波と、姫路方面へ東浦を上る津波、それから高松へ向かう瀬戸内海の潮流が増幅された津波があると思いますが、小豆島の内海湾内に入ってくるのがどれかと考えると、主流はやはり東浦を上って、橘、岩谷、当浜、福田に上がるのではなかろうかと思います。

私が現役の時、鳥取で震度5弱の地震が発生しましたが、震度6、6.5が来ると相当傷む家、倒れる家が多いのではないかと思います。どこの家に独居のお年寄りがいると把握していても、各分団は30人少々しかいませんから、何千人近い人を救助するのは不可能です。自治消防団もありますが、若い人が少なくなり、高齢者が多くなっていますから、やはり、住民の皆さんも普段から避難訓練は重ね、その時の状況を見ていかに判断するかという判断力を高め、最終的には自分の体は自分で守る気持ちを持つ必要があるのではないかと思っています。



昭和49年の災害の時は内海分署で勤務しておりまして、当日、雨が降りだしてから分署に来よう電話がありました。だいぶ水がたまっていましたので、着替えを頭の上に載せ、泳いで分署まで来たとき、橘の方で山崩れが起きたから、何人か救助しなければいけない、すぐ現場に行ってほしいと言われました。そこで5、6人が懐中電灯とスコップを持ち、草壁の方を回って安田に車を置き、橘までの2、3キロを歩いていきましたが、土砂が流れて道がズブズブになっており、苦労しながら進みました。

橘の災害現場に着いたら、2、3人の亡くなった人の遺体が目に飛び込んできました。搜索していると生存者がいて、50歳ぐらいの男性が「スコップが腹に刺さり、動けんのか」と言いますので、その人をまず救助することにしました。しかし物を掘り出すのとは違い、生きている人を出すわけですから、少しでもスコップなどが当たると「痛い痛い」と言います。真っ暗ななか懐中電灯一つで、しかも土の中のどこに手があるか足があるかわからない状況なので道具を使うのをやめ、手さぐりしながら人力で掘り出しました。その人を救出し、戸に載せて運びましたが、救助の最中でも上から土砂がバラバラ落ちてくるので、早く夜が明けてほしいと、本当に夜が長く感じられました。ですから朝、海上保安庁の船が沖合に見えた時は、

被災現場を目の当たりにした 経験から思う 「早めの避難」の大切さ

森三郎 70歳 安田在住 小豆消防署員



心底ホッとしました。

それから現場を変え、救出にあたりましたが、休む暇もなく、食べるものもないから、地元で作ってくれたおにぎりをそのへんの水で手を洗い、そのまま食べたことを記憶しています。

51年の時、私は本署（土庄町）の救急隊に所属していましたが、内海町、池田町から要請がありましたので、土石流で怪我された西村地区の竹生、赤坂近辺の人を次々と救急車に収容し、病院へ運びました。また被害の大きかった谷尻、竹生では救出にあたりました。

そういう被災現場を目の当たりにし、災害の怖さやむごさを、身をもって知っておりますので、数年前、大雨が降ったとき、役場から何の放送もなかったので、「大雨洪水警報が出たら、すぐに放送してほしい。そしたら皆が気にとめて次の行動に役立つ」と申し入れたことがありました。この51年の災害のあと、防災行政無線が整備されましたから、この頃はきちんと放送が聞こえますし、雨戸を閉めていたら屋外で放送しても家の中まで聞こえないということで、合併以降、全世帯に個別受信機が設置されました。

51年の時、私も分署の通信室でたびたび119番の通報を受けましたが、「水が来たから、助けに来て」といわれても、「私たちもスーパーマンではありませんから、すぐ助けに行くことはできません。早く避難してください」と言うしかありません。警報が出たら早めの避難をすることが一番。避難が少しでも遅れたら、災害に巻き込まれることを覚悟しなければなりません。また、救助の最前線は危険と隣り合わせですから、二次災害に遭わないよう事前に周りをよく点検し、少人数でもチームを組んで声をかけながら活動することが大事だと思います。



道路、河川などの復旧に汗を流した3年間

岡本安司 64歳 池田在住 復興スタッフ（建設課長）

私は昭和46年に技師として役場に入り、建設課に在籍して5年目に、51年の災害を経験しました。大災害が起きたのが9月11日の夜でしたが、前日の朝早く招集がかかり、夜中に牛ヶ浦の町道法面が崩れ、下の民家に水が流れ込んでいるからそれを処理するよう指示を受け、稲光と土砂降りのなか5人で作業をしました。夜が明け、一度役場に帰ろうということで11日の朝に帰りましたが、その時点ではこれほどの大災害が起きるとは予想もつきませんでした。その後、大雨が降り続き、至るところで道も川もわからない状態になっ

ており、私たちはあちこち走り回りました。谷尻地区で大勢死者が出たということを知ったのは、1日後か2日後のことだったと記憶しています。

建設課は、道路や河川、港湾、漁港の復旧にあたることになり、それに加え、初めての経験でしたが、集落の中に沢山流れ込んできている堆積土砂を取り除いて1か所に集め、その処分場として海を埋め立てる都市災害の仕事を担当しました。これは、瓦礫を取り除いたあとの土砂をいろいろなところへ集めてその量を計算し、最終的に災害復旧の工事の時に出てくる建設残土と合わせ、埋立てをしたわけですが、いろいろ交渉もしながらでしたので大変でした。一番大きい埋立地は、フェリーが発着する池田港の埠頭で、それにつながる道もすべてその土で埋め立てました。それでもまだ処分場が足りないということで、谷尻地区の埋立地や現在「ふるさと村」になっている室生のグラウンドなども災害残土の埋立地です。

それまで、公共施設は建設課、農林施設は農林水産課というふうに分かれていたのを、災害後、「防災建設課」ということで一緒に災害復旧事業にあたることになり、私も3年間ここに籍を置きました。また、旧池田町は技術者や職員が非常に少なかったので、皆が掛け持ちで担当しなければならず、私は建設課の中では一番年下でしたが、谷尻地区を受け持つように言われ、この地区の道路、河川などの復旧にあたりました。

ここでの大きな復旧事業は、谷尻から白浜の灯台まで行く道の建設で、もとは下の等高線上に道があったのですが、山が崩壊し、海まで流れましたので、あちこちで道が寸断されました。谷尻は、川と川のあいだに住居が密集して建ち、水路も生活道路も狭い典型的な海の集落でした。そのために沢山の方が亡くなりましたので、山の上の方へ新たに道路を付け替え、車が通れる幅の広い道路にし、川も拡幅しなければ今後も危険だということで国に提案しました。復旧工事は「原則として原形復旧」という前提がありましたし、提案した工事には多大な費用が見込まれたのですが、国の査定官に現地を見ていただき、承認が得られました。また、復旧工事は3年で終わらなければなりませんので、谷尻の地権者の方々が、とにかく復旧第一ということで協力してくださったおかげで事業を進めることができたと思います。

51年以降にも、かなり雨が降った年もあったのですが、それほど大きな災害は出ていないので、ある程度、復旧工事による防災の効果もあったのかなと思います。また、あのすごかった大災害でしたが、関係者の理解と協力のもと、3年あまりの短



現在の谷尻漁港



谷尻にある記念碑

期間ではたして復旧できるのかと思えたがほぼ復旧いたしました。
このことは今考えると、心を一つに力をあわせると人の力というのは本当にすごいものだと思います。



取り返しのつかない一日遅れの対応となった49年 水道の復旧に奔走した51年 真夜中に出した62年の「全町避難勧告」

高橋玄 78歳 もと助役 安田在住



私は町に在職した期間が40年くらいで、そのうちの約30年は水道課と建設課に在籍していましたので、ほとんどの災害に関わってきたと思っています。

49年は、災害のあった翌日が参議院議員の選挙投票日でしたので、選挙事務にあたらねばならず、対応が一日遅れになってしまいました。そのことに対し、被災した住民の皆さんからお叱りを受けたことが今も脳裏から離れません。

51年は、水道マンとして在任していました。当時の浄水場は、今のような薬品処理の急速濾過方式ではなく、砂だけの緩速濾過方式でしたので、洪水で泥水が入り込むと、たちまち目詰まりして浄化できなくなってしまう、それを取り除くには人力で砂の表面の目詰まりしている部分を剥ぎ取る他方法がありませんでしたので、大変な労力と時間を要します。

一方、洪水で配水管が破断し、詰まったり、破損した配水管は敷設替えるなど、復旧には何カ月もかかりました。

その間の、飲料水確保のたちまちは、自衛艦とか県の給水船で運んでいただきながら、高松市や坂出市、岡山県の玉野市などにお願いで友情給水を仰ぎ、民間の飲料水専用の給水船をチャーターして水を運び、船から加圧して陸上の配水池へ送水、貯水して給水時間になると配水する。一方高台など水の届かない地域へは給水車を走らせて急場を凌いだ。

激務続きで大変でしたが、その時は、これが自分の仕事だと思っていましたから不思議と病気もしませんでした。

62年10月の災害の時は、建設課長で水防本部詰めでした。本部というのは、情報だけで実態がつかめません。あまりにも凄まじい豪雨なので内海ダムが危ないかもしれないと思い、夜中の12時を過ぎてから出向いていきました。その途中、県道寒霞溪公園線にさし

かかると道路脇からものすごい勢いで水が溢れ出て、「これはいかな
な」と急いで内海ダムに行きますと、ダムは満杯です。放流しなけ
ればダムが保たないことが予想され、河川が危険だと判断しました。
あの時間帯に避難勧告を発令するのは非常に過酷だったのですが、
過去の49、51災害の例に学び、豪雨のピークが午前1時から2時
という警戒及び避難にとっては不利な条件にもかかわらず町内全戸
(町内全戸が土石流警戒避難の対象になっていた)に対し避難勧告を
通達しました。その避難勧告を出すかどうかで苦慮したことが今も
思い出されます。結果は、空振りに終わり、多くの町民にご心配と
ご迷惑をおかけしましたが、後の教訓として生きているのでは、と
思っています。

その後、防災を中心に治水、利水の多目的ダムとして小豆広域事
務組合が取り組んだ殿川ダムができ、続いて栗池ダムが、少し遅れ
て吉田ダムが、さらに内海ダムが再開発されるなど、多目的ダムの
完成により災害に強い町になったと思っています。

私は、内海町合併の三大事業であった水道専用の内海ダムを治水
を含めた多目的ダムとして県営事業で3.9メートルの嵩上げ工事を
しましたが、その工事から関わりを持ち、以下上記四ダムの建設に
も少しずつ関わりを持ったことを思い出し感慨深いものがございま
す。



最優先すべき住民の命と暮らし 内海ダム完成を防災事業のしめくくりに

さざむ

平野 節 86歳 神懸通在住 内海ダム地元対策協議会初代会長

私は小学校校長を最後に退職してから、自治会長をし
ておりましたが、内海ダム再開発の話が出てから、平成
18年に、その地元対策協議会の初代会長に就任しまし
た。

小豆島は山が高くて流路の急峻なところがたくさんあ
り、貯水するところもないために降った雨が流れてしま
い、渇水の大きな原因になっていました。特に別当川は
総延長約4キロと非常に距離が短かく、一気に海へ流れ
る傾向がありました。

上流には昭和31年にできた内海ダムがありましたが、
このダムはもともと水道専用ダムとして造ったものだったので、貯
水量は5万トンしかありませんでした。昭和34年、この内海ダムを



治水機能のある多目的ダムとして嵩上げ工事をしようということになり、容量9万トンに改築しましたが、それでもまだ貯水能力の低い小規模ダムでしたから、10日ひでりが続いたら給水制限の心配をし、20日続いたら給水制限に入るという繰り返しで、毎年のように水不足による給水制限がかかり、町民は不便な思いをしていました。

大雨の時も水を貯める能力がありませんでしたから、雨が降るたびにダムの水門を開け、放流のサイレンを鳴らしながら別当川に流すことをしょっちゅう繰り返しておりました。

また嵩上げ工事のとき、ダム自体に重量をもたすため、表の壁はコンクリートで、中に土や石を入れた土石混成堤という構造にしたのですが、昭和36年、台風が来て大雨が降ったとき堰堤を越流し、ダムの土石部分が流出してしまったので、下流沿川に住む町民は恐怖に陥りました。

昭和49年と51年の大雨のときも、貯水能力がないために別当川・安田大川流域を中心に広範囲に氾濫し、支流の西城川では土石流が起きるなど、沿川の人たちに大きな被害を及ぼしました。浄水場や水道管も破壊されて飲み水にも困り、洪水調節ができるダムの建設は、町の防災の締めくくりになるものとして、町民や関係者のあいだでは悲願ともいうべきものになっていきました。内海ダムを利水と治水を兼ねた洪水調節のできる多目的ダムに改修しようという動きは、そうした事態を経て生まれてきたと思います。

ダム建設は大きな公共事業なので、工事が始まると付け替え道路の建設が始まり、ダム工事の期間中にはアクセス道路をダンプカーが走り、騒音や埃、交通面への影響などが出てきますし、周辺環境や景観も大きく変えます。こうしたことを地元の人たちに説明し、合意形成にあたっての要望事項などを聞き取り、取りまとめるのが、地元住民の窓口団体ともいうべき地元対策協議会で、私はその初代会長という大役を仰せつかったのです。

ダム建設にはどこでも賛否両論がありますが、内海ダムもその例外ではありませんでした。当初、草壁地区の住民を対象としたダム建設の説明会があった時、住民の中には、不便さに慣れていたり、別当川の氾濫では死者が出なかったこともあり、喫緊（きっきん）の課題として受け止めようとしない人がいました。ダム建設そのものが不要という意見や、洪水対策は堤防の嵩上げなどで十分対応できるという工事規模の縮小を唱える意見などもありましたが、いわゆる反対派といわれる人が最も大きな理由としたのは「景観」に関するものでした。別当川は溪谷美を誇る国立公園の寒霞溪に源流を発するため、そこに堤長423メートル、堤高43メートルという巨大なダムを建設すれば、寒霞溪からの眺望が損なわれ、ひいては小豆

島の観光にも悪影響を及ぼすということを反対理由に挙げました。

時あたかも「脱ダム宣言」による大型公共事業の見直しや、環境保護に衆目が集まり、景観に関しても各方面から周辺環境にマッチした構造物にすることが求められていた時期でしたので、島外の環境団体による反対運動が展開され、それがマスコミによって大きくクローズアップされたため、私はその矢表に立たされたという側面もあり、対応に苦慮しました。

内海ダム建設には、多くの話し合いとコンセンサスが必要でした。栗地ダムや吉田ダム竣工に伴う必要性の変化、人口減少、環境アセスメント、景観への配慮など、クリアすべき課題がたくさんあり、立木トラスト運動などを展開してあくまでも反対を唱える人たちとの合意は困難でした。私も自然をそのままにしておくことは大切だと思っていますが、やはり最優先すべきは住民の命や暮らしです。できることならば、地域のみなさん全員にダム建設の趣旨に賛同していただきたかったのですが、その意味では未だに残念な気持ちが残っていますが、内海ダムは平成 25 年 4 月 24 日、ダム本体が竣工し、治水、利水ともに安心できる立派なダムができて、水不足も洪水も解消しました。

景観については、ダムの前面に修景盛土をし、ダム堰堤の圧迫感を減じるのに加え、そこへ在来種の植樹をするなど、さまざまな取り組みを行っています。またダム周辺を整備し、桜の木を植えて町民の皆さんがお花見できるよう、また観光客のみなさんにも来ていただけるよう、駐車場、さくら広場、寒霞渓湖広場などを整備中です。ぜひ、楽しみにしていただきたいと思います。



痛ましい経験から得た教訓を活かす、 防災への取り組み

小豆島はもともと災害の起こりやすい地形と地質ではあるが、災害への備えという点では万全とはいえず、それが被害を大きくした側面もあった。そうした被害を少しでもなくしていくにはどうしたらいいのか。両災害の経験から得た教訓をもとに、国、県をはじめ、町の事業行政でさまざまな取り組みを行うこととなった。

この項では、49年・51年災害のその後の復旧事業に言及するとともに、新たに講じられた防災対策について述べたい。

国直轄の治山事業など、 被災地に展開された大規模な復旧事業

【昭和49年災害後の防災対策】

災害後、時を移さず、国、県から被災地である内海町に現地調査団が派遣され、被害状況をつぶさに調査した。二次災害の防止に努めるとともに人心の安定を図ることを目的に、直ちに危険箇所には緊急砂防ダム、谷止工^{たにどめこう}を構築するなどの応急対策が検討された。

県土木部による緊急砂防事業の対象箇所は橋、吉田、岩谷で、高さ10メートル、延長およそ100メートルの堤防を建設し、堤防と直角に水路を設ける計画が併せて立てられた。

一方、およそ200か所にのぼる地すべり箇所のうち、49年度中に、県が橋、岩谷、福田、吉田の4か所で事業費8,100万円をかけて緊急治山事業を行ったほか、普通治山事業として2,900万円で橋など2か所でえん堤建設工事を進めた。

昭和52年から平成6年までの18年をかけて国直轄の治山事業も実施され、その結果、平成16年の台風では高潮被害を受けたが、内海町において土砂災害は起きなかった。

災害から1年が経過した昭和50年8月、プレハブの応急仮設住宅で暮らしていた橋地区の被災者36世帯のうち22世帯が町営の改良住宅に入居した。

この公営住宅はピロティ式の鉄筋コンクリート造りで、1階

部分は居住部分とせずにガレージとする設計がなされた。事業費1億3,300万円で建設された住宅は鉄筋コンクリート5階建てで、3棟22戸。うち1棟に集会などに利用できる共同作業場が設けられた。

こうした復旧事業の一方、県は昭和49年12月、急傾斜地における民間の開発業者による別荘分譲地造成計画2件について不承認の裁定を出した。内海町当浜および神懸通に造成を予定していたものだが、防災および環境保全の観点から不承認としたものである。

昭和49年	9月	避難立ち退き場所を町内各地区で指定。
	12月	橘の餅山不燃物処理場が完成、処理を開始。 同年、7月水害のため「小豆島まつり」中止
昭和50年	2月28日	小豆島高校の北運動場の災害復旧工事完了
	6月	橘地区改良住宅竣工（災害復旧工事）
	7月6日	内海町集中豪雨犠牲者合同慰霊法要（安田小学校体育館）。遺族、関係者、主催者側来賓など約250人が参列
	9月11日	土捨場として草壁地区都市埋立災害工事が竣工
	12月31日	第二種公営住宅福田団地建設工事竣工
昭和51年	2月28日	第二種公営住宅小坪団地建設工事竣工
	3月31日	椎木川災害関連事業完了 同年、公営住宅が福田・小坪に28戸造られ、罹災者が主に入居
昭和52年	3月31日	伊豆川災害関連事業完了

【昭和51年災害後の防災対策】

昭和51年災害を受けて、池田・内海両町では以下のような防災対策がとられた。

1. 防災関連の課を設置

池田町では、災害復旧および防災対策に全力を傾注するために、行政機構の改革を行い、昭和52年1月5日から新たに職員数24人（内臨時職員6人）で防災建設課を設置。災害復旧事業は昭和53年度末までにはほとんどの工事を完了した。

内海町においても、2度にわたる災害の復旧を強力に推進し、防災対策事業に力を注ぐために、町役場の機構を改革して防災課を新設、52年1月1日から発足させた。

同課は、町職員 16 人、臨時職員 6 人に、清水建設、佐伯建設、大成建設の大手 3 社から各 3 人の派遣技術者を加えた 31 人で構成された（その後 32 人に増員）。事務所が手狭なため、庁舎横の駐車場跡に新築した。

当面は災害復旧に業務を集中し、その後は災害防止に重点を移し、万全の対策を進めていくこととした。

2. 防災の日の制定

過去の度重なる悲惨な災害を教訓として、災害の防止と、発生時の損害を最小限に食い止めるために、内海町では毎年 7 月 6 日を「防災の日」と決めた。災害時の住民の身体・財産等を守ること、および住民一人ひとりに防災思想の普及・啓発をはかることを目的し、この日を中心に、町ぐるみの避難訓練や各種行事を行うこととした。

3. 広報・防災（行政）無線の設置

池田町では、51 年災害を教訓に、非常時における通信連絡体制を確立し、被害を最少限に食い止めるために広報、防災（行政）無線を設置した。

これにより、停電中にも役場から町内各地区に広報活動が可能となり、また、道路が分断、電話が不通の時にも無線によって役場との通信連絡が行えるようになった。

内海町では従来公民館ごとの放送に特色があり、地域に根ざした活動をしてきたが、難聴地区や放送設備のない集落もあり、役場からの連絡が手間取ったり、停電のために災害時には緊急放送ができないなどの問題点があった。

その反省にたって、昭和 52 年 7 月に広報無線が設置された。役場（基地局）から町内 16 か所の子局に無線で一斉に情報が届き、的確な情報を迅速に伝えることができるようになった。停電に備えた予備電源設備のほか、小集落や離れた家へは個別受信機を設置。また警報音により、非常事態や避難命令を放送することができる。

また、台風などで道が寸断され、電話が不通になった時のために、広報無線とともに防災（行政）無線が設置された。各地区の無線従事者と役場の交信により町内各地の状況が把握でき、的確な指示が役場から通達できる。

各集落への設置は、大雨や台風が予想される 6 月から 9 月までの間を原則とし、その他の期間は役場の各課に無線機を設置し、行政事務連絡の迅速化など、きめ細かな運用をはかること

となった。

これらの事業は、51 年の災害後に建設が計画されたが、予算面で一旦凍結された。しかし、小豆島東ライオンズクラブから「資金の一部に」と、350 万円が寄付されたことから建設が本決まりになった。

4. 営林署の設置

内海町では、今回の激甚災害による県営事業だけでは復旧が困難なため、高松営林署が小豆治山事務所を役場横に設置した。以後 18 年間にわたり、災害の山に谷止工（コンクリートえん堤）をつくり、崩壊部分へ人工芝や植林をして、山崩れの防止を図った。

5. 総合防災訓練の実施

池田町では、災害から 1 年後の昭和 52 年 9 月 7 日、防災関係機関が一体となり、災害時における心構えと防災活動の向上、および住民の防災意識の高揚と防災体制の強化充実を推進するため、災害通信連絡、非常召集、避難誘導、水防、炊き出し、広報の 6 項目を、総合防災訓練として実施した。

内海町では災害から 1 年後の昭和 52 年 7 月 6 日には、町ぐるみで陸・海・空の大がかりな総合防災訓練が、町民およそ 1 万人が参加して実施された。

また、昭和 53 年 7 月 23 日には三都地域を中心とした防災訓練を実施した。

(51 年災害 復旧事業)

○砂防ダム

51 年災害では、上流に多目的ダムを備えた河川の被害は少なく、砂防えん堤のある地域は災害から免れていることから、多目的ダムと砂防えん堤の有効性が改めて認識された。

このため、52 年度の県予算では、従来の崖崩れ対策から土石流防止という山崩れ対策に重点を移し、県では河川砂防課を河川課と砂防課に分けて砂防事業に取り組むこととした。

激特砂防事業として、池田町では 29 か所、内海町では 30 か所に砂防ダムが設けられた。

また、51 年災害で土石流により家屋全壊 6 戸、半壊 4 戸の被害が出た池田町石場地区では、激特砂防ダムとともに、二次災害防止を目的に治山用の石のダムが建設された。これは山の中腹から頂上にかけて露出している数トンから数十トンの花崗

岩を小さく砕いて、12個の鋼材ボックスに入れたもので、延長16メートル、高さ5メートルの石のダムとなった。

○粟地ダム・吉田ダム

内海町安田に粟地ダムが昭和55年に竣工した。安田大川総合開発事業として建設された同ダムは、洪水調整と上水道用水の供給などを目的とした多目的ダムで、51年災害で決壊、大きな被害をもたらした安田大川の上流に建造された。総貯水量78万m³で、上水道用水は日量1,600m³。

平成9年3月に多目的ダムとして吉田ダムが完成した。同ダムからは小豆郡2町が取水しており、通常は2町合わせて1日に3,800m³の取水を行っている。

・公営住宅

台風17号での被害を教訓にした「災害公営住宅」の建設が昭和52年から始まった。町が国、県の補助を受けて町営住宅として建設するもので、防災拠点住宅に位置づけられた新しい公営住宅は、2～5階建ての中層住宅とし、1階部分は高床式にして、万一の土石流に耐えられる構造とした。また、いくつかの住宅には屋上部分に集会場を併設し、入居者だけでなく、周辺住民の避難場所としての機能を持たせた。

池田町では谷尻地区など3地区で30戸が、昭和51～53年度の3カ年で建設された。谷尻地区、石場地区の住宅については、今後の災害に備えて鉄筋コンクリートづくりのピロティ方式とし、集会室も併設している。

内海町では、52年4月7日の竹生、岩谷、当浜での起工式を皮切りに、総計65戸の住宅を53年3月末までに建設した。将来の災害に備えて、ピロティ方式にしたり、また、集会室を設えているところもあり、住宅が単に安住の場にとどまらず、地域連帯の場にまで発展することが期待された。

激甚災害を経験し、 「災害に強いまちづくり」に取り組む

昭和49年に大きな被害を受けた内海町では、さっそく住民一丸となった防災対策事業を進めたが、その復興の暇を与えずに襲った51年の豪雨で、7人（土庄町居住者1人を含む）の尊い人命と多くの公共財産および莫大な個人財産が一瞬のうちに奪われた。

51 年の災害では、池田町でも、死者 28 人、重軽傷者 28 人、全壊家屋 60 戸など、町はじまって以来の壊滅的な打撃を受けた。

この災害に対して、両町は災害発生直後に災害救助法の適用を受け、さらに「激甚災害に対処するための特別の財政援助等に関する法律」が発動されたため、国、県から行財政の支援を受けながら、復旧および復興事業が急ピッチで進められた。

激甚災害を経験した両町は、数多くの教訓をもって治山治水事業をはじめとする防災対策を積極的に推進し、「災害に強い地域づくり」に取り組んできた。

平成 6 年 7 月 6 日の「内海町防災の日」には、昭和 49 年の大災害から 20 年を迎え、自衛隊も参加して合同救助、防災訓練を実施した。

51 年災害から 20 年が経過した平成 8 年 7 月 14 日には、小豆広域と県の共催により、「小豆島土砂災害 20 周年行事」を小豆島ふるさと村で開催し、3 町の消防団、香川県警、善通寺陸上自衛隊など約 1,300 人が参加して、防災訓練などを実施した。

また、平成 17 年には内海町防災マップ（風水害、高潮津波の災害別に避難経路・場所などを記載）が町内全戸に配布された。

なお、51 年災害から 30 年経った平成 18 年 7 月 9 日に「小豆島土砂災害 30 周年行事」を小豆島ふるさと村にて挙行了た。

(内海町、池田町における 51 年災害後の復旧状況)

昭和 52 年	
1 月 1 日	内海町、町役場に防災課を新設 池田町、建設課を防災建設課に改組
7 月 6 日	内海町、「内海町防災の日」にあわせて総合防災訓練を実施（以後、毎年実施）
9 月 6 日	内海町、広報無線、行政無線の基地局開局
9 月 10 日	内海町、台風 17 号災害犠牲者第 1 回忌合同慰霊法要（小豆島勤労青少年ホーム）。 内海町の災害記録「1400 ミリの爪跡」発行
9 月	池田町、第 1 回総合防災訓練実施（以後、毎年実施）
10 月 15 日	内海町、災害公営住宅西村・岩谷・当浜団地建設工事竣工 ※池田町、52 年度復興事業—広報防災無線の設置、赤坂団地、石場団地、池田団地の建設（鉄筋ブロックまたは鉄筋コンクリート）
昭和 53 年	
1 月 30 日	内海町、49・51 両災害の残土による苗羽地区埋立工事竣工
2 月 28 日	内海町、災害公営住宅草壁団地建設工事竣工
3 月 31 日	内海町、51 年災害竹生川災害関連事業完了 内海町、51 年災害古落川災害復旧事業竣工
	内海町、災害公営住宅小坪・苗羽・橘団地建設工事竣工
	池田町、災害公営池田団地新築
8 月	池田町、災害公営谷尻団地新築
11 月	池田町、谷尻川砂防ダム、石場南川砂防ダム完成 ※池田町、53 年度復興事業—谷尻団地建設（鉄筋コンクリート）
昭和 54 年	
3 月 31 日	内海町、51 年災害西条東川・西川災害関連事業完了。 内海町昭和 51 年災害復旧工事完了（治山ダム 127、砂防ダム 49、その他で総額 47 億円強）
4 月 27 日	内海町、51 年災害の土捨場として橘漁港災害埋立工事竣工
6 月 1 日	6 月 1 日 内海町、町役場防災課廃止（52.1.1 発足）
昭和 55 年	
3 月 19 日	内海町、51 年災害の残土による草壁地区埋立工事竣工
3 月 31 日	内海町、51 年災害中筋川災害助成事業完了
7 月 7 日	内海町、49・51 災害の犠牲者の霊を鎮め、平和な郷土建設の願いを込めて、馬木埋立地に「やすらぎの塔」が竣工、除幕式、法要が行なわれた
8 月 16 日	内海町の「小豆島まつり」8 年ぶりに開催、40 連、約 2500 人が参加
11 月 26 日	内海町、51 年災害土捨場として馬木地区災害埋立工事竣工 ※池田町災害対策事業は 55 年まで毎年施行された
昭和 56 年	
3 月 31 日	内海町、51 年災害安田大川河川激甚災害対策緊急事業完了
8 月 26 日	内海町、51 年災害の残土による芦浦地区埋立工事竣工

別当川沿川の水害を防ぎ、水不足を解消するため 内海ダムを再開発

急勾配の河川・別当川に必要な 抜本的な治水対策を

内海ダム再開発事業は、香川県と小豆島町が「別当川総合開発事業」の一環として、「洪水調節」「新規水道用水の開発」「流水の正常な機能の維持」を目的とした多目的ダムを建設するというもので、平成 25 年に竣功した。

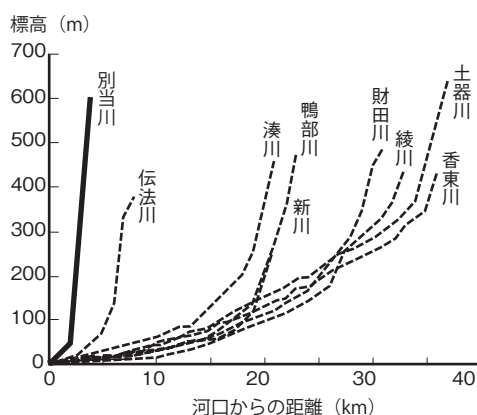
別当川は急勾配の河川で、下流域では古くから洪水による被害がたびたび発生していた。昭和 34 年、コンクリートと土石の混成堤である旧内海ダムが完成したが、集水面積に比べ洪水調節容量が小さいことから、昭和 36 年の台風 17 号によりダムの上部から越流し、ダム堤体下流の土石部分が流出してしまった。昭和 49 年と 51 年には、集中豪雨によって川が氾濫し、堤防の決壊や落橋、住宅の浸水といった大きな被害が発生し、抜本的な治水対策を図る必要に迫られた。

大渇水による給水制限の解消

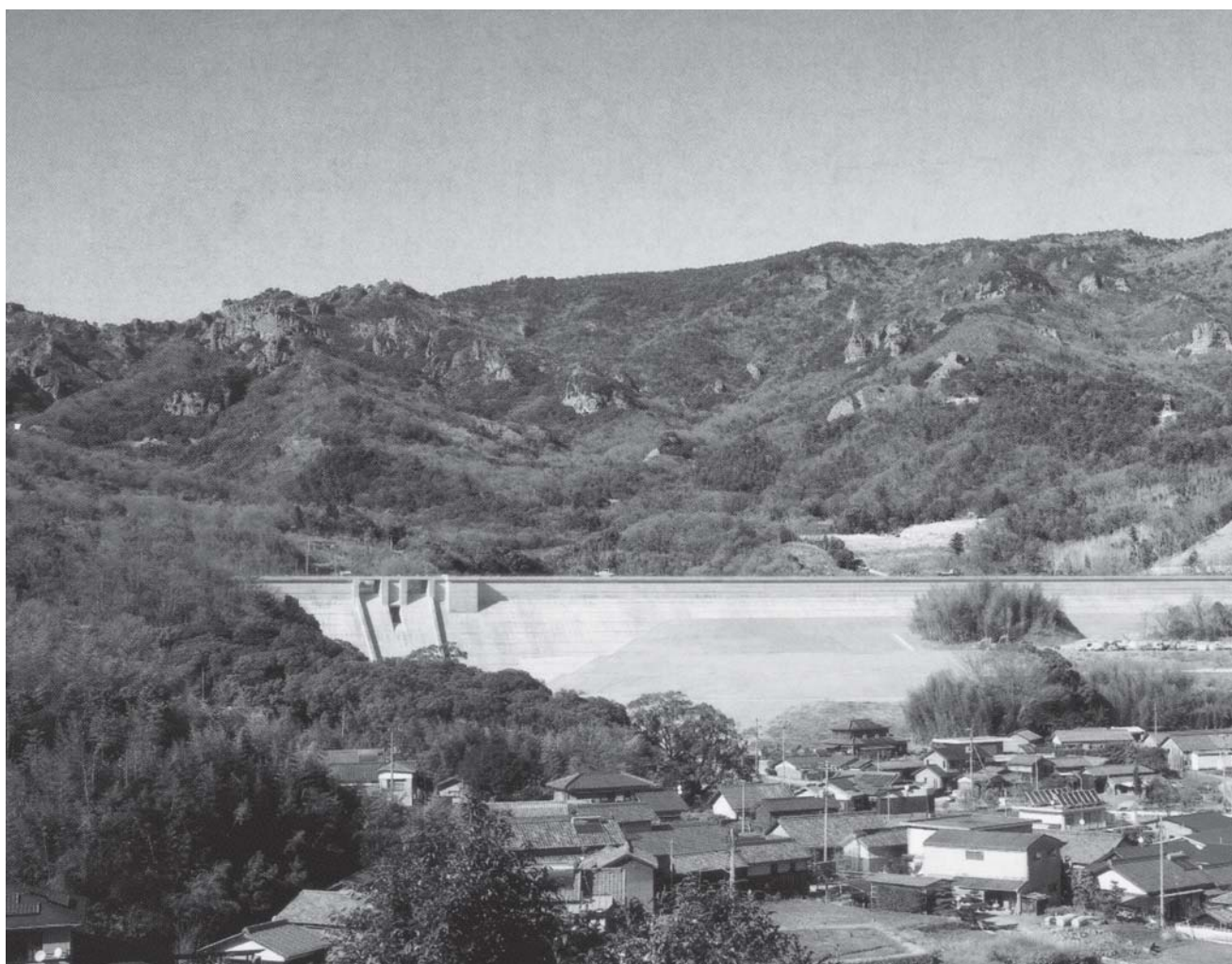
小豆島では、降った雨はたちまち海に流れ、年間降水量の 3 分の 2 が無効水として海に流出してしまう。昔から「3 日日照りが続くと干ばつになり、3 日豪雨が連続と災害が起きる」ということわざがあるが、小豆島はその典型的な地形で、「渇水」と「洪水」による災害が繰り返されてきた。

渇水が著しかったのは昭和 59 年と昭和 60 年で、夏以降雨らしい雨がなかったために 2 年連続の渇水となり、給水制限を余儀なくされた。かんがい用水（ため池）の転用や、地下水、河川

■香川県内主要河川のこう配



内海ダム



完成した内海ダム

水の揚水などあらゆる手段を講じたが、使用水量に見合う水が確保できず、同年12月16日から67日間にわたって、1日16時間断水（8時間給水）という給水制限を実施。昭和60年も前年を上回る渇水で、10月16日からの40日間は14時間断水（10時間給水）、11月25日からの124日間は1日16時間断水（8時間給水）という厳しいものになった。

過去、最も厳しい渇水は昭和53年で、1年のうち実に210日間にわたって給水制限を実施した。そのほとんどが1日19時間断水（5時間給水）で、高松市、坂出市、岡山県玉野市から友情給水をいただき、なんとか住民の生活を守った。

治水・利水の両面から望まれた早急な対策

小豆島では、こうした洪水と渇水が毎年のように繰り返され、防災対策と水資源の確保、つまり治水と利水を兼備した多目的



旧内海ダムと内海ダム



堤頂長四国一 423 メートル 内海ダム全景（右岸側から）

ダムの建設は4万島民の願いであり、島の発展のためにも緊急かつ重要な課題となっていた。年間降水量が少ないため、たびたび深刻な水不足に見舞われ、緊急的に給水船やため池からの取水に頼るなど、不安定な水源に依存せざるを得ない状況に置かれ、安定した水源を確保する必要があった。

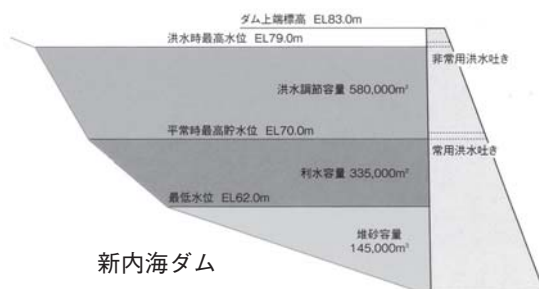
こうした治水・利水の両面から早急な対策が望まれ、内海ダム再開発事業が進められることになった。

①洪水調節

洪水調節とは、ダムから放流する水の量を抑え、下流の洪水を防ぐことで、新内海ダムは最大流量毎秒130立方メートルのうち50立方メートルの洪水調節を行い、別当川流域の水害を防止する。

■新旧ダムの貯水容量配分図

旧内海ダム



新内海ダム



土木施設見学バスツアー



県道のり面への植樹

②新規水道用水の開発

小豆島町における水道用水として、新たに日量1,000立方メートル（既得水道用水を合わせて日量2,000立方メートル）の取水を可能とする。

③流水の正常な機能の維持

河川が本来持っている機能を維持するため、渇水時にはダムから水を流し、生態系や水質、河川景観を保全する。

環境および景観への配慮

香川県では、ダム事業が周辺環境に与える影響をできるだけ小さくするために、自然環境、動植物の生態、景観に関する専門家、学識経験者らで構成する「香川県ダム環境委員会」および「内海ダム景観検討委員会」を設置した。

●香川県ダム環境委員会

ダム建設による周辺環境の変化に伴う動植物の生息・生育環境への影響について、評価・検討を行う。

●内海ダム景観検討委員会

内海ダム再開発および貯水池周辺の整備を進めていくうえで、周辺地域の自然景観と調和の取れた、より良い景観形成を図るための検討を行う。

景観への取り組み

景観検討委員会で決定した方針に基づき、以下のような取り組みを実施した。

- ①ダム下流には、周辺環境と調和させるとともにダムの圧迫感が低減するよう、修景盛土をして緑化を行った。
- ②ダム下流面の水平打継目を強調することにより分節を行い、スッキリとした印象にした。
- ③掘削法面は、できるだけコンクリート部分が見えない工法を採用し、草類に加えて在来種の低木の種子を配合した緑化を行った。また、盛土法面は、苗木を用いた緑化をした。
- ④ダム本体のデザインは、ダム上端より上の構造物（取水塔など）を堤体内に取り込み、上端のラインを揃えてスッキリさせるなど、シンプルなものとした。

⑤車両用ガードレールは溶融亜鉛メッキ仕上げとし、素材らしさをアピールするとともに、道路から外側が見やすいガードケーブルを基本とした。

内海ダム



ダム諸元

位置：別当川水系別当川 小豆郡小豆島町神懸通

型式：重力式コンクリートダム

堤 高：43.0 m

堤頂長：423.0 m

堤体積：165,000m³

総貯水容量：1,060 千m³

有効貯水容量：915 千m³

洪水調節容量：580 千m³

利水容量：335 千m³

事業経過

平成 9 年度：実施計画調査事業採択

平成 14 年度：建設事業採択

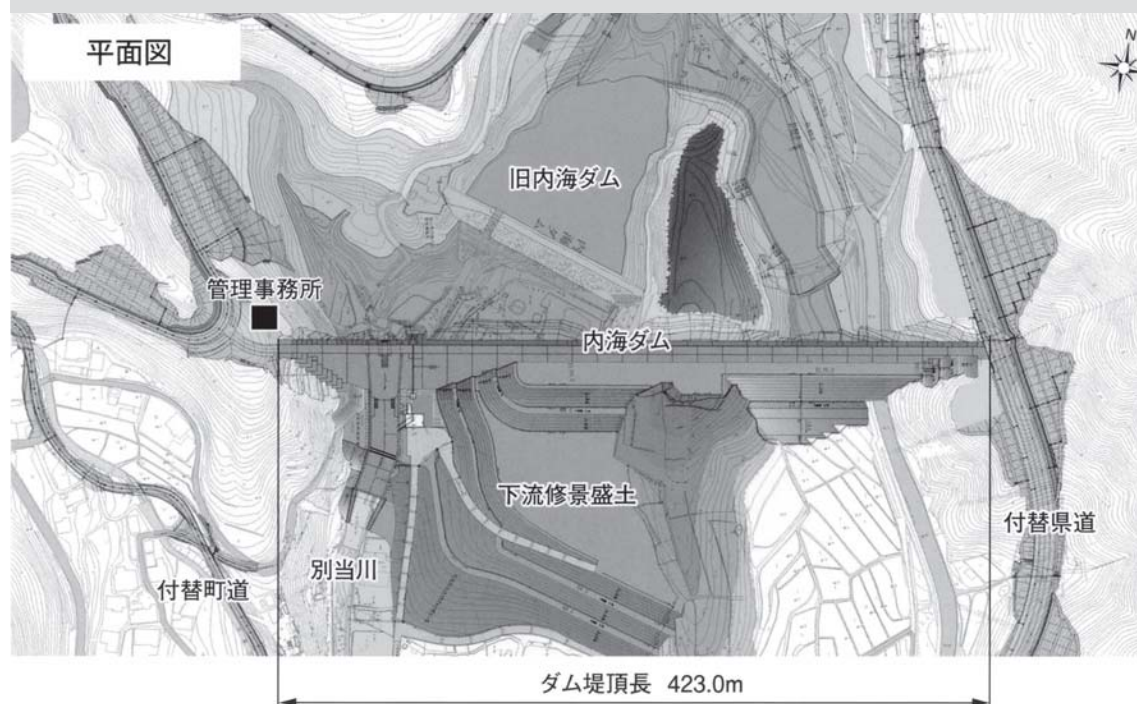
平成 16 年度：用地買収着手

平成 21 年度：ダム本体工事着手

平成 22 年度：ダム本体コンクリート打設開始

平成 24 年度：ダム本体コンクリート打設完了

平成 25 年度：事業完了



資料編

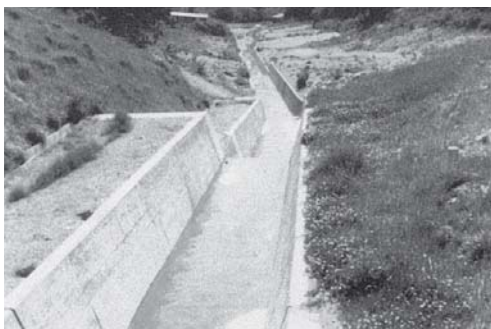
満身創痍だった山、まち、道路、漁港が
力強い姿となってよみがえった。

河川・水路整備

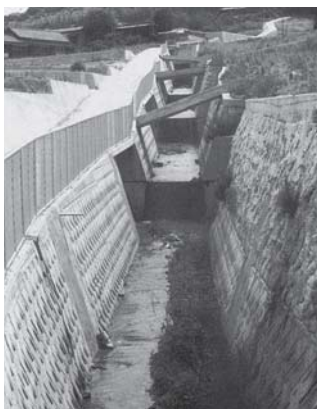
福田地区



竹生川（昭和53年3月30日完成）



宝生丸山水路（昭和53年3月30日完成）



谷尻川
（昭和52年3月28日完成）

池田大川
（昭和54年3月30日完成）
上地地区農地復旧
（昭和53年3月30日完成）



土砂崩れ・土石流対策 整備

山腹工事

二面地区石場



谷尻地区（谷尻地区農地復旧）
（昭和54年2月20日完成）



土砂崩れ・土石流対策 整備

仲人石山



施工前



施工直後



施工後 3 年



現在

西村小見山



施工前



施工直後

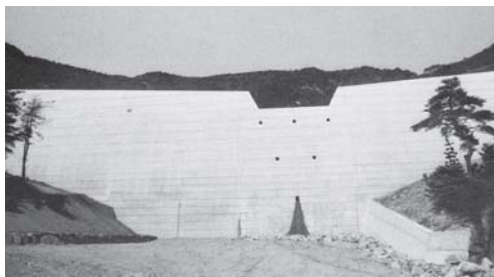


施工後 5 年

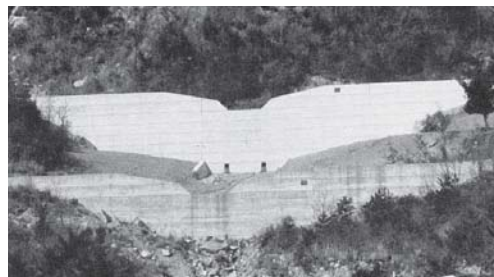


現在

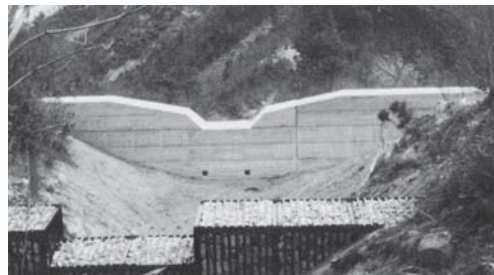
砂防ダム



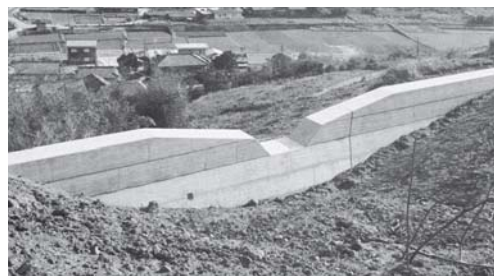
赤柴川（上地）（昭和54年3月完成）



石場（昭和53年3月完成）



大谷川（室生）（昭和53年3月完成）



賢東（吉野）（昭和54年3月完成）



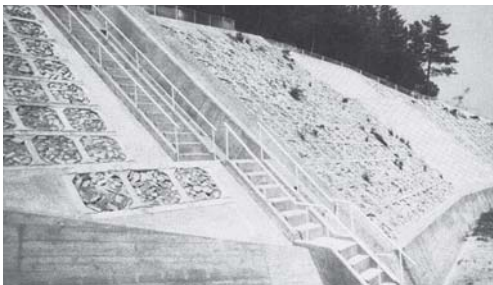
吉ヶ浦川（昭和53年11月完成）



大石ヶ谷（中山）（昭和54年3月完成）

崖崩れ対策 整備

法面保護・補強



吉ヶ浦（昭和54年3月完成）



県道三都港平木線（二面）（昭和53年3月2日完成）



清水谷（平木）（昭和54年完成）



県道三都港平木線（目見ヶ谷）（昭和54年4月30日完成）

道路 整備



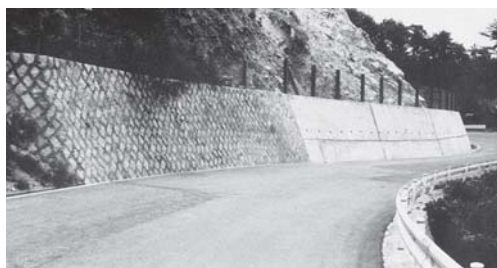
県道蒲野内海線（現県道蒲野西村線）（蒲野）
（昭和53年8月25日完成）



谷尻白浜線
（昭和53年
3月30日完成）



県道小豆島循環線（現国道436号）（丸山）
（昭和52年3月30日完成）



柿の木谷サレ線（昭和53年3月30日完成）

ため池 整備



池田大池（昭和53年3月30日完成）

港湾 整備



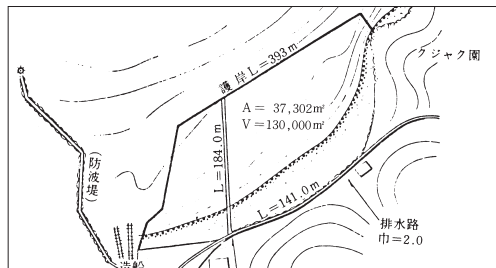
福田港



福田港（昭和55年春完成）



谷尻地区の埋立て（昭和53年3月31日完成）



平木地区の埋立て（昭和54年3月31日完成）

小豆島 災害の記憶

発行日：平成 26 年 11 月 19 日 発 行：香川県小豆島町 制 作：株式会社ぎょうせい

出 典

香川県小豆郡内海町「昭和 49 年 7 月台風 8 号による集中豪雨 災害の記録」…………… 昭和 50 年 7 月 6 日発行
香川県小豆郡内海町「昭和 51 年 9 月台風 17 号による集中豪雨 1,400 ミリの爪跡」…………… 昭和 52 年 9 月 10 日発行
香川県小豆郡池田町「昭和 51 年 9 月台風 17 号の災害と復旧の記録」…………… 昭和 54 年 3 月 30 日発行
香川県小豆郡内海町「内海町史」…………… 昭和 49 年 3 月 30 日発行
内海町「内海町史年表（上・下巻、追録）」…………… 平成 13 年 10 月 22 日発行
香川県小豆郡池田町「池田町史」…………… 昭和 59 年 10 月 3 日発行
香川大学小豆島災害調査研究班「小豆島災害調査研究報告ー 7617 台風による災害ー」…………… 昭和 52 年 12 月発行
高知営林局高松営林署小豆島治山事業所「小豆地区民有林直轄治山事業の歩み」…………… 平成 6 年 11 月発行
香川県「別当川総合開発事業内海ダム再開発」…………… 平成 25 年発行
社団法人全国治水砂防協会「89 人の体験者が語る土砂災害の記録 あの日、あの時」…………… 平成 19 年 9 月 1 日発行
内海町図書館所蔵「新聞記事スクラップ帳」…………… 昭和 49 年 5 月 30 日～昭和 54 年 1 月 10 日 全 8 冊